だからこいつの青春ラブコメはまちがっている

rinta

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そして彼らのまちがえた青春が始まる。

目次

こうして瀬谷壮介の青春が始まった　1
そして彼は奉仕部に足を踏み入れる　15
だが彼らはそこから離れない　――　27
そして彼らの間違えた物語が始まる。　41
そして彼の過去は黒く染まっていく　56
やはり彼は疲れている　――――　69
やはり瀬谷姉弟はどこかおかしい　86
高津克はいわゆるリア充である　――　104
つまり茅ヶ崎千賀は女っ気がない　116
すなわち茅ヶ崎千賀は先輩思いである　128
変わらず瀬谷壮介の日常は進んでいく。　――――――　154
変わらずに雪ノ下雪乃は考慮する。　164
きっと比企谷小町は誰よりも優しい　175
どうであれ瀬谷壮介は不憫な一日を送らされる　――――――　188

やはり比企ヶ谷小町は色々とすごい　199
そして彼、彼女は邂逅する。――　208
とかく雪ノ下陽乃は不気味である。　216
されど彼と彼女の関係は特に変わらない。――　224

こうして瀬谷壮介の青春が始まった

生物とは一人で生きていけばいくほどにその限界性能をあげられると考えられる。
それは崖に落とされた百獣の王がしかり、人外魔境で生まれた食虫植物しかり。
孤独という環境は生物の本能を極限まで刺激させ、本来ある進化を促す効果があると推測できる。
そしてそれは人間にも当てはまって当たり前の話でもある。いや本来、思考という行動がとれる人間こそ真っ先にこの論理に気づかなければならないはずだ。だがしかし現代社会がその事に全く気付かれていないのは、然るに人間が孤独という環境に恐れを抱いているからであろう。
しかし、人間の進化のためにはその孤独に立ち向かわなければならない。故に人は皆、孤独に適応されなければならないのだ。
結論を言おう。
ボッチこそ……　正義である

「瀬谷…　これは本当に君が書いたのかね？」
「……」
　現在放課後の職員室。
　俺は古文の教師、平塚静女史よりありがたくもない長い説教をされている真っ最中だった。
「君がこんな支離滅裂な作文を出すとは夢にも思わなかったが。まさか私が提示した作文のテーマを忘れたか？」
「…　確か、高校に入学しての感想とこれからの目標について、でしたっけ」
　面倒極まりない説教を話し半分で聞き流しながら、平塚女史の質問に適当に答える。
「あぁそうだ。なのに何だこれは？感想は書かれてない他、君はこの高校生活で何になるつもりなんだ？」
「…　孤独に過ごしたいんじゃないんですか？別に望んでませんけど」
　君が書いた作文だろうが…、とぼやきながら平塚女史はため息をはいて、懐からタバコを取り出した。
　…　俺は別に気にしないが生徒の前でその行為はいかがなものなんだ？まぁ、俺たち以外誰もいないが。

「・・・ 私はこんな残念な作文を書く生徒をもう一人知っているんだがね。たしか名前は「ひ」から始まる男だったはずだ」

その話を聞いて、俺は平塚女史に気付かれないぐらいに小さいため息をはいた。もうバレてるという確信をもった諦めのため息だ。あと、やはり頼むんではなかったという後悔の念も入っている。むしろこちらの方が多い。

「その反応ではやはり彼が書いてたか・・・ 意外だな、彼に一年の知り合いがいたとは。まぁ、それについては今はどうでもいい。瀬谷、君は部活に入っているか？いないな。よしついてこい。」

平塚女史は返す暇も与えないほどの早口で話を終わらせ自分のデスクから立つと、既に回れ右をしてエスケープを試みようとしていた俺の襟首をもち、強引に引っ張っていった。

「・・・ 暴力反対だ」

「暴力ではない、折檻だ。それに君は宿題を他人に任せるという罪を犯したんだからな。罪には罰を与えないと」

「・・・ 笑いながら言うな、生き遅れ女史」

「あぁ？なにか言ったかい、瀬谷？」

「・・・ いや、何も」

般若のような顔を一瞬見せた平塚女史に俺はもうなにも言えなくなった。
そのあとも結局俺は平塚女史に抵抗できないままおとなしくついていくしかなかった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「さて、着いたぞ。」
「ここ、どこだよ・・・」
平塚女史につれてこられた場所は、いつもの俺なら全く寄り付くこともない特別棟の校舎の中だった。
そして目の前には詳細不明の謎な教室。中からは時折声が聞こえてくるが、壁越しのため男女の区別すらつかん。
はっきり言うと怪しさ満点である。
「なに。少し君に教師の忙しさと言うものを教えてやろうと思ってな」
そういうと平塚女史はおもむろに目の前の教室のドアを開き、ずかずかと入り込んだ。
「はぁ・・・」
もはや何も言うまい。平塚女史に目をつけられることをしてしまった俺が悪いのだ。
そう思いつつもやりきれない感情をため息と共にはき、俺は平塚女史に続いて教室の

中へはいった。
「失礼するぞ、雪ノ下」
「… ノックを、といつも言っているのですが。平塚先生。」
教室の中へ入っていくと凛とした美しい女性の声がまず聞こえた。しかし、その声の中には若干の諦めと呆れが入っており、似合わない哀愁漂わせるものとなっていた。ていうかこの特徴的な声…
「… なんで雪ノ下雪乃がここにいんだよ」
俺は斜め前にいる平塚女史の背中を睨み付けながら独り言のように呟く。（実際独り言だが）
雪ノ下雪乃。その存在はこの総武高校の生徒で知らないものはほとんどいないだろう。実力テストでは毎回学年一位。国際教養科に在籍して、過去に留学経験もあり、父は建設会社の社長と、もはや非の打ち所の無いエリートの中のエリートである。
因みにソースは俺がこの教室に入ってきてからずっと驚いて俺を見ている、目の腐ったあの男からだ。
つうかその目でこっち見んな。こっち来んな。
「おまえ、なんでここに… って、もしかして国語の担当平塚先生だったのか。てことはあの作文見られて…」

「やっぱてめえに任せたのが間違いだった…
つうか最初から異常だと分かってんならこんなもん書いてんじゃねぇよ…」
俺は片手に持っていた謎のボッチ進化論についての作文をそいつに投げつけるとそいつはハッ、と鼻で笑って謎の持論を言い出した。
「おまえが押し付けてきたんだろうが。いいか、俺はなにも関係ないからな？ただ目付きの悪い不良な1年から脅されて仕方なくかいたってことだからな？」
「おい、てめえ…」
そんな持論に納得する俺でもなく、逆にこいつに若干の呆れを覚え、視線を平塚女史達の元へ戻すと、雪ノ下雪乃がこちらを怪訝そうな目で見ているのが目にはいった。
「ところでさっきから気になっていたのですが、そちらの目付きの悪い人は誰ですか？見れば、比企谷君と同じ種族に属してそうですが」
「…　おい、俺をこんな人生駄目男といっしょにすんじゃねぇ。俺は全うな人生送ってるぐらいの自覚はあんだよ。あと、目付き悪い言うな」
「待て、それじゃあ俺が全うな人生すら送ってないみたいだろ」
「あら、比企谷君は人の世の中だけでなく哺乳類の範囲でもまともな生き方をしているとは思わないのだけれど」
「人の括りからでさえはずしてんじゃねぇよ。あと万が一俺が全うでなくても、一人で

そんな全うじゃない世の中生きてるんだぜ。逞しく生きてんじゃねぇか。さすが俺」
「また屁理屈を捏ねて…
自分で自分を哀れみないその歪んだ… いえ、腐った根性だけは認めてあげるわ」
「… あ?」
俺はこの時、少しばかり違和感を感じた。
俺の知っているこいつが異性に対してこんなに饒舌な訳がないのだ。
ましてや雪ノ下雪乃のような超絶美少女には噛むかどもるか言葉に詰まるかのどれかのはずだ。
なのに先程から噛まないどころかいつもより舌が回っているようにも見える。
(雪ノ下雪乃の仕業か?)
そのような考えに至るが、なにしろ俺はこの奉仕部の実情を知らない。
知らないことを語るのも考察するのも恥ずべきことだ。
(気にしたら負け、か…)
とりあえずそのように考えをとどめておき、俺は流れに身を任せることにした。
「話を戻すのだけれど彼は誰なのですか?まだなにも聞いていないのですが」
「ああ、そうだったな。彼は瀬谷壮介。一年生だ。素行不良に加え授業怠慢と比企谷とは違ったどうしようもない生徒でな。少しここで反省させようと思ってる」

「そうですか…　しかしこういう人間は自分の欠点弱点弱み所をを自覚すればすぐに更正するでしょう。どこかの腐った目をした人と違って」

平塚女史と雪ノ下雪乃はそう俺を評価し、遠慮も礼儀もなく俺を哀れんだ目で見てくる。というか授業中に寝て、制服を少し乱して、宿題を他人にやらせただけでなんでここまで言われなければいけないんだ。というかあいつは更正の余地すらないのかよ。もはや生きてる意味ねぇだろ。なんなら犬の方がまだ役に立つ。

「…　つーか全く話についてこれねぇんだが、まずここはどこなんだ？」

話聞いてる限りじゃなんかの部活なのか？」

俺は先程から気になっていた質問を平塚女史に吐く。すると平塚女史はおもむろに自分の腕時計を見てそういえば、と呟いた。

「まだ君になにも説明してなかったな。しかしこのあと少し用事があってな、挨拶がてらに雪ノ下や比企谷にでも聞いてくれ。あ、あと比企谷。君には後日、そのレポートのツケを払ってもらうからな」

「か、勘弁してください…」

「それは無理だ。では、仲良くやれよ」

そういうと、平塚女史は颯爽と翻り、教室の外より出ていった。

「……」

そして残ったのは僅かな沈黙。
その沈黙を破ったのはもしかしなくとも俺だ。
「… それじゃ、俺帰るから」
「待ちなさい」
俺の帰宅宣言に対し、間を与えずに制止を呼び掛けたのは雪ノ下雪乃のよく透き通る声だった。
「私は平塚先生からあなたを更正するように頼まれたのよ。勝手に帰ってしまっては少し困るのだけれど」
「… じゃあ、俺の更正は無事完了したってことにしてくれ。俺はここで厄介になるつもりはない」
「頼まれた依頼は中途半端にさせないのが私の持論なのよ。それに私は虚言が嫌い。故にあなたの更正は完璧に完成させて完了させるわ」
「… はぁ」
まためんどくさい女に絡まれたな。
今日は女難の相でも出てんのか？
つーか…
「… 見る限りじゃ、そこの死んだ魚の男の更正も終わってそうにないじゃねぇか。俺

のことはいいからそいつをどうにかしろよ。そいつは変わらなきゃ社会的に不味いレベルだ」
「あら、良かったわね比企谷くん。後輩から心配されてるわよ。あなた達がどんな関係なのか全く知る由も無いもないのだけれど、貴方なんかを心配してるのだからそれはもう親密なのね、羨ましい」
「はっ、別にそんな仲良くなんてねぇよ。知り合いなのは認めてやるが、親密な関係なんて鼻で笑えるな。そういうことは海老名さんの思考のなかだけでいいっつうの」
「…　その海老名つう人については知らねぇが、失礼な勘違いはやめてくれ。俺はこいつとは知り合いたくもなかったんだからな…」
「意見が合うわね。確かに比企谷くんと関わっても得なことなんてないわ。いいえ、むしろ知りたくもない残念な過去を知ってしまい逆に損をしてしまう。本当にあなた生きてる意味をもっているの？」
「もはや存在意義すらも否定させられたか…　!?
　つうか俺だって好きでこんな過去背負ってンじゃねぇよ。むしろ放りだしてぇよ、投げ捨ててぇよ、なんなら記憶喪失にでもなりてぇよ！」
「そう叫ばないでもらえるかしら。
　貴方の聞きがたい声が耳に残ってしまったらどうしてくれるの？もはや苦行じゃな

いかしら」
「…　苦行っつーより地獄だな」
「おい、ダブルパンチの罵詈雑言は俺でもきついところがあるぞ」
閑話休題
「…　つうか、更正って世間一般の高校生が普段使う言葉じゃねぇぞ。いったいここは何してるところなんだよ」
「そう…　ではクイズを「奉仕部だよ」…　比企谷くん」
俺からの問いにクイズで答えようとした雪ノ下雪乃は、自分の話の途中で割り込んできて、しかもその答えを言ってしまったそいつに対し、強い睨みを送りこんだ。
「いや、お前のそれ分かりにくいしほぼノーヒントじゃん。答えられんのよっぽどひねくれてるやつか頭いいやつだけだぞ」
「ひねくれてる貴方が言える台詞ではないわね」
「うっ…　まぁ実際答えられなかったわけだが」
「…　奉仕部ねぇ」
その名からして恐らく問題の生徒や悩みを抱えた生徒に対して何らかの奉仕をする…　というのが主な活動内容だろう。
なるほど、あの平塚女史が好きそうなことだ。熱血教師に憧れるあの人ならヤンキー

母校に帰れずとも、こうやって悩みを抱えた生徒を助けることをしたいのだろう。今の俺にとっては全くもって迷惑でしかないが。

「…　つまりは俺はこの奉仕部とやらで何をすればいいんだよ」

「あら、物分かりがいいのね。誰かとは大違い」

「…　そういうのはいいから質問に応えろ」

　この女のあいつに対する突っかかりたい衝動は一体なんなんだ。一々暴言吐かなきゃ生きていけねぇのかと心のなかで愚痴る。

「そうね…　基本的には奉仕部は悩みを抱えた生徒を手助けしてあげることが活動の内容。でも時々手に余る問題を抱えた生徒がいるから、そんな生徒を部員にさせ、その性格の改善に掛かる、というのがもうひとつの内容よ」

「…　回りくどぇな。つまりは俺はその問題児でこの奉仕部とやらにはいって性格の改善に勤めろっつーことだろうが」

「…　本当にあなた物分かりが良いのね、意外だわ」

「物分かりよすぎて気持ち悪いときあるがな」

　黙れ、腐った魚。

「はぁ…」

　きっと俺がもし異論反論抗議質問抗弁口応えしたところで、あの熱血女教師もどきに

この生真面目女生徒のことだ。無理矢理にでもここに置いていくだろう。
それならばここで言い訳するのももはや億劫。適当に高校生活を過ごす分には支障はないと察し、俺は諦めの境地にたち、近くの椅子を引っ張り出して座った。
「… やりゃあいいんだろうが、やりゃあ」
「諦め早すぎんだろ、お前」
「あなたと違って物事の空気が読めるだけでしょ。それにそれはとても良いことよ。誇っていいわ」
「… ソレハヨーゴザンシタ」
高校を入学し一ヶ月ほどしたある日、俺のだるく面倒で億劫な部活動はこうして始まっていった。
しかし、どうしても思わずにはいられないことは…
「心こもってねーな、おい。あと雪ノ下、俺は空気を読めないんじゃねぇ。自分の意思を曲げないだけだ。そこんとこ間違えんな」
「そこを誇られても返しに困るのだけれど…」
つまり俺のこれまでの平穏生活は幕を閉じたということだった。
(だりぃ…)
椅子に深く深く腰を掛けながら、俺はそれ以外の感想を絞り出すことはできなかっ

た。

そして彼は奉仕部に足を踏み入れる

俺が奉仕部とやらに入り、ちょうど２４時間程たったある日（というほどでもない）。
俺は授業が終わり少々の解放感に包まれているその体をそのまま奉仕部の部室へ・・・
ということなどせず、昇降口へ向かわせた。
当たり前だ。誰があんな無理矢理に入れられた部活動などに自主的に行くものか。
なんなら学校すらサボってもいいレベルだ。
しかし、そんな愚行が許されるほど世界はまかり通ってるわけでもなく、俺は昇降口へ向けたその足をやむなく止め、一つのため息をはいた。
「はぁ・・・」
「何をしているのかしら、瀬谷くん?あなたのクラスはまだホームルーム中でしょ」
俺の目の前に雪ノ下雪乃がいた。
この際なぜ雪ノ下が俺のクラスのホームルーム終了時間を知っているのかや、お前こそホームルームはどうしたなどという突っ込みはしないでおこう。
今俺が気にすべきはどうやってこの状況を切り抜けるべきかである。
「・・・ 気分が悪いので早退シマス」

「そう、だったら平塚先生に報告しなければならないわね」
「……　ちっ」
　雪ノ下にとっては幸な、俺にとっては不幸なことにすぐ近くには職員室がある。つうか雪ノ下はその職員室から出てきたのだ。
「瀬谷くん、どうせならもっとましな嘘をつきなさい。論破のしがいがないわ」
「…　そういうじゃれあいを望むならあいつに頼め。女子のたのみは断れないからな、あいつ」
　ちなみに俺はノーと言える日本人である。
「あいつ…　？もしかしなくともそれが比企谷君のことなら私への最大の侮辱よ。それに彼とのあれはただの制裁であり、決してじゃれあいなどではないわ」
「…　制裁って、お前何様だよ」
「雪ノ下雪乃様」
　マジで言っていた。言ったあとの恥じらいすらなかった。肝っ玉でけぇな、おい。
「…　はぁ」
　結局俺はそのあと渋々と雪ノ下雪乃の後ろについて行くしかなかったのであった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「おじゃＭＡＸコーヒーは千葉の宝…　って、おぉ、雪ノ下以外に目付きの悪い不良が部

室にいる…」
「… ンだと、ゴラ」
結局あのあと俺は雪ノ下雪乃と共に奉仕部へと足を運び、面倒ではあれど部活動に励むことにした。（なにもやることなどないが）
そして遅れてきて、さらにおかしな挨拶で入室してきたそいつは俺の顔を見るなり、白々しくも驚いた顔を作り、こちらに当て付けだと言わんばかりの挨拶をしてきた。（お返しに睨み付けてやると、かなり怯んで目線をそらしたが）
つうかてめぇが言えることじゃねぇだろ、この腐った魚の目。
「そういえば昨日はゴタゴタしてて聞いていなかったのだけれど、あなた達の関係って言ったいなんなのかしら？友人の類ではないのでしょう」
「真っ先にその可能性を消していくのは流石に俺にもこいつにも失礼だと思わないのか、雪ノ下…」
「… いや、それでいい。知り合いでも我慢の限界なのに友人なんてあり得ねぇから」
「お前は俺になんか恨みでも… あぁ、あったな…」
「… 自覚あンなら素直に黙ってろよ」
嫌なことを思いだし、悪態をついておく。そして思うことはやはり、俺はこいつを許すことはできないということだった。

「私の質問に応えれてないのだけれど。結局あなた達はなんなの？」
　一人おいてけぼりにされた雪ノ下雪乃は少し不機嫌そうに眉をひそめたあと、咎めるように話を戻して答えを催促する。
「いや、まぁあれだ。小学校からの付き合いっていうか、腐れ縁みたいなもんだな」
「そう……　意外だわ。あなたに昔ながらに知り合えた人がいたなんて。瀬谷くんはそんなに精神力が強大なのかしら」
…　平塚女史の時もそうだが、こいつは本当に友人が乏しいことでイメージを固定させられているんだな。
　別にオレには関係ねぇからどうでもいいが。
「…　まぁ、こんな人生過ごしながらもまだ生きていようなんて思えるこいつよりはメンタルなんて弱い方なんだろうがな」
「比企谷くんと比べてはいけないわ。彼は自分の不幸や失敗を人のせいにして精神を維持するとんでもないひねくれ者よ。勝負以前に彼は土俵にたっていないわ」
「おい雪ノ下、別にそこら辺の否定はしないが、もっとオブラートに包んで言えよ。なんなら水戸の餃子皮でいいから」
「…　千葉の敵のネタもふるんだな、お前」
　少し意外だ、どうでもいいが。

「ふっ、違うな。俺は千葉ファン以前にＭＡＸコーヒーファンだ。ならば同じくＭＡＸコーヒーを売る茨城の擁護も仕事のうちだろう？」
「それは貴方の仕事ではないと思うのだけど・・・」
「・・・　全くその通りだ」
　つうか普通は逆だろ。千葉ファンであるからＭＡＸコーヒーが好きなんだろうが。いや、ＭＡＸコーヒー飲まねぇけど。つうか俺千葉出身じゃあねぇけど。
「ま、とにかくオレとこいつはそんな仲良くねぇっつうことだよ、・・・　小町とはこいつ何故か仲良いんだがな・・・」
　諦めたようにこいつは言うが、最後の一言は何かしらの悲哀を含まっているような気がした。別におまえには関係ないと思うが・・・　まだシスコン抜けてねぇのかこいつ。
「細かいところがウヤムヤにされた気がしたのだけれど・・・　とりあえずは入部を歓迎するわ。これからよろしく頼むわね。瀬谷くん」
「俺の時とは全くもって反応が違うな、雪ノ下。なんだ？そいつにでも惚れたか？やめとけよ、やべぇ事件に巻き込まれるかもしれないぜ」
　ムカッ
　そんな擬音が雪ノ下の方から聞こえた気がした。つうか実際に雪ノ下が凄いしかめっ面をしている。

（…　墓穴掘ったな）

哀れ腐った魚。

つうか自業自得だ。なにげに俺の悪口も言ったしな。

そんな腐った魚も雪ノ下の表情に気づいたのかとても気まずそうに目を泳がす。端から見れば挙動不審者だ。なんなら不審者として通報されても仕方がないほど。

「「「……」」」

（……　気まず）

空気が推定キロ単位で重くなり、そろそろ退散しようかと思った時、

ガララッ

「やっはろー♪」

この空気をぶち壊す救世主が現れた。

「…　あれ？なんか空気が重いな～、なんて」

訂正。かなり頼り無さそうだった。

つうかこいつ誰だよ。

「…　はぁ」

俺のため息の声だけが部室内に響いていった。

ーーーーーーーーーーーーーー

「へ～、ヒッキーって一年に知り合いいたんだ～。ちょっと、というかかなり意外」
　気まずかった雰囲気をありがたくも壊してくれた由比ヶ浜結衣がそう言うと、こちらにいかにも興味があります的な視線を送ってくる。
　…　つうか、これで三回目だぞその台詞。どんだけこいつ友達いねぇんだよ。いや知っていたが。
「…　あんま見ねぇでもらえますか」
「ヒッ…　ご、ごめん」
　俺がそう言って顔を向けると、由比ヶ浜結衣は怯えた表情になり謝罪を言うが、その手は雪ノ下雪乃の袖をつかんでいた。
　…　つうか、いくらなんでもビビりすぎだろ。いくらオレでも流石に傷つくぞ。
「由比ヶ浜さん、怯えすぎよ。瀬谷くんは確かに目付きは悪いけれど、性格の方はそこのひねくれ者よりは断然良いから安心しなさい」
「いや、ヒッキーに比べればほとんどの人は性格は良い方になると思うんだけど…」
「由比ヶ浜…　お前も結構言うようになったな」
「はぁ…」
　結局あのあとは乱入してきた由比ヶ浜結衣だとかいう三人目の　（オレを除いた）奉仕部員　により、気まずかった雰囲気は一応霧散された。

そうすれば、お互いに面識が無かったオレと由比ヶ浜結衣は互いの顔を見てクエスチョンマークを浮かべるだけであり、仕方なく残りの奉仕部員が仲人となって俺達の自己紹介をするといった形になり、現在に至っている。
「ていうかせやっち聞く限りじゃヒッキーの幼馴染みってことじゃん!!すごーい!!本当にそんな関係あるんだ!!」
「…　あン?」
突っ込みどころが多すぎて一瞬思考が停止しかけた。
つうかなんだ?せやっちとはもしかしなくともオレにつけたあだ名のことか?
だとすれば屈辱以外の何物でもないぞ。
そして幼馴染みの部分を否定しようと声を出そうとすれば…
「プッ…　せやっちって。似合わねー」
イラッ
そんな呟きが聞こえ、今度は俺がそんな擬音を出した。そして一瞬目の前にいるこいつに蹴りを一発かまそうかと思ったが、こいつに対してそこまでの運動量を与えるのももはや面倒だったので、仕方なく小さなため息を吐いておく。
「…　おい、黙っとけ腐った魚」
「のような目、を付けろよ。それじゃ俺が腐った魚のような存在価値しかねぇように聞

こえるだろ。」
「・・・ 違うのか？」
「違うのかしら？」
「だから被せて罵んじゃねぇよ。おまえら芸人か」
黙れ愚者。
「せやっち、なんかすっかり溶け込んじゃってるね。元々ここにいたみたいな感じ」
由比ヶ浜結衣はそう言って楽しそうに笑う。その笑いは純粋なものだったが、ふと俺は気になった。
「・・・ そういうあんたは結構場違いな感じだな。ここにいるべき存在じゃねぇだろ」
気づけば俺はそんな失礼なことを口に出していた。
しかしそれは先程から気になったことでもあった。
何しろ雰囲気から察して由比ヶ浜結衣の存在感は奉仕部のこいつらとは全く別のものなのだったのだ。
放課後などはこうして部室に集まるのではなく、騒がしい連中と騒がしいところで騒がしいことをしているのが似合っている。
そのような感じの雰囲気を由比ヶ浜結衣は醸し出しているのだ。
すると腐った魚は目を逸らし、由比ヶ浜結衣はアハハと乾いた笑いをこぼし、そして

雪ノ下雪乃は・・・

「瀬谷くん、それは貴方の勝手な価値観よ。今すぐその考え方は捨てなさい。何より、今の発言は由比ヶ浜さんに対してとても失礼よ」

とても憤怒した。

「・・・あぁ、悪い。場違いだったのは俺の方だったな」

そしてオレも雪ノ下雪乃に指摘される前より自己嫌悪を始めていた。

俺が口に出したことは今、言うべきことではなかったということに。

「い、いいよ別に。私がこの部に似合わないってことはちょっと分かってたことだし・・・」

「・・・・・・」

そう言いつつも目に見える形で落ち込む由比ヶ浜結衣。

（はぁ・・・）

そんな由比ヶ浜結衣を見て心のなかでため息を吐く。

またやってしまった、と。

「ま、別に気にすんなよ由比ヶ浜。来てほしくなくなったらその時にまた言うからよ」

「え、なにそれ!?まるで私の扱いに面倒になる時期が必ずあるみたいな言い方!?かなり傷ついた!!」

「いや、今までも結構あったんだぜ。言葉にしてねぇだけで」
「それもかなり傷つくよ!?」
「……」
…　不覚だ。というか屈辱だ。
まさか腐った魚ごときにフォローを受けるとは。なんならまだ猫の手の方がダメージが少なくてすむ。
そしてなにか釈然としない感情を持ち、依然漫才をしている二人を見る。
そして思うことが一つ。
（…　一人でいるときより楽しそうだな、こいつ）
ボッチを名乗り、集団行動をこよなく嫌うこいつがこんなに楽しそうに他人と接しているのは久しぶりに見た。
そしてそんな楽しそうな雰囲気を見ると、ふと記憶のフラッシュバックが起こる。
『君、名前なんて言うの？』
……
（…　こいつ大丈夫か？ってなに考えてんだよ、俺は）
らしくもない心配を心のなかでしてしまい、少し気落ちする。
勿論、決して口には出さない。

「…　貴方も一応反省しておきなさい」
ふと雪ノ下雪乃がこちらに向かいそう言ったのを感じ、視線だけをそちらに向ける。
そうすれば同じく漫才をしている二人を見ていた雪ノ下雪乃が微笑みを浮かべているのが少し見える。
「…　大いに反省中だ」
「そう、なら結構よ」
視線を漫才師に戻し、そう言い合う。
そして、最終的には…
「はぁ…」
自己嫌悪と反省の色で染まったため息を吐くのであった。
（…　ため息、癖になったな）

だが彼らはそこから離れない

「瀬谷、なんか疲れてるけど大丈夫か？」
「…　ああン？」
俺が奉仕部に入り、三日経ったある日の昼休み。俺は疲れたように（疲れている）机に突っ伏していると、前方から声をかけられた。
「…　今まで避けてきた部活動というものを始めてやってみたらお前も分かるようになる」
「あぁ、部活始めたんだったな」
顔をあげてみれば、そこにいたのは俺の後ろの後ろの席に位置するクラスメイト、茅ヶ崎千賀だった。
女のような名前だが、れっきとした男である。女よりもひ弱で、髪も縛っているが…
「…　しかしお前もオレなんかによく普通に話しかけれるな。知り合いに間違われるぞ」
「いや友達だろ、一応…」
喋ってみると意外に優しかったし…　など言ってくる茅ヶ崎。こいつとは最初、名前

も知らない仲だったのに、今では俺が教室でまともにしゃべれる人間の一人になっている。まぁそのそんなこいつと知り合えるきっかけを作ったのが・・・
「なぁなぁ聞いて！この前ケイコちゃんが弁当作ってくれてさー！ってあれ、瀬谷なんか疲れてる？」
「・・・はぁ」
　噂を思えばなんとやら、とは言ったもののいきなり出てくんじゃねぇよ。あとうるせぇ、黙れ。
「た、高津いきなり大きい声出すなよ・・・みんながこっち見てるぞ」
　安心しろ茅ヶ崎、だれもこちらを見てない。お前が神経質すぎるだけだ。
　そう、こいつこそうざけれど俺のコミュニティを広げた張本人。俺の真後ろで茅ヶ崎の前の席に位置する人間（？）、高津克だった。
「そんなことより瀬谷、ケイコちゃんが弁当をさー、」
「・・・その話はさっき聞いた。そして声がでかいんだよ、少し黙れ騒音発声機」
「瀬谷、なんかいつにもまして不機嫌そうだな・・・」
　こいつ彼女できてから本当にうぜぇ、はやく別れろ。向こうもこいつのどこに惚れたんだよ。
　そして茅ヶ崎、それじゃあ俺が年中不機嫌そうに聞こえるからやめろ。否定はしない

が。
「なんだよ、つれねぇなー。そんなんだから彼女できないんだぞ、瀬谷」
「・・・ツンとうぜぇ」
一々堪に触ることを言うこいつに本気でイラついてきたので、蹴りでもかまそうと椅子から立ち上がろうとしたところ・・・
ガララッ
「瀬谷はいるかー?」
ドアを開けて、誰かが俺の名を呼ぶのが聞こえた。というかその声には聞き覚えがあり、関わると今まで碌なことがなかったので、俺は・・・
「おぉ、瀬谷が体育の時間でも見せたことがない俊敏な動きで机から立ち上がり、教室後方のドアへ一目散に駆けていった!!」
「何!?逃がすか!!」
とりあえず逃げることにした。
「なんで高津はそんな実況者風なんだよ、ていうか今の人現国の平塚先生・・・瀬谷に何の用事なんだろう?」
そんな茅ヶ崎の言葉を背に受けながら俺は無心に廊下を走り去っていった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「一応言い訳ぐらいは聞いてやる。なぜ逃げた」
「…　死兆星が見えたのでついうっかり」
「もう少しまともな言い訳を考えろ。バカモン」
　結局あのあと俺を追ってきた平塚女史に捕まり、現在は職員室にある平塚女史のデスクの前。例のごとく他に教師はいない。この学校は本当に成り立っているのだろうか？
「…　もう説教は聞き飽きたんでさっさと本題に入ってくれないスか」
「誰のせいで説教してると思ってるんだ、全く」
　いい加減諦めたのだろう、そう愚痴ると平塚女史は自分のデスクの引き出しから一枚の紙をとって俺の前につき出した。
「…　高校生と結婚は流石に無理だと思うスが」
「バカか君は。よく読め」
　一番気にしている話題をジョークとして持ち込んだが平塚女史はそんなことに一々気にせず、その紙への確認を俺に促した。
「…　入部届」
「そうだ。まだ出してないだろう」
　そういやこんなものを出す決まりがあったな、この学校。

「今更だが書いておけ。後々面倒なことになるからな」
「・・・ンだよそれ」
少し平塚女史の言葉に気が掛かったが、とりあえずの優先事項としてペンを借り俺は入部届を書いた。
「そういえばさっき君はクラスメイトと一緒にいたが、彼らは友達か？」
「・・・片方はそれに近いがもう片方は赤の他人だ」
もしかしなくとも高津のことである。
「そうか・・・いや、比企谷のように友達が作る方ではないと思っていたからな。少し意外だったんだが・・・すまないこんな考え方は少し失礼だったかな」
「・・・あいつと一緒にするな。そっちの方がかなり失礼だ」
平塚女史がそう考えたことはよくわかる。自覚はしているのだ。目付きが悪く、いつも不機嫌そうで感情の起伏に乏しい。そんな自分の風貌に。だから今までは友達なんぞと言うものはないに等しかったし、必要ないとも思っていた。しかし・・・
『なぁ不機嫌そうだけどなんか嫌なことでもあったのか？お前』
『・・・・・』
あのときは俺でも少し驚いた。（顔には出さなかったが）
まさか俺に素で話しかけてくるやつがいるとは思いもよらなかったからだ。まぁ今

ではそんなことに一々気にしなくなったが…
「彼とは違い、君は充実した青春を送れそうだな。存分に楽しみたまえよ」
　平塚女史は微笑みを浮かべながらそう言う。つうか…
「その言いぐさからもう年の功が「ブンッッッ!!」……」
「次は当てるぞ」
　微笑みを浮かべたまんま言ってんじゃねぇよ…
ーーーーーーーーーーーーーーーー
「そういや瀬谷、この前ホームルーム受けずに帰ったけど、どうしたんだ？あのあと平塚先生が来て瀬谷はどこだ!!って騒いで大変だったんだぞ」
「…　ストーカーかよ、あの人」
　帰りのホームルーム終了時。茅ヶ崎が話しかけてきて、その内容を聞き若干驚いた。
　あの教師、教室にまできたのかよ…
　どんだけ熱血ドラマ愛してんだ。
「なぁ瀬谷、茅ヶ崎の働いてるレストラン行こうぜ！ケイコちゃんの話したげる！」
「…　死んでも断る」
　つうかそんな大声で茅ヶ崎がバイトしてること公言すんなよ。
　本人あわあわしてんだろうが。

「ちょっ!?た、高津、そんな大声で俺がバイトしてること言うなよ!?」
高津にそう注意するが、茅ヶ崎よ、そういうお前の声も大概大きいぞ。
「へー、茅ヶ崎くんバイトやってるんだー」
「今度みんなで行こうぜー」
そしてこうなった。
そんな茅ヶ崎のバイト先への打ち上げの話で盛り上がり、茅ヶ崎がさらにあわあわし始めた教室を尻目に、俺は奉仕部の部室へと向かった。
「せ、瀬谷ー!!助けてー!!」
すまん、無理だ。
ーーーーーーーーーーーーーーーー
奉仕部教室前。
「はぁ…」
気乗りしない気持ちをため息と共に吐き、諦めて目の前のドアを開ける。
ガララッ
「……」
「… 瀬谷くん、ノックと挨拶ぐらいしなさい」
「… ソリャワルウゴザイマシタ」

ドアを開ければすごい美人がそこにいた…　などとは思わず、不機嫌そうな顔をした雪ノ下雪乃がいた。

つうか今更ノックなど必要なのだろうか？この部でノックをまともにしてるやつを俺はまだ見たことないんだが。

「…　他のやつらはまだかよ」

「ええ、この時間ならもう比企谷くんぐらい来てもいいのだけれど…」

「…　ふーん」

聞くには聞いてみたが、特に興味もなかったので、雪ノ下に空返事をする。

そうすれば近くにあった椅子に座り鞄からタブレットを取り出せば、同じく鞄に突っ込んであったヘッドフォンにそれを繋ぎ、耳に付ける。

そしてタブレットの電源をつけ、朝からやりかけであった作業を進めようとすれば…

ジーッ

そんな擬音が空耳で聞こえるほどに誰かから見られてる気配がした。

「何をしているのかしら、瀬谷くん」

もしかしなくとも雪ノ下雪乃だった。

「…　作曲」

ヘッドフォンを付けているので聞こえないふりもできるのだが、そんなことをしても雪ノ下の機嫌が悪くなるだけなので正直に答えておく。その間も作業の手は止めないが。

「作曲？あなた音楽に精通しているの？」

「…　精通してるってわけじゃねぇよ。ただの趣味だ」

雪ノ下が大層な解釈をしてきたため、一応訂正をいれておく。

本当に、そこまで誇れるものでもない。

「趣味で作曲ってことは、あなた他に楽器もなにかできるの？」

「…　ギターとベース」

なぜかいつもより突っかかってくる雪ノ下の質問に適当に答えながら、頭のなかに浮かんでくる音符をタブレットの中のアプリの五線譜に写し出し、時々音がきちんと繋ぎ合わさっているか確認するため再生する。

「…　ずいぶんと本格的なのね」

「…　趣味の範囲でだけどな」

その間も雪ノ下雪乃は俺の作業を興味深げに凝視していた。今ではもう俺の後ろで立ち、まじまじと覗いてくるほど。

「……」

ぶっちゃけるとかなり気まずい。
雪ノ下からしてみれば見たことのない玩具を見つけて興味があるだけなのかもしれないだろうが、こちらからしてみれば後ろに超絶美少女を立たせているので違和感がハンパないのだ。
「……」
しかしそんなことで一々反応するのも何か釈なので渋々と我慢し、無心で作業を進める。
幸なことは朝のうちにほとんどのメロディーを仕上げていたため、あとは曲の終わり部分だけだということだった。
そして…
「…　ふう」
俺は最後の休符を五線譜の中にいれ、息と共に力を抜いた。
一応確認のためこれから曲全体を再生し、こぼれがないことを確かめなければならないのだが、曲作りの余韻に浸っている今の俺に、そんなことまでする余裕はなかった。
「…　面白いそうね、それ」
「…　あン？」
そうしていると後ろから雪ノ下の声が何だか感慨深げに聞こえたので、思わず振り向

く。

すると…

ガシッ

「… おい、なにしやがる」

「ちょっと借りるだけよ」

雪ノ下は刹那の速さで俺の手からタブレットを奪い取り、まじまじとその中身を確かめていった。

「… なるほど。データ上に含まれてる音符の音を同じくデータの中の五線譜に入れ込んで曲を作るのね。

確かにこれなら紙代も浮いて合理的ね」

「… ンな冷静に分析してンじゃねぇよ。さっさと返せ」

「いや、ちょっと待って。まだ何か…」

そうして俺が雪ノ下からタブレットを奪い返そうと詰め寄ると…

ガララッ

「ごっめーん!ゆきのん!!ちょっと外せない用事があって遅れちゃった。」

「お前にとって数学の宿題のやり直しはそんな大事なことなのか。あんなもんちゃちゃっと適当にかいて終わりじゃねぇか」

「いや、ヒッキーは適当すぎるからやり直し食らったんでしょ。まぁ私はそれ以前にやってな…」
「あン？どうした由比ヶ…」
奉仕部の残り二人が現れたのであった。
「…　はぁ」
そして俺は驚愕の表情をし、奉仕部のドアの前にたつ二人を見て思わずため息がこぼれた。
現在俺の状況を言葉にして表せばこうだ。
［女子の先輩を壁際まで追い込ませている目付きの悪い不良］
書き表してみると本当にけだもののようだな…
そしてそんな状況を前情報なしに見てしまったこの二人。こんなリアクションになるのは当たり前というものだろう…
ちなみに当事者の雪ノ下雪乃さんは…
「…　なにこれ、すごいわ。ピアノの音声だけでなく、ギターにドラムにベースの音でまで作った曲を再生できる。これがあったら楽器いらずじゃない」
と、こうして俺のタブレットに夢中になり、事態に参加すらしていなかった。
「…　はぁ」

また、ため息がこぼれる。
さて、なんと言い訳をしようか。
そんなもんは決まっている、考えるまでもない。
そして俺は二人の方向に向き、また少しため息を吐き、そして口を開いた。
「・・・ おい、誤解「失礼しましたー!!」・・・ おい」
本当に頭が痛くなる。
俺の言葉が言い終わる前に由比ヶ浜結衣が全速力でその場から立ち去ったのだ。
もはや抗弁の余地無しかよ・・・
「・・・・・・・・」
「・・・ そして何でてめぇはそんな惚けた顔してんだよ。分かってンだろうがよ、誤解だ、誤解」
そんなキャラじゃねぇだろが。
「・・・ あ、あぁそうだな。ビックリさせんなよ。
思わず、俺にはフラグすら立てさせてくれない雪ノ下がなんでお前とこんなと仲良かったのか、本気で疑っちまったところじゃねぇか。」
「・・・ 卑屈だな、おい」
もう少し楽に生きろよ。どうでもいいが。

「あら、比企谷くんいつのまにきたの？ついにボッチの域すら越えて空気にでもなったの？」
「本当に空気だったらもっと空気読んで登場したのだがな…」
「……？そういえば由比ヶ浜さんは？一緒じゃないのかしら？」
「「……」」
その後、状況を説明された雪ノ下は、話を聞いたあと顔を真っ赤にすると、俺に罵詈雑言を浴びせ、急いで由比ヶ浜さんを探しにいったとさ。
めでたくねぇ、めでたくねぇ
「…　はぁ」
…　もうこの部活辞めてぇな

そして彼らの間違えた物語が始まる。

狂暴なる一年生による雪ノ下雪乃襲撃事件が雪ノ下雪乃による証言一つにより全貌が明かされ、奉仕部内で闇に葬り去られた後日。

「はぁ…」

珍しくも茅ヶ崎が俺と同じようなため息を吐いている放課後。

実は朝からこのテンションであったため、どうせ面倒事なんだろうなと思い、今まで放っておいたが、ここまで落ち込まれるともはや聞かない方が失礼なのではないかと考えを改め、俺は重く閉ざしていた口を小さく開いた。

「… 茅ヶ崎、いつも以上に暗いが何かあったのか？」

「え、俺っていつもそんなに暗い「… それはどうでもいいから理由を言え」

… バイト先のレストランが潰れたんだよ」

「… 唐突すぎんだろ」

茅ヶ崎の気落ちの理由を聞き、若干感情が驚愕に浸る。

そりゃバイト先が急に潰れたらため息も吐きたくなるものだ。

「いや、次のバイト先は店長から紹介されてんだけど… そこが何故か高級ホテルの

バーなんだよ」
しかも夜勤入ってるし…　と泣く寸前の絶望顔で現状を報告する茅ヶ崎。
つうか…
「…　ンだよ、別に次のバイト先決まってんならいいじゃねぇか」
同情して損したと心のなかで少し愚痴り、ため息をはく。
「でも瀬谷!!高級なんだぞ!?怖い人が機密の話とかしちゃうかもなんだぞ!?」
「…　お前メンタル弱すぎだろ」
高級にどんだけ偏見を抱いてンだよ。普通なら良いバイト先に切り替えられて喜ぶところだろうが。
まぁそんな茅ヶ崎は想像できんが。
つうか泣きながらこっちにすがりよるな、助けを求めるな。
そして女子たちよ。俺らを見てキャーキャー騒ぐな、写メを撮るな。
「…　はぁ」
悪化していく頭痛を我慢しつつ、やはり話しかけるんではなかったと後悔の念をため息と共にはく。
「え、何々、茅ヶ崎バイト変えるの?どこか教えてー。遊びにいくから」
「高津、空気読んでくれ…」

茅ヶ崎の悲痛の心の声が聞こえたときには、俺はすでに茅ヶ崎を振りほどき、教室から逃げていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「……　ン？」

教室からエスケープした俺の足はそのまま奉仕部の教室へ向かおうと動くが、例のごとくまたその歩が止まる。

「あ、せやっち。やっはろー♪」

「……」

廊下の角よりキョロキョロと首を動かしている由比ヶ浜結衣が現れたのだ。つうか…

「…　そのあだ名やめてもらえねぇスか」

とてつもなく屈辱的でハズい。もし高津などに聞かれたならば、記憶を消去するほどに蹴らなければならないほど。

「えー、いいじゃん。かわいいと思うけど？」

「…　男にそんなステータスはいらん」

いやーまぁそうだけど、とまだそのあだ名を諦めようとしない由比ヶ浜結衣に軽く呆れ、

小さくため息を吐くと、俺の目の前にいるスペシャルネームメイカー様が何かを思い出したかのように手を叩いた。

「…　そういえばせやっち、ヒッキー見なかった？」

「……」

この女は本当に人の話を聞いていたのだろうか？

いや、もうなにも思うまい…

「…　ミテイマセンガ」

俺は諦めの境地にたち、適当に由比ヶ浜結衣の質問に答える。

「そっか…　だったらいっしょに探しに「死んでも断る」なにその速すぎる拒否反応!?どんだけ嫌なの!?」

当たり前の反応だ。何故俺があんなやつを探すなどという労力を費やさなければならないのだ。

そんな役目はどこぞの猫や犬にでも任せればいい。なんならそれでも勿体ないほどだ。

「うぅ～、分かったよ、私探しとくから先部室に行っといて」

由比ヶ浜結衣は残念そうな顔をしながら俺を奉仕部の方へと促した。

しかし別にこの先輩が汗をたらし、あの腐った魚を探す必要性もあまりないと感じ

る。

何故ならば…

「… メール送りゃいいんじゃねぇの」

そう。現代高校生ならば誰もが持っているであろう便利な電子機器を例に漏れずあの腐った魚も持っている。ならばそこに直接連絡すればいいものの…

「いや、私ヒッキーのアドレス知らないし」

「……」

マジか。

おそらくあの男と由比ヶ浜結衣は一ヶ月ぐらいあの奉仕部で一緒に活動していたのであろう。

そうであるのにまだ連絡先すら知らないとは…

「… はぁ」

奴のコミュ力の低さについて再確認しながら、それでも納得のいかないため息を吐く。

そうすれば俺は目の前のケータイから電話帳を開いてメールの新規作成を行う。

その相手は言わずもがな、である。

「… ホラよ。あいつのアドレスに繋がってるから適当に打てよ」

「え？せやっちってヒッキーのアドレス知ってたんだ」
「…　不本意ながらな。つうかとっとと済ませろ」
「あ、うん。分かった」
俺があいつのアドレスを知っていることに驚く由比ヶ浜結衣に催促をかける。
すると逆に由比ヶ浜結衣はこちらが驚く速度でメールを打ちこんでいく。
現代の女子の本気を今改めて思い知った。
「…　よし、終わったよ。ありがとね」
「…　あぁ」
俺がイマドキ女子について驚愕の意を感じていると、打ち込みが終わったのであろう、由比ヶ浜結衣がケータイを返してきた。
「でもあれだねー。連絡先知らないとこんなことになるから大変だね。あ、後でヒッキーからアドレス教えもらわなきゃだね！」
「…　あぁ、そうだな」
なにやら意気込み始めた由比ヶ浜結衣に若干の違和感を感じるが、どうせとるに足らないことと推察し、その足をやっと奉仕部の方へと向けて進める。
横に由比ヶ浜結衣を連れて。
「…　あいつ探すんじゃなかったのか」

「いや、せやっちのケータイからかけたんだから、せやっちのそばから離れられないじゃん」

「……………」

正論であるが、現在いるのは一年の教室前廊下。そんなところで普通に美人である二年生などを連れていれば……

ジーッ

「……はぁ」

周囲の一年生からの目線が強くなり、さらに居心地が悪くなったので、ため息を吐き、その歩調を早くする。

勿論由比ヶ浜結衣は隣でついてきた。

「そうすればせやっち。前から思ってたんだけどなんでいつもヒッキーのこと毛嫌いしてんの。あれじゃやヒッキーがかわいそうだと思うよ」

「……雪ノ下だって暴言はいてんじゃやねぇか」

「いやー、ゆきのんはほら。不可抗力っていうか……」

「……なんだそりゃ」

奉仕部へと向かう道中、そんな会話が終始続けられた。

ーーーーーーーーーーーーーーー

ガラガラッ
「あぁ!!こんなところにいた!!」
「…　テメェなんでここにいんだよ」
奉仕部の部室につきドアを開ければ、腐った魚のような目をした男がそこにいた。
つうかメール返信しろよ。
「あなたがいつまでたっても部室に来ないから探しにいっていたのよ。由比ヶ浜さん…　と瀬谷くんもかしら?」
「…　俺は違うに決まってんだろ」
とてつもなく失礼なことを、しかも倒置法で強調して言ってきた雪ノ下雪乃に即座に訂正を入れ込む。誰がこんな奴のために貴重な労力などを使うものか。
「ていうと、もしかしなくともさっきの変なスパムってお前らのだったのか…」
「…　てめぇ俺のアドレスをスパムにしてやがったのか」
「い、いや違ぇよ。この前機種変して間違えてお前のアドレス消しちまって　「ドゴォ!!」　ゴフゥ!?」
「ヒ、ヒッキー!?」
言い訳をする目の前の男の脇腹に蹴りをいれると見事に決まり、男は膝を床に付け突っ伏す。

そんな状況に慌てふためく由比ヶ浜結衣。

別に何事もなく、ただ読書を続ける雪ノ下雪乃。・・・　つうかあんたはもっとこっちに興味を示せよ。

「うぐぅ・・・　お前の蹴り食らったの結構久しぶりな気がするぜ」

「・・・　一々覚えてんなよ。気持ち悪い」

「え、なんなの!?二人って本当にどんな関係なの!?ゆきの～ん!!」

「・・・　ここも騒がしくなったわね」

そりゃすまねぇな。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

結局あのあと俺の蹴りより立ち直った腐った魚は由比ヶ浜結衣とアドレス交換を行った。

その際腐った魚の重い過去の歴史が語られたが、前に聞いたことのあるネタだったので、俺は椅子に座りそのまま新しい曲作りに専念した。

その際、雪ノ下雪乃が俺の方を凝視することももうなかった。

そして現在。

「「「・・・・・・・・・」」」

いつも通りに作られる、奉仕部の無言の空気。

雪ノ下雪乃と腐った魚は本を読み、
由比ヶ浜結衣はケータイを弄り、
俺はタブレットで作曲する。
いつも通りに繰り広げられる奉仕部。
俺は案外この空気が好きだった。
お互いに干渉することもなく、ただ思い思いにしたいことをするだけ。
実に楽だ。他人に気を使わない、ただそれだけのことが。
「うわぁ…」
そんな似合わないことを思っていると、ふと由比ヶ浜結衣がケータイを見ながら顔を歪めているのが視界に入った。
「どうかしたのかしら、由比ヶ浜さん」
「いや、ちょっと変なメール来ただけだから。気にしないで」
変なメール…　まさか。
「比企谷くん、裁判沙汰になりたくなかったら、今後そういう卑猥なメールを送るのやめなさい」
「内容がセクハラ前提でしかも犯人扱いかよ…　つうかそんなんだったら瀬谷の方が怪しいんじゃねぇのか？目付き悪いし」

「…　他人に自分の罪を擦り付けるとは、ついにそこまで落ちたか…
…　もう二度と俺に話しかけんなよ」
「てめぇまで俺を犯人扱いかよッ
証拠出せ、証拠を」
「（…）その言葉が証拠といってもいいだろ（わね）」
「暴言はくときだけ息ぴったりだな、お前ら…」
図らずとも重なってしまったその言葉をこいつがそう評価する。
その後は雪ノ下が犯人フラグや死亡フラグについて持論を語ったが、その話についてはそこまで興味もなかったので思考を作曲の作業へ戻す。
しかし…
コンコンッ
「…　あン？」
部室のドアより何かがぶつかる音が二回…　一般的にノックと言われる行為が耳には言ってきたことにより俺の作業は再び中断された。
しかし、少し驚いた。律儀にノックをしてくる人間がまだこの高校にいたとは。
俺の回りにはそんな器用なことができるヤツはあまり見受けられない。（雪ノ下を除く）

ガラガラッ

（・・・ 誰だこいつ？）

奉仕部のドアを開けた人物はいつもの喫煙教師ではなく（そもそもあの教師にノックなどという気遣いはできない）、

無駄に爽やかそうな雰囲気を醸し出している、無駄にイケメンの男子だった。

「あ、ちょっとお願いがあってさ。奉仕部ってここでいいんだよね？」

その男子は俺の方を一瞥すると、またもや無駄に爽やかな笑顔をもって会釈をし、そのまま二年のメンバーの方へ向かっていった。

この様子から、この男子が二年で由比ヶ浜結衣か雪ノ下雪乃のどちらかと面識があると予測ができた。

ちなみに、あの腐った魚にこんな知り合いがいるとは最初から思ってはいない。先程から愛想笑いしかしていないしな。

「平塚先生から悩み相談するならここだって言われて来たんだけど・・・」

「・・・・・・・・」

先程から会話を聞いていると、この男どちらかというと、由比ヶ浜結衣と同じで俺たちとは違う種族に属している人間と見える。

あくまで主観で、決して口には出さんが。

「能書きはいいわ。用があるからここに来たんでしょう、葉山隼人くん」
いい加減前振りにうっとおしくなってきたのだろう、雪ノ下雪乃が本題を催促する。
「…　ううか、あんたらお互い面識あンのか？
さっきから顔見知りと話すように会話を進めているが、俺がおいてけぼりにされているんだが」
ううかそのことでさっきから悩んでいるのだが。
「あぁ、そっか。せやっちは学年違うから知らないもんね。普通にタメられてるから実感なかったわ～」
「いや、由比ヶ浜。それただ俺たちがなめられてるだけだから。
気にすべき所だから」
「…　彼は葉山隼人くんといって、比企谷くんと由比ヶ浜さんのクラスメイトよ」
由比ヶ浜結衣と腐った魚がなかなか本題に入ってくれないので、雪ノ下雪乃が代わりに紹介をする。
ううかあいつはクラスメイトに愛想笑いしてたのかよ。
相変わらずの負け犬根性だな、おい。
「よろしくね、えっと…」
「…　瀬谷壮介」

「あぁ、よろしく。瀬谷くん」
「……」
葉山隼人はおそらく誰にでも見せるのであろうその笑顔を俺にも見せる。
しかし、何故だろう。
こいつのこの笑顔が、どこか張り付いているように感じるのは。
俺だけなのだろうか？
（どうでもいい、か…）
とるに足らないこと。
そう結論付け、俺は深く考えるのはやめた。
「で、相談のことなんだけど…」
葉山隼人が本題を戻すと、おもむろにケータイを取りだし、それを由比ヶ浜結衣に見せる。
「あ、変なメール…」
由比ヶ浜結衣はそのメールと自分のメールを見比べる。
「…　チェーンメールか」
「そう、みたいね…」
雪ノ下雪乃もその内容をみて、俺の意見に賛同する。

そして俺はおそらく今日最大の大きいため息を吐いた。
めんどくさいことに巻き込まれたという、怠惰な感情を込めたため息だ。
（…　やっぱ、入んじゃなかった。こんな部活）
後悔の念は、まだ溜まっていく。

そして彼の過去は黒く染まっていく

「…　で、具体的に俺たちは何をすりゃいいんだ?」
葉山隼人により見せられたそのチェーンメールは、特定の人物を中傷する内容のものだった。
名前はそれぞれ、戸部、大岡、大和と、当たり前だが全く心当たりのいかない人物。
そのため、俺ではその三人がどのような性格なのかさえも分からん。
(俺の仕事無いかもな…)
この依頼、犯人探しとなったら俺は役立たずとなる。
しかし、葉山隼人の目的は犯人探しではなかったようだ。
「頼みたいことは犯人探しじゃないんだ。この状況を円満に解決させること、そのことに協力してほしい。それだけなんだ」
…　なんだと?
「…　お前今、円満つったか?」
「ん?あぁ。こうやって友達を悪く言われて気分が良いわけないけど、これを書いた奴がそれが原因で浮いちゃっても後味悪いし。

だからこの状況を丸くおさめてほしい。それが俺からの依頼だ」
「…………」
なんとも良いやつなんだろうか。
とても尊敬できるものだ、尊敬しすぎて吐き気を催すほど。
「…………」
俺は葉山隼人を心のなかでそう評価すると、椅子から立ち上がり、部室のドアの方へ向かっていった。
「瀬谷くん、どこへ行こうとしてるのかしら？」
「……トイレだよ」
「ちょっとせやっち。空気読んでよ」
「……ソリヤスミマセンデシタ」
「…………」
由比ヶ浜結衣に心のこもっていない謝罪を言って俺は部室から出る。
その足は雪ノ下雪乃に言った通りにトイレへと向かっていった。
気のせいだとは思うが、部室から出ていく俺を、あの腐った魚が哀れみを込めて見ているように感じた。
――――――――――――――――

「……」

トイレに着けば俺はおもむろに洗面台で顔を洗う。

目の前の鏡を見れば、いつも通りのボサボサした髪に不機嫌そうな顔をしたいつも通りの俺。

『この状況を丸くおさめてほしい』

頭のなかでフラッシュバックしていくのは、葉山隼人の甘すぎる言葉。

思い出すだけで胸焼けがおき、頭痛が起こり、胃に穴があくような嫌悪感が巻き起こる。

「……　はぁ…」

その嫌悪感を長く、そして深いため息で押し吐く。

おそらく葉山隼人は全くの悪気も他意もなく口に出したのだろう。

いや、それどころか善意をもってその言葉を口に出したのであろう。

だから葉山隼人は全く悪くない。

きっと誰にでも優しい、まさに聖人君子のような人間なのだ。

だからであろう。

『俺はお前を守れない…』

それが原因なのであろう。

『私はキミを見捨てた…』
それが理由なのであろう。
『ごめん… なさい… 瀬谷くん』
その時
円満などという言葉を口にだした時
俺は葉山隼人を
心の底から
嫌いになった。
ーーーーーーーーーーーーーーーー
心を落ち着かせた俺はトイレを出て部室に戻ろうとする。
すると…
「ん？瀬谷か。まだ部室へ行ってなかったのか」
「……」
出た先の廊下には平塚女史がピッタリのタイミングで歩いていた。
つうかどんな偶然だ… もはや奇跡か。
それとも本当にこの教師にはストーカー気質でもあるのだろうか。
そんなことを考えていると、平塚女史がこちらをじろじろと見てほくそ笑んでいた。

「なんだ～？いつも以上に不機嫌顔だぞ。何か嫌なことでもあったか？」
「・・・　あんたが送ってきたあの依頼人のせいだよ」
　不良少年の更正のシチュエーションとでも考えているのだろうか、楽しそうにこちらにグイグイ突っ掛かってくる熱血教師モドキのテンションにうざくなりながら、適当に質問に答える。
「ん？葉山が原因か？おかしいな、葉山がそんな嫌悪感を与えるようなことをするわけないと思うが・・・」
「・・・　ンな直接的に嫌がらせなんてあの男はしねーよ。
　俺が勝手にあの男を嫌いになって、勝手に不機嫌になっただけだ・・・」
　適当すぎた答えに平塚女史が真面目に思考するので、理由を言い加える。
　しかしその理由を説明していくうちにまた胸の奥から嫌な感情が蘇っていく。
・・・　チッ。
「・・・　じゃあ俺、部室行くんで」
「待て、瀬谷」
　部室の方へ体を向かせる俺のその言葉に被せ、平塚女史がこちらを呼び止めた。
「・・・　なんスか？」
　少しイライラしながらも、返事をする。

「別に大したことじゃないが、変な気は起こすなよ」

ザクッ

平塚女史のその言葉が俺の体へと、刃になって突き刺さる。

そして気付いた。

平塚女史が「あのこと」を知っていたことに。

「・・・ 知ってたん、スか」

「まぁ、な。一応私は生徒指導担当だからな。これぐらいは把握している」

「・・・・・・・・・ はぁ」

平塚女史が 「あのこと」について知っていたことの驚愕は俺にとっては思う以上に少なかった。

さっきも自分で言っていたが、この人は進路指導の教師だ。 「あのこと」 について把握ぐらいしているのは、ほぼ当たり前のことだろう。

だが、平塚女史が「あのこと」を知っているとしたら、一体どこまでしっているのだろうか。

平塚女史は「あのこと」をどれほど理解しているのだろうか。

俺はとても気になった。だからだろう・・・

「・・・ あんたは俺を軽蔑しないんだな」

普段なら決して口にしないことを、俺は思いの外重い口を開き、言ってしまったのだ。
そして…
「…　瀬谷、私は生徒の味方だ。君がどんな過去を持っていても、私は君を裏切らない」
俺はそれを言ってしまったことに、とても後悔した。
「…　そうかい」
俺はそれだけ言い捨て部室へと戻っていった。
そして知った。知ってしまった。
平塚女史はなにも理解していないことに。
何も分かっていなかったことに。

――――俺が中学二年の時、いじめを行ったという事実のことに――――

「…　あんたも、俺を信じないんだな」
その言葉は勿論、平塚女史の耳には届かなかった。
――――――――――――――――

「……」
「瀬谷くん、遅いわよ」
「… あぁ」
再び奉仕部の敷居を跨げば、飛びかかるのは雪ノ下雪乃からの叱咤。
反論も面倒だったのでまたも適当に答える。
「うわ、せやっちどうしたの？顔色すごく悪いよ。もしかして便秘？」
「… 便秘じゃねぇし。つうか女がその言葉使うのに躊躇いはねぇのか」
「え～、別にそんなのないけど」
いや持っとけよ。こっちが気を使うっつの。
心のなかで由比ヶ浜結衣に突っ込み、小さくため息を吐く。
「で、瀬谷くんがいない間に決まったのだけれど、そのチェーンメールに載っている三人が怪しいみたいよ」
「… みたいってなんだよ」
雪ノ下雪乃がやけに他人気に言ったため少し疑問を持つ。
「まだ仮定の話よ、断言はできないわ」
「… あっそ」
雪ノ下雪乃の完全無欠の性格を再確認しつつ、俺にはまた新たな疑問が浮かび上がっ

た。
「…　犯人探しはしねぇんじゃなかったのか？」
　その三人が怪しいとは、つまりそのなかに犯人がいるかもしれないということだ。
　しかし、葉山隼人は犯人探しは乗り気ではなかったはずだが。
「犯人探しはするわ。その方が手っ取り早く済むし…　というより、この方法以外、事件の収束のしかたがないと思うのだけれど」
「…　そうかい」
　哀れだな、葉山隼人。
　早期解決のため、自分が望まない方法をとられるとは。
「…　つうかその場合、俺の仕事は？」
「ないわ」
　きっぱりと言い切ったな。
　まぁ、学年の違う俺じゃ何の助力もできんが。
　面倒くさいことをせずに済むと思えばラッキーだ。
「というわけで、よろしく頼むわね、由比ヶ浜さん。…　あと期待はしてないけど比企谷くん」
「おい、本当に期待してない風に言うのやめろ。照れるだろ」

照れるのかよ。
ていうか期待してないなら最初から頼むなよ。
「まっかせてー!!ゆきのーん♪」
「ち、ちょっと…　由比ヶ浜さん」
そんなことを考えていれば、雪ノ下雪乃から頼まれた由比ヶ浜結衣は嬉しさのあまりか雪ノ下に抱きつく姿が目に入る。
雪ノ下雪乃の方も多少抵抗しながらも、満更でもない様子だった。
…　本当に、仲睦まじく。
「仲良いんだな」
「あいつらはな」
「ヒキタニくんも、だろ」
「「……」」
ヒキタニって誰だ？
ーーーーーーーーーーーーーー
ガチャッ
「……」
結局葉山隼人の依頼に対する活動方針が決まった後、奉仕部はお開きとなり、即時解

散となった。
　解散後は葉山隼人から寄り道に誘われたが、怠くて面倒だったので丁重に断り、俺はまっすぐ帰宅の道を歩いた。（ちなみにあいつと雪ノ下雪乃は誘われる前に速攻で帰っていった）
　そして現在、自宅の玄関。
「ちょっと壮介、帰ってきたなら何か言いなさいよ。ビックリするじゃない」
「…　あン？」
　そう言って玄関先から右にある洗面所から出てきたのは、下着姿の我が姉、瀬谷蒼子だった。
　つうか、服ぐらい着ろよ。
「今日も遅かったけど、前に言ってた部活？ハッチーいるんだっけ？この頃会ってないけど元気してた？」
「…　気になるんなら自分でメールしろよ」
　あんたもあいつのアドレスもってンだろが。
「いや、だってあの子、メールすると、すごく長文になってかえってくるんだもん…　なんか少し怖い」
「…　だろうな」

姉の言葉に、あいつならそんなことをやりかねんと同意する。
「そういやあんた、高校では大丈夫？」
「……」
姉の言葉に一瞬言葉がつまる。
しかし、それは本当に一瞬だけ。
すぐに口を開け、言葉を紡ぐ。
…これ以上、心配させることなどできない。
「…心配されるほどのことはまだなにもねぇよ」
「そう…それならいいけど」
「……」
俺の言葉にそう返すと、姉はそれじゃ晩ご飯よろしくねー、と言い捨て部屋に戻っていった。
寝る気だな…つうか、晩飯俺が作るのかよ。
「…はぁ」
なんともいえない疲労感が全身に襲いかかり、自室のベッドに対し誘惑がかかりながらも、なんとか抵抗し、面倒ながら晩飯の用意に取りかかった。
「お姉ちゃんパスタがいいなー」

「・・・　黙って寝てろ」

結局晩飯は、カップラーメンとなった。

やはり彼は疲れている

目を開く。白い空間に俺はいた。知らない場所だ。
しかしここが何処か疑問に思う前に瞬間的に気づく。
(…　あぁ、夢か)
あのあと俺はカップラーメンに文句をいってきた姉を適当に受け流し、自室に戻って疲労感たっぷりの体をベッドに投げ捨てたはず。
夢遊病でもない限り、目を開けた俺が見える景色は自室の天井だけのはず。
つまり、これは夢だ。
(…　変な夢だな)

あらためて俺の周りを見渡せば白しかなく、それ以外の色は見当たらない。
それはまるで俺を異物としてキャンパスに描いてるように…
(…　なに考えてンだ、俺は)
この頃特に憂鬱な自分の心に葛を入れ、夢のなかで夢から覚める方法について考える。

その時、白い空間からふと画面が現れ、ある光景が流れた。
『瀬谷くんが金目川さんのこと・・・』
「ッッッ!!!」
反射的に、生理的に、本能的に、俺はその流れてくる動画の光景から目を剃らし、耳を塞ぎ、心を閉ざす。
嫌いなやつを見ると反射的に目をしかめるように、
猫がネズミを本能的に嫌うように、
ボッチがリア充を生理的に嫌うように、
流れてくるその光景は、俺にとっては耐え難い地獄。
先程まであった余裕ある心は、いまではまるで拳銃を目の前に突きつけられているような絶望に変わる。
・・・ろ
思えばこのときからだろう。
・・・めろ
俺が他人を信用できなくなったのは。
・・・やめろ
俺が自分以外の人間に嫌悪感しか持てなくなったのは。

「やめろッッッ!!!」

そして俺は、あの地獄ような夢から、目を覚ました。

「はぁはぁ…」

シャツが汗によって肌に引っ付き気持ち悪い。

手のひらを見ると、ここ最近出したことのない量の汗がびっしょりと付いている。

「… チッ」

先程から沸き上がってくる先日と同じ嫌な感情を舌打ちで打ち止める。

(… 5時か)

手のひらの汗を適当に拭き取り、ケータイを開いて時刻を確認する。

悪夢のせいでいつもよりもかなり早く起きてしまった。

当時は毎日のように見ていたが、この頃は全く見てなかった。そのせいでかなり取り乱してしまい、さらに自己嫌悪。

「… はぁ」

何故あのような夢を見てしまったのか。

先日の平塚女史との会話のせいであろうか。

疑問はつきない。しかし…

「風呂、入るか…」

俺はその疑問をすべて投げ捨て、とりあえず今なすべきことだけを頭で考え、片付けるため行動に移す。

その行動が悪夢の内容を思い出さないようにするためかは、今の俺には分からないし、考えたくもなかった。

つうか…

ガチャッ

「……　あ」

「…　さっきからあんたは何をしてンだよ」

先程から人の気配を感じていたドアを開け、その先に聞き耳をたてていたのは俺の姉、瀬谷蒼子だった。

「いやー、壮介の部屋から大きな声が聞こえたから、なんだろうって思って、つい…」

姉は頭をかき、空笑いをしながらそう言う。

「壮介…　もう、大丈夫だよね？」

「……」

俺は心配そうに言う姉の姿を見て、先程とは違う嫌な感情が体の中で生まれてくるの

に気付いた。
（また、心配かけさせたか…）
思い出したくもない、中学二年のときの記憶が、頭のなかでフラッシュバックを起こす。
「…はぁ」
俺はため息を一つ吐くと、姉と同じように頭をかきながら、言葉を紡ぐ。
「…昔の夢見ただけだ。だから大丈夫だ。
…今の俺はもう間違えねぇから」
俺は本心をそのまま言い、姉から顔を背ける。
身内とはいえ、少しばかり気恥ずかしい。
「…そっか。壮介がそう言うんなら、私は信じるよ」
「……」
姉はそれだけ言うと、自室へと戻っていった。
戻っていく後ろ姿は昔から俺が尊敬していた、姉の後ろ姿そのままだった。
「あ、壮介。起きてるんなら朝ごはんよろしくね。」
「……」
尊敬していた（？）姉のはずだ。

「…　はぁ」
一つため息を吐き、着替えを持って風呂場へと向かう。
心なしか俺の体を蝕んでいた感情が先程より小さくなっているような、そんな気がした。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「おぉ、茅ヶ崎がすげぇ疲れた顔してる」
「…　そっとしといてやれよ」
悪夢を見てから早三時間が経ち、現在朝の総武高校。
あのあと風呂に入った俺は他になにもすることがなかったので作曲作業へ移った。
作曲作業中は皮肉にも、心が病んでれば病んでるほどに、完成形のメロディが頭のなかに浮かんでき、いつもよりもはかどった。
そのせいで結局朝飯は姉が作ってしまったが。
そしていつも通り登校し、
いつも通り偶然通学路で高津と会い、
いつも通り偶然高津といっしょに教室に入れば、
まず目にはいってきたのは、先程の高津の言ったとおり、まるでセミの脱け殻のように魂の抜けた状態の茅ヶ崎の姿であった。

きっと昨日言っていたバイト先でなんかあったんだろう。
残念だったな… どうでもいいが。
「よう、茅ヶ崎。なんかあったの？」
「… ほっとけって言っただろうが」
人の話を聞かない高津に小さいため息をつき、仕方なく俺も話題に参加する。
「……… あ。瀬谷、高津。おはよう」
「… おい、茅ヶ崎、本当に大丈夫だろうな？」
いつもよりも三割増しの笑顔と、やつれた頬を見せてくる茅ヶ崎にかなり違和感をおぼえ、思わず様態を確認してしまう。
それほどまでに今の茅ヶ崎は疲労感を見せていたのだ。
「… うぅ、聞いてくれるか瀬谷～」
「……」
すると茅ヶ崎はまるで緊張の糸が解けたかのごとく涙腺を崩壊させると、昨日と同じようにこちらに体をすがりよらせてきた。
… まずい、墓穴掘ったか。
「… おい、ちょっと離れろ茅ヶ崎」
「瀬谷～、実はな～、バイト先の先輩がな～」

「……」
まずい、本格的に聞く耳持たなくなってきている。
…　仕方ない、不本意だがあいつに助けを求めるか。
「…　おい高津」
「あ、ケイコちゃん。どうしたの、こんな朝早くから」
「……」
不本意に助けを求めた先を視界に入れれば、タイミングを見計らったかのごとく通話中。
一瞬その携帯を壊してでも茅ヶ崎の相手を任せようかと思ったが、高津はともかくケイコちゃんとやらが不憫なのですぐにその考えを打ち払う。
「……　はぁ」
ため息を吐きながら仕方なく、本当に仕方なく茅ヶ崎の話に相づちを打つ俺だった。
…　だから女子たち、写メをとるな。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「…　つまり、その川崎というバイトの先輩がお前にパワハラしてくるわけだな」
「いや、だから違うって…」
あのあと結局茅ヶ崎の愚痴らしき話にホームルームが始まるまで俺は付き合い、現在

昼休み。（ちなみに茅ヶ崎の様子はもう普段通りになっている）

泣きながら話していたため全く聞き取れなかったが、内容は要約して要約すればそんな感じだと思ったんだが…

「そうじゃなくて、川崎さんは良い人だったんだよ。俺に仕事のノウハウ教えてくれたし、自分の学費のために一生懸命働いてるし…」

「… じゃあなんで朝あんなに落ち込んでたんだよ」

つうかなんでお前は泣きじゃくりながらそんな良い人の話してたんだよ。普通に勘違いするだろうが。

「… だって昨日カクテル二回もこぼしそうになったし、オーダーも何回か間違えそうになった… バイト初日からこんな体たらくじゃ絶対やめさせられるよ俺!!」

「… こぼしてねぇし、間違えてねぇのに辞めさせられる訳ねぇだろうが。どんだけ悲観的なんだよ、お前」

卑屈よりはまだマシだが。

そんな感じで茅ヶ崎と駄弁りながら飯を食っていれば、ふと肩を誰かが叩いてきた。

振り返ればそこにいたのは少し顔がにやけた高津だった。

… まぁ、この教室で俺に話しかけれる人物などこいつと茅ヶ崎以外いないが。

「… ンだよ、気持ち悪い顔して肩叩くな。知り合いだと思われンだろ」

「瀬谷って高津に対してはすごい毒舌だよな・・・」
　そんな茅ヶ崎の評価を耳に入れつつ、高津が一方の手の親指で教室のドアの方を指し示しているのが目にはいり、そちらの方を向くと、いかにも待ってます的な雰囲気を醸し出している雪ノ下雪乃の姿があった。
「いやー、まさか瀬谷にぁあんな美人な先輩の知り合いがいたとは・・・　友達として鼻が高いな!!なぁ茅ヶ崎」
「ていうかあの人、国際教養科の雪ノ下さんじゃ・・・」
　二人がそんなことを言っている間に、俺は刹那の速さで雪ノ下雪乃のもとまで行く。
　理由は簡単。教室のやつらに知り合いと思われたくないからである。
「ん?茅ヶ崎あの人知ってんの?」
「いや、知らない方が珍しいというか・・・　ってあれ、瀬谷は?」
「あれ、さっきの人もいなくなったな・・・　まさか逢い引きか!?」
「いや、あり得ないから・・・」

ーーーーーーーーーーーーーー

「いきなり人の手を掴んで、尚且人目のつかないところへ連れていくなんて・・・　通報されても言い訳できない所業よ、瀬谷くん」
「・・・　あんたが前予告なしに俺の教室に来るからだろうが」

いきなり教室に現れた雪ノ下雪乃と共に昇降口まで進みながら愚痴を言い合う俺と雪ノ下。

なんでも昨日の葉山隼人の依頼についてミーティングを行うらしい。

そのため奉仕部全員を集めようとしたのだが、如何せん俺のメアドを知っているやつがいなかったらしく、(唯一持っていたあいつも消したので)仕方なく雪ノ下雪乃が俺の教室まで迎えに来てくれたらしいのだ。

何ともありがた迷惑である。

「…　つうか俺なにも仕事ねぇんだから欠席でもいいだろうが」

「あなたは自分でなくともできる仕事を人に押し付けるなんてできるのかしら?」

「…　できねぇだろうな」

理詰めで真理を突いてくる雪ノ下になにも反論できなくなり、それ以上はなにも言わず到着した昇降口で残り二人の奉仕部を待つ。

そして数分もしないうちにその二人が現れれば、ミーティングの開始である。

「ごめん!女子たちに聞いたんだけど分かんなかった!」

「…　いきなり躓いてんじゃねぇか」

由比ヶ浜結衣から報告される結果に少し落胆する。

こうやって自分に関係ないことでも失敗の報告をされると、若干気落ちする部分もあ

るものだ、ソースはないが。
「…　じゃあお前は？」
　由比ヶ浜結衣がダメだったのだから聞くまでもないが、俺は腐った魚に一応聞いておく。
「あ？あぁ、俺はこれからするんだよ」
「…　まだなにもしてねぇのかよ」
　予想よりも斜め下を突いてきたその腐った魚に、もはや呆れしか出てこない。
　将来こいつに責任ある仕事は持たせてはいけないと思いながら、俺はため息をはく。
「…　せめて草よりは役に立てよ」
「今の一言でお前が俺をどんな風にみていたか分かってしまった自分が憎い…」
　落ち込んだか。
　そこまで純粋なキャラじゃないのにな。
「あ、そうだ。せやっち、またこういうときに連絡とりにくいのも面倒だからさ、メアド教えて」
「…　あぁ、分かった。
　つうか、こいつが俺のメアド消してなければこういうことにもなんなかったんだけどな」

由比ヶ浜結衣の提案に賛同しつつ、俺のメアドを消した腐った魚を睨む。
「に、睨むなよ…　じゃあ俺とも後で交換するか？」
「…　いらん」
何が悲しくて怯えた男からメアド貰わねばならないのか。
スパムの方がまだマシだ。
「では、今度は放課後に部室でミーティング。よろしく頼むわね」
メアドを交換し終えた俺たちは、その雪ノ下雪乃の言葉を皮切りに解散していった。
結局、成果のないままに…
ーーーーーーーーーーーーーー
「瀬谷、もうホームルームも終わったぞ。いい加減起きろ」
「……」
まどろみの中にいた俺の意識がだれかにより体を揺らされ、そのまま現実へ戻っていった。
あのあとミーティングを終えた俺はとてつもない疲弊感に襲われ、そのまま五、六限を睡眠によって潰して今に至る。
「…　茅ヶ崎か」
「誰だと思ったんだよ、全く…

あのあと戻ってきて急に寝始めたから驚いたんだぞ」
いかにも怒ってますアピールをしてくる茅ヶ崎だが、やはり根が優しいからか全く反省の意を覚えない。
恐らくこれが平塚女史などであったならば、きっと殴りかかってきたのだろうが。
「…　あぁ、悪いな。起こしてもらって」
「いや、別に良いけど…」
一応起こしてもらったことの感謝の意を示せば、茅ヶ崎がなにか言いたげな表情をするのが目に入った。
「瀬谷、俺も大概疲れてるけど、お前も大丈夫か？」
「……」
意外だった。
いつも自分のことで精一杯なあの茅ヶ崎が、俺の心配をしてくることに。
…　いやそれ以上に俺がやつれていたということか。
「…　気にすんな。俺のこれは本当に問題ねぇよ」
「そうか…　なら、いいんだけど」
茅ヶ崎はそういうとそのまま別れを告げて教室から出ていった。
「…　で、お前は何か用か？」

「いや～別に♪」
そう返事しながら携帯を打つ高津。
おそらく相手はいつも言ってるケイコちゃんとやらだろう、腹が立つ。
「なぁ瀬谷、彼女も良いけど、友達も良いよな～」
「・・・ だから何だよ」
「いや、特に意味無し。じゃあな～」
「・・・・・・・・」
そう言うと、同じく教室から出ていく高津。
（・・・ 友達、か）
そんな普段思わないことを考えながら、俺は部室へと足を進ませた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ガララッ
「瀬谷くん、ノックを・・・ もういいわ」
部室に入ればまずかけられるのは雪ノ下雪乃によるノックの催促。
しかしもはや諦めたのか、もしくは呆れたのか一つため息をつき、言葉を切る。
つうか・・・
「・・・ 葉山もいるのか」

「ん？あぁ。なんでもヒキタニくんが俺にもいてほしいみたいでね」
「…　あっそ」
「うわっ、せやっち自分で聞いといて興味無さそう」
俺はそう言う葉山隼人を尻目に、腐った魚の方をチラと見る。
その顔を見れば…
「…　お前またろくでもないこと考えただろ」
「あ？いや別にそれほどのことじゃねぇよ。ただボッチ特有の人間観察とだな…」
「…　あぁ分かった。すげぇどうでもいいことが」
この自慢げな顔と得意気な声はほぼ間違いない。
俺はこの顔と声を知っている。
「ま、一回聞いてみろよ。思ったより幼稚な事件だぜ、この事件」
「……」
気色の悪い笑みを浮かべながらそう言うそいつに、俺は一抹の不安…　すらも抱かなかった。
その代わり思うのは、昔より変わらないこいつの性格への呆れ。
（…　こいつは本当になにも変わらんな）
あの頃から全くな…

「・・・ そんな事件に嬉々として解決取り組むお前も結構幼稚だからな」
「うっせぇ」
そう言うとこいつは他のやつらを呼び、今回の事件の顛末について話し始めた。
そして、確かにこいつの言った事件の概要はとても幼稚なものであった。

やはり瀬谷姉弟はどこかおかしい

「…　よし、お前ら。リクエスト出せ。今日はバーゲンセールだ」
「じゃあＡ○Ｂ４８やってー!!」
「…　残念、それは定休日だ。代わりに神○川ならできるが…」
「……」

中間テスト間近に備えた休日の午後。

元々勤勉で有名（？）であるこの俺は朝の内から勉強に取り組み、テストに備えていた。（ただし文系科目に限る）

しかし、朝から夜まで四六時中教科書ノートににらめっこするなどあの天才超人雪ノ下雪乃でもない限りほぼ不可能であるからして、つまりは集中力が切れたので適当に道をぶらぶらしていたら現在の状況…　簡単に言えば、俺の幼馴染みにして奉仕部の後輩、瀬谷壮介が公園で小学生とギター片手に戯れている状況にはちあわせるに至ったのである。

（今気づいたのだが「である」を多く使用すると頭が良いように聞こえるのである。どうでもいいか？どうでもいいのである）

「ねぇ瀬谷兄。あそこで目の死んだお兄さんがこっち見てるよ」
「…　あン？…　だめだ、目を合わせるな。あれは妖怪「独りボッチ」といって、目を合わせればそいつの友達を食っていく凶悪なモンスターだ」
「へー、凶悪なのに何か可哀想な名前だね」
「…　妖怪や怪獣なんて得てしてそんなものだ。一人ぼっちで出てきてはやられ出てきてはやられ…　そんなやつらが悟りを開いたなれの果てがあれだ。合掌してやれ、成仏させるためにな」
「おいやめろ、俺を哀れるな、出荷される豚を見る目で見るな、波紋使いかお前ら」
こちらに向かい無言無表情で手を合わせてくる小学生たちとそれを教えた幼馴染みに思わず突っ込みを入れる。
ていうかそれ絶対社会に出て必要ない知識だろ。
なんなら学校でも自慢できない知識ぐらい。
ていうかテレビでよく見るアレ。アレって自分以外のクラスメイトの何人かは絶対見てるからあんまし自慢できないよな。
言ってみて、「それ昨日〇〇でやってたヤツじゃん」って言われて恥かくのがオチなんだよな。ソースは俺。
「ていうかお前は無垢で純粋な御近所のお子さんになに変なこと教えてんだ。そして俺

の小6の頃のあだ名を使うな、トラウマ思い出しちまったじゃねぇか」
「・・・ テメェのあだ名なんていちいち知るかよ」
ちなみに俺のあだ名は小学生時代には二桁を越える。
なんなら中学校のやつも合わせれば・・・ いや、これ以上はなにも言うまい。
「ていうかお前、まだこんなことやってたんだな。いい加減止めたかと思ったが」
「・・・ ただの暇潰しだ。お前みたいなヤツを作んねぇためにやってんじゃねぇからな、断じて」
「なにそのツンデレに偽造した遠回しな嫌味。危うく流しそうになったじゃねぇか」
ツンデレ幼馴染みはもはやテンプレだよな。こいつ男だけど。
「ねぇねぇ、瀬谷兄。その目の死んだ人知り合いなの?」
そんな会話をしていたら俺たちの会話に全くついてこれない小学生女子の一人が核心的な質問をしてきた。
ていうか本当に純真無垢そうだ・・・
全く、小学生は最高だな!!
ギロッ
俺の汚れた考えが瀬谷センサーに伝わってしまったのか、ものすごい形相で睨んでくるこいつ。

てか怖ぇよ、あと怖い。

「はぁ…　こいつは知り合いでもなんでもねぇよ。ほら、続きしてやるからリクエスト出せ」

瀬谷はそう否定するとス、ストラップと言うのだろうか、肩に掛けてあったそのギt…　ア、アコギを構え直して、小学生にまた曲のリ、リクエストを募集した。

「うーん、じゃあやなぎ〇ぎのユ〇トキやって!!」

「…　残念、そいつも定休日だ。津軽海峡〇景色ならできるんだが。それでも聴きたいならジェネ〇ン・ユニ〇ーサル発売、規格マ〇シングル、作詞や〇ぎなぎ、作曲北〇勝利の歌、ユキ〇キをCDで買っとけ」

「いや、伏せ字多すぎて何言ってんのか分かんねぇよ…」

一昔前のエロゲか。

あの〇〇音の多さには当時子供ながら驚いたものだが…

い、いや、やったことないけどな!!

「あ、壮介とガキんちょ共。それと…　誰？」

そんないつもはしない貴重なこいつのボケを真面目に突っ込んでいれば、急に後ろから声がかかった。いや俺宛ではないようなのは分かっているが。誰って言われちゃってるし。

「…　姉貴か、どうした？」
「久しぶりー!!蒼子姉!!」
…　なんだと？
瀬谷の姉で、蒼子と言う名前…
まさかと思い、振り返ってみればそこにいたのは俺の予想通りの御仁。
このくそ生意気な後輩と同じ血が流れてるとは思えないほどの美貌と優しさを持った、マイエンジェルにしてマイマリア、瀬谷蒼子その人だった。
「あれ？その腐った魚のような目…　もしかして君ハッチー？」
「は、はい!!その通り私目姓は比企谷、名は八幡、生まれ故郷は千葉にございます!!」
まずい。少し興奮して前時代的な挨拶をしてしまった。
いや、だがこれでもこの人に対しては畏まり加減が足りない。
なぜならこの人は俺の幼馴染みというステータスを持っているのだ。
このセーブなしリセットなしのクソゲーな俺の人生の中で唯一の希望なんだ、失礼などあってたまるものか!!
なんなら土下座してもいいほどである。
「アハハー、やっぱり昔と変わらず気持ち悪いね。あと前のあのメールさすがに気持ち悪かったからああいうの控えた方がいいよ？あとその腐った目も気持ち悪いからいい

加減直してね。あと生理的に気持ち悪いから」
「いや、そちらも変わらず手厳しいスね。あと付き合ってください」
「いや無理だから」
即答だった。いや分かってたけど。
しかしこんなことで挫ける比企谷八幡ではない。負け戦に関しては百戦錬磨の俺にとって、負けてからが真の勝負。
そう、瀬谷蒼子に対する比企谷八幡の選択肢はここから始まっている!!
「お願いです!!一回だけ、一回だけでいいですから!!」
「いや往生際悪すぎだから!!普通子供たちが見てるところで土下座なんてしないよ!!」
「ふっ、蒼子さんと一回だけデートできる権利が手に入るなら、こんなこと屁でもないです!!」
「私とのデート権をそんな安っぽいプライドと同価値にしないでー!!」
結局このあと俺は瀬谷に蹴られ、小学生たちから白い目で見られる中、蒼子さんと瀬谷に引きずられて公園をあとにした。
――――――――――――――――
ズズズッ・・・ドサッ!!
「痛った!!お前いきなり投げんなよ!!」

「…　うちの姉にセクハラまがいな行為をして、尚且つお前の言う純真無垢なガキ共に見苦しいものを見せたお前には、この程度じゃまだ足りない罰だと思うのだが」
「さすがに子供たちの前でアレはないよ～。気持ち悪さも節度を持とうね、ハッチー♪」
「は、はい!!蒼子さん!!」
流石蒼子さん。あんなことをしてしまったというのに優しく声をかけてくださるとは…
その容赦のない言葉とは裏腹の優しさに俺は惚れたのだ。
「…　おい、あんまり人の姉をその腐った目で見るな。汚れるだろうが」
「俺の目を感染物のように言わないでくれる?本当にトラウマだからそれ」
そして俺が触れてくると本気の拒絶反応してくるってどんないじめだよ。
「…　いつも雪ノ下からいじられて「ゆ、雪の下!?」…　どうした姉貴」
瀬谷が雪の下の名前を出すと急に大声を出す蒼子さん。
流石雪の下、名前だけで蒼子さんをも脅かすとは…　いやあり得ないな、接点無いし。
「どうしたんですか、蒼子さん?」
「い、いやなんでもないよ。そういやこの近くだったらハッチーの家の方が近いよね。ちょっと寄ってこうよ、壮介」
「…　こいつの家にか?あまり気が進まないんだが…」

無理矢理話を逸らそうとする蒼子さん。その必死さからあまり触れない方がよい話題なのだろう。

エアーリーディング一級の俺たちはとりあえず流れに移った話に乗っかることにした。

「大丈夫だよ～。家には小町ちゃんいるだろうし、なんなら夕御飯ご馳走してもらお♪」

おぉ、流石蒼子さん。その図々しい物腰や思考に痺れる憧れない!!憧れねぇのかよ。

いや、というか…

「あの、別に家来るのはいいんですけど俺とそいつテスト前なんですけど…」

「あ～大丈夫大丈夫。壮介には私がみっちり家庭教師に就くから。赤点なんて取らせないよ!!」

「… 別に就かなくても中間テストぐらい自分で対策は出来るんだが」

そう言いガッツポーズをとる蒼子さんとそれに突っ込む瀬谷。

いや、その姿は確かに魅力的なんですけど…

「あの蒼子さん、俺もテストするんですけど…」

「ん?うん、頑張ってね」

「いや… その…」

「???」

「いや…　何でもないです」
　出来ることならおこぼれで教えてもらおうかとも思ったが、そんな俺の望み叶わず、ただ小首を傾げた蒼子さんが可愛かったという結果に終わった。
　やっぱり蒼子さんマジ蒼子さん。
「…　小町の方に連絡とったが、兄が帰らないうちにどうぞ来てくれ、だとよ」
「え、なにそれ。なんで俺妹からも邪魔者扱いされてるの？一家の大黒柱がこんな扱いでいいのか？」
　いや、よくない。（反語）
「大黒柱って…　ハッチーって変なところで結構図々しいよね」
「…　というかお前が大黒柱だったら、その家二日で腐り落ちて崩れてるだろ」
「なにそれ。なんで俺物質的にも腐ってることになってんの。違うからな、腐ってんのは性根だけだからな」
「その二つは自分でも認めちゃうんだね…」
　呆れたようにぼやく蒼子さんだが、これだけ他人から言われたら認める他あるまい。
　俺は自分を客観的に見ることが出来るんですよ。
「…　っうかそんな話どうでもいいだろ。行くならさっさと行くぞ」
「了解賛成レッツゴー♪」

「おーい、家主ここにいるんですがー?」
その後その傍若無人姉弟は俺を無視し続けて比企谷邸へ向かった。
おいそろそろ俺に忍者の免許くれよ。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ピンポーン
「こーまちちゃん!あっそびっましょ♪」
インターホンを鳴らし、大声でな○じまの謳い文句を言う蒼子さん。
そしてそれに呆れるようにため息を吐く瀬谷。
そしてそれを傍観するその家の一員の俺・・・ おい、この絵面おかしいだろマジで。
「はいはーい。おぉ!!蒼子さん、お久しぶりです~!!ソウくんも最近メールだけで会ってなかったから久しぶり~!!」
「ゴメンねマッチー、いきなり押し掛けて。最近お邪魔してなかったからマッチーが恋しくなってつい♪」
「・・・ 俺は姉貴の付き添いだ」
玄関が開けば俺の妹の比企谷小町がいつもどおりのアホっぽい雰囲気を漂わせながら現れた。
ていうかおい、玄関で社交辞令な挨拶するんじゃありません。中へは入れず手持ち無

沙汰になるじゃねぇか、主に俺が。
「て、あれ？お兄ちゃんも一緒なの？」
「今ごろ気付いたのかよ。さっきからここにいたんだが」
妹にすらこの空気スキル効くのかよ。もはや最強じゃねーか、ＭＭＯ内限定だが。
まぁとりあえずこちらに気づいたのなら言っておくか。
「小町、そろそろ家あがらせてやったらどうだ。玄関で積もる話もないだろ」
「あ、すいません蒼子さん、ソウくん。気遣いが足りずに」
「大丈夫だよマッチー♪君の兄よりはマッチーは中々に気遣いの出来る人間だから」
「・・・　反面教師ってのは中々に役立つもんなんだな」
「小町を庇うふりして俺へ当てつけしないでくれない。それで得られるのは俺の悲哀だけですよ」
容赦のない姉弟の口撃を受け流し俺は空いた玄関までのルートをアイシールド２４よろしくに通っていく。
俺の走りは誰も止められない、いや誰も気付かない。はやくプロボウラーからスカウト来ないかな・・・
「ささ、お二人も上がってください」
「おっ邪魔しま～す♪」

「……」

瀬谷姉弟も上がってきたことを後ろから聞こえる声で確認するが、訓練されたボッチはそんなことにいちいち動じはしない。

いつもどおりに自分の部屋へと戻り、テスト勉強を励むだけだ。

ちなみにこの経験は小町が家に友達を呼んできたときに養われた。

本当になんで友達の兄弟帰ってきただけであんなシーンとすんだろうな。こっちが悪いことしたみたいにいつも感じる。

「そうだソウくん。久しぶりでなんだけど数学教えてくんない？もぅ分かんないところが多すぎて」

「…　別に構わないが」

「あれ？壮介教えるの？じゃあ私お昼寝しとくね～」

なん…　だと…

小町が瀬谷に勉強を教えてもらう…　？

そんなの瀬谷にとって絶好たる選択肢じゃねぇか!!阻止しなければ!!

「おい小町、俺も一緒に勉強していいか？」

「え～、だってお兄ちゃん勉強始めると一人でとことん進めるから、面白みがないんだけど」

「おい、バカ。勉強に面白みや楽しさを求めるな。あれは無心に励むものでわいわい騒ぎながらやるもんじゃねぇよ」

なんなら喋りだすやつは追い出していいほどである。

「・・・　言ってることは正論なんだが、おまえが言うと何かひねくれた捉え方になるな」

「こんな兄がいつもすいません・・・」

何故か正論をいったにも関わらず、妹と後輩に可哀想なものを見る目で見られたときは、この世の無情さを思い知らされた。

社会はやはり俺に冷たいらしい。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「・・・　この問題は公式を使って解くものだ。まず（ｘ＋ｙ）の式があるとする。そしてそこにまた（ｘ＋ｙ）の式をかける。そうするとｘの二乗と２ｘｙとｙの二乗が出来る。ここのｘとｙにさっきの問題の数字を入れてみろ。答えが出てくる筈だ」

「分かった・・・」

勉強会が始まって早一時間。

結局あのあと瀬谷と小町だけで始まるはずだった勉強会に無理矢理俺も参加し、リビングにて教科書とノートを囲むことに。

俺はとりあえず元々やるつもりだった山川の問題集を傍らに問題を片っ端から解い

ては答えあわせをし、間違えたものを問題と答えと解説を丸々ノートに写していく作業を悶々と続けていく。

勿論この二人の監視も怠りはしていない。

なんならさっきの瀬谷の解説も聞いていたほどだ。意味はちんぷんかんぷんだったが。

「あ、解けた…　今まで解けなかったのに」

「…　なんで公式当てはめるだけの作業ができないんだよ」

マジか小町。今の解説で解けたっておまえ天才か？

コマチ・イズ・テンサイか？

「…　おい腐った魚。２ｘ二乗－７ｘ＋３の因数分解は？」

「うえ!?え、ええっと…　６だ!!」

急に瀬谷から数学の問題を出されたから思わず声が上擦って答えてしまった。というかいきなり難問だすのとかやめろ。俺の数学力をなめてるのか。

「…　因数分解っつってんのになんで単数項出てんだよ。あとこれ中三だからな」

「お兄ちゃんさっきからこっちに意識醸し出しすぎだよ。なんなら殺気

も出してたよ」

おぉふ…　まさかそこまで俺の妹愛が表面化していたとは危ない危ない。

また瀬谷姉弟辺りからシスコン扱いされるところだった。
「…　妹好きもほどほどにしろよ、シスコン」
「おい、懸念していた辺りの話題をだすんじゃねぇよ。そういうお前もシスコン気味ンだとゴラ」…　い、いや何でもないです。風の囁きが聞こえただけです」
「…
凄みをかけてきた瀬谷に思わず萎縮してしまい、敬語で話してしまう。
俺は長いものには巻かれるタイプなのだ。分かりやすく言うとスネ〇タイプ。分かりにくく言うとフ〇ゴタイプ。
あ、違うわ。それ一歩前に踏み込めない人タイプだった。
「いやー、それにしても二人って真面目だよね」
「…　こいつが真面目なら全人類は真面目なやつしかいないことになるな」
「さりげなく俺をやるきない人間の代表にするな。違うから、俺は普通に真面目だから。真面目に不真面目だから」
猪の部下は連れていないが。
「でも小町の塾の友達でお姉さんが不良かした人いるらしいよ。夜とか全然帰ってこないみたい」
「…　ふーん」
「ほー」

どうやら小町は集中が切れたらしく、もはや雑談モードに入っている。
瀬谷の方も勉強する気はないないらしくギターを取り出していじり始めていた。
それならこちらも一安心なので、俺も自分の勉強に集中していく。
「でもね、そのお姉さんは総武高校に通ってて超真面目さんだったんだって。どうしたんだろうね」
「・・・　総武高校通ってててもどうしようもないやつぐらいいるだろ。こいつとか」
なにやら俺の悪口を言われたようだが、訓練されたボッチはその程度では揺るがない。
頭は暗記、目はノート、指を使って文字だけ綴れ。
数年の歳月によって産み出された俺の百八の特技の一つだ。
他には危機的状況で解説するなどある。どこのスピー〇ワゴンだ。
「まぁその子のお家のことだからなんとも言えないけどね。最近仲良くなって相談されたんだ。あ、その子の名前川崎大志って言うんだけど・・・」
「（・・・）小町」
俺は持っていたシャーペンを置いた。
瀬谷もギターを構えていた姿勢を崩した。
「その大志クンとはどういう関係なんだ?仲良しとはどういう仲良しだ」

「・・・男というのは皆、獣だ。油断や隙を見せたらすぐに襲われるぞ。ほら、お前の身近にそんなやつがいるだろうが」

「いや二人とも、なんか目が怖いんだけど・・・」

そんなことをしていたら後ろから誰かが何かで叩いてきた。って、ちょっ痛い！これ絶対金属！

「ホラ二人とも！マッチー完全に引いてるでしょ。いい加減にしなさい！」

蒼子さんだった。しかもエプロンを着て、おたま持ってる。

ちょっ可愛い、絶対女神。

「もう、乙女の友達を詮索しないの。ホラ、ご飯作ってやったから皆手を洗ってきなさい」

そう言われると確かに鼻孔をくすぐる美味しそうな香りがする。気づけばもう夕飯時の時間になっていた。

ていうかいつの間に作っていたのだろうか。来たときからずっとこの人ソファーで寝ていた記憶しかないのだが・・・

まぁ細かいことは気にしてはいけない。できればこの調子で毎朝味噌汁を作ってほしいほどだ。

ともあれ小町のことについても少し心配なので一応進言しておく。

「まぁあれだ、困ったことになったら言えよ。前に言ったろ、瀬谷と一緒に奉仕部とかいうワケわからん部活やってるって」
「あぁ…　ソウくんからのメールで見たことがあるような」
「…　そういえば小町にそんなメール送ったことがあるような」
そっちかよ。
何やら兄として複雑な気分になりながら、とりあえず俺は女神の作ったご飯へとありついていった。

高津克はいわゆるリア充である

中間テストを切ったある日の平日。
俺はいつもの通り奉仕部の活動が終わりそのまま帰宅・・・　ということをせず複合商業施設マリンピアに来ていた。
目的といってもただ譜面を買いにきただけなのだが、そこで要らぬエンカウントをしてしまった。
「茅ヶ崎、この服はどうだ?デートにはピッタリだろ?」
「いや、その服は派手すぎるから・・・」
「・・・　おい、俺はもう帰っていいか?」
高津と茅ヶ崎である。
なんでも高津のデートに使う服を選んでいるらしい、腹が立つ。
茅ヶ崎も何故こいつに付き合っているのだろうか。まぁ顔色から見るに無理矢理つれていかれたのだということが察せられるが。
しかもそのエンカウントしたのは二人だけでなく・・・
「高津、こんな服なんかもいいと思うが。特にこのドクロマークが君にピッタリだ」

「本当ですか先生!!茅ヶ崎、俺これ来ていく!!」
「いや、やめといた方がいいと思うけど･･･ というか平塚先生も適当に選ばないでください」
「適当とは失敬な。私は高津が彼女に濃い印象を持ってもらうために必要な服を選んでるだけだぞ」
「･･･ 印象っつっても悪印象じゃねぇか」
高津に要らぬ服のアドバイスを送っているアラサー教師、平塚静女史もいた。
というか俺が帰れない原因がこの人にある。先程から帰ろうとすればもれなく襟首をつかみ無駄にいい笑顔でもう一つの拳で脅してくる。
人恋しいのであろうか。そういう感情はあの腐った魚にだけ表してほしいものだが。
「そう言うな、瀬谷。買い物中に教え子にあったのならアドバイスのひとつも送るのが教師の勤めってものだろう?」
「･･･ そもそも買い物中に教え子にあったんなら注意をするのが教師の勤めだと思うのだがな」
何故この人はこんな自然に生徒の買い物に入り込めるのだろう。別にどうでもいいが。
俺としてはさっさとこの場を収拾させ、帰路に付きたい心で一杯である。

そんな俺の願いが通じたのか、やっと茅ヶ崎が高津の服のコーディネートを終えた。
「よし、こんなものかな…　瀬谷や先生はどう思いますか？」
「むっ、中々に似合っている。…　これでは私より早い既婚者が増えてしまうではないか」
「おいアラサー教師、心の声が表にでてんぞ。そしてその考えはあまりにも飛躍しすぎだと思うが」
つーかだからさっきあんな無茶苦茶な服選んでたのかよ。どんだけ結婚に飢えてんだか。
そんな平塚女史に冷やかな視線を送っていれば、高津もその服に納得したのだろうか、よし！っという気合いを入れる声が聞こえた。
「俺これにする！茅ヶ崎、選んでくれてありがとう！なんか奢るわ！」
「そう？だったら遠慮なく頂こうかな。瀬谷もどう？」
茅ヶ崎が俺を誘うが、先程から帰ることだけを意識していた俺としてはさっさとこの場を去りたい。
そのため否定の意を示そうとすれば…
「瀬谷も一緒に行くそうだぞ」
平塚女史が俺より先に茅ヶ崎の誘いに肯定していた。…　って

「…　おい、なに勝手に決めてんだ。俺は別に」
「顧問命令だ。瀬谷、君も行きたまえ」
「……」
横暴だ。というかそんな権限など聞いたことがない。
いや恐らく断ったらあの右ストレートが飛んでくるような恐ろしい権利なのだろうが…
「瀬谷、これは君のために言っているんだ。ただでさえ過去に暗い部分を持っているのだ。もっと今の関係を大事にしたまえ」
「…　ッチ」
いつものため息でなく、つい舌打ちが出てしまう。今の平塚女史の発言は、それほど俺の機嫌を悪くさせた。
「…　あんたも底意地が悪ィな」
「意地が悪くなければ思春期の子供の相手など出来るものか」
皮肉をたっぷり込めて平塚女史にそう言い、俺は高津と茅ヶ崎のもとへ行く。
その心には、これ以上俺の過去を知る人物の側には居たくはなかったという感情が大部分占めていたことは俺しか知らない。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

なにか黒いものを心に残しつつ、高津と茅ヶ崎と共に適当なカフェを探し当てる。しかしテスト前だからだろうか、中は学生客で列をなしていた。
なので別の場所にしようかと踵を返したところ・・・
「・・・　あっ」
「・・・　あン？」
目に入ってきたのは俺たちと同じ総武高の制服を着た目の死んでいる学生。
そしてその顔をようやく脳が視認すると、俺はおもむろに腰の体制を低くし、重心を整えると、瞬時の速さで片膝をそいつの鳩尾に向けて打ち込む。
「ぐふっ!?」
狙いは見事クリーンヒットし、腐った魚の目をしたそいつは膝をつく。
ふぅ・・・　我ながら良い仕事をした。
「ちょっ瀬谷!?いきなりなんでこの人蹴ったの!?」
しかし、俺の周りの人物・・・　特に茅ヶ崎は俺のその突然の奇行に驚いていた。
ちなみに高津はメールに集中していてこちらの状況に目もくれていない。おそらくケイコちゃんだろう、爆死しろ。
「・・・　あぁ、いきなり目線に入ってきたから、ついうっかりな」
茅ヶ崎に適当な説明を渡しそいつに目をやる。

回復したのだろうか覇気と生気のない目でこちらを睨んでいた。
「お前、いきなり蹴るやつがいるかコノヤロォ・・・」
「・・・ ワリィワリィ、ツイウッカリナ」
片言に謝るが、勿論反省などはしていない。
こんなゾンビみたいなやつがいきなり現れたら誰だって蹴るはずだ。
なにせ、もはやバイオハザードの世界の住人のような顔つきなのだから、こいつ。
しかしいい加減こいつがひざまついてるせいで道行く通行人より奇異な目線が送られてくるのが鬱陶しく感じられてきたのでカフェの中へ退散していく。
レジが混んでいるのはこの際仕方がないだろう。
「あっ、ちょっと瀬谷待ってよ。高津、ここでお茶しよう」
「ん?あぁ分かった。ってこの膝着いてる人誰?」
「えーと、瀬谷の知り合いみたいな人?というか、もう放っといてあげようよ・・・」
後ろでは茅ヶ崎が高津を呼んでいるらしく声が聞こえる。
しかし俺はそんなことより前方の視界に写る二人へと意識が向いていた。由比ヶ浜結衣と雪ノ下雪乃と・・・ あと一人名前も知らない総武高の学生がレジで並んでいたのである。
俺は無意識のうちにその二人から見つからないよう、レジに並ぶ他の客の後ろへと隠

れた。
　何故そんなことをしたかは俺にも理解不能だ。
　そうしていれば、案の定俺の後ろで構えていた茅ヶ崎と高津がポカンとしていた。
「瀬谷、どうしたんだ？」
「さぁ？あ、雪ノ下さんが並んでる…　もしかして瀬谷気まずいの？」
「…　あぁ、まあそんなところだ」
　なにやら少しだけ口元がにやついている茅ヶ崎にいつもと違う雰囲気を感じながら、二人の見解に肯定しつつ、このカフェは止めとこうと進言する。学校外で知り合いに会うことほど気まずいものもないからだ。
　しかし二人は…
「レジに並んじゃったしここにしとこうよ。べ、別に瀬谷の入ってる部活に興味あるとかじゃないから」
「これから他のところ探すの面倒だしここで良いんじゃね？べ、別に雪ノ下さんに興味あるわけじゃないからな」
「…　高津、お前彼女いるだろが」
　何故か積極的にこのカフェに入ろうとしていた。
　まぁ下心が言葉として出てるがな…

そしてそんな会話をそれほど小さな声を使わずしていれば、近くにいる知り合いには声色でばれる可能性があり、
「あれ、せやっちじゃん。放課後ぶり～」
「…　はぁ」
結局俺は由比ヶ浜結衣に見つかった。
「えっ、なんでそんな落ちこんでんの？私なにか悪いことした？」
「…　いや、なにか実態のないなにかに負けたような気がしただけだ。気にすんな」
俺がなにか途方もない虚無感に襲われてることに気にかける由比ヶ浜結衣の問いを適当に流せば、その後ろから新たに顔見知りが現れる。
「瀬谷くん、奇遇ね。というより貴方も勉強会に誘われてたのかしら？由比ヶ浜さん」
「あ、いやえ～と…」
雪ノ下雪乃の質問に気まずそうに目を泳がす由比ヶ浜結衣。
なにやら答えづらそうだったので代わりに返答しておく。
「…　別に俺は誘われていないがな」
「ちなみに俺も誘われていないんだが」
不意に聞き覚えのある、腐った魚のような目をしている人間がだす声が後ろより発せられる。

その直後、俺はノーモーションで右足を背後へと打ち込もうとするが…
「ちょっ!?タンマ!ここ店の中だから!千葉県民ならモラルを守れ!」
「…　ちっ」
さすがに店の中でまで暴力沙汰はしたくなかったので、俺は上げた右足を地につけ無念の舌打ちをつく。
そして図らずとも奉仕部部員一同がここに集まったのであった。
「えっと瀬谷、この人たちが瀬谷の部活の先輩?」
「なにかイメージと違うなー…」
「…　勝手にお前らが想像してただけだろうが」
不本意な感想を述べてくる高津にツッコミながらため息をはく。
こんなはずではなかったのに…
「で、そちらは瀬谷くんのお知り合いかしら?」
すると雪ノ下雪乃が俺の後ろのこいつらを気になったのか、話題を降ってきた。
「はい、瀬谷の友達の茅ヶ崎って言います」
「同じく高津です!よろしくお願いします!ところで雪ノ下さん、メアド交換…　痛った!?」
なにやら無作法なことを高津がしようとしたのでとりあえず足の爪先を踏む。てい

うか初対面にいきなりそれはないだろ…
「何故私の名前を知っているかはおいとくけれど… とりあえず驚いたわ。瀬谷くん、貴方友達いたのね」
「ゆきのん、そういうことヒッキー以外に正直に言うのやめようよ」
「なにそれ、なんで俺だけ例外的扱い受けてんの?差別なの?」
本当に驚愕した顔でこちらに失礼なことを言ってくる雪ノ下雪乃と、それを指摘する由比ヶ浜結衣と、なにやらギャーギャー騒ぐ腐った魚。
端から見たらかなり盛り上がっているが一人取り残されている中性的な男がいた。
「あの… そろそろレジ済ませた方がいいんじゃないかな?」
「… それもそうだよな」
その男、戸塚彩加の助言に従い、俺は騒いでいる後ろを放ってレジで注文をする。高津と茅ヶ崎も俺に習い注文を済まし(高津は律儀に茅ヶ崎の勘定も払っていた)、そそくさと奉仕部連中を横目に席へつく。よし、なんとかバレなかったな。
「いや、なんで先輩たちに黙って行くんだよ…」
「雪ノ下さんたち見事に気づかなかったな…」
「… 一緒にいる理由も別になかっただろ」
言い訳のごとくそう言って、頼んだコーヒーを飲みながら鞄の中より教科書とノート

とヘッドホンを取りだし、完全なる勉強の体制をとる。
一応2週間を切ったため、万全に整えとく必要もある。見れば茅ケ崎も問題集を取り出してテスト勉強をしていた。高津は携帯を弄ってたが。
そう意気込んだとき、不意に横から袖を引かれる。
片足入れた集中の域を追い出されたため、少し不機嫌になりながらもそちらへ顔を向けると、
「ソウくん、やっはろー♪」
そこに見たのは、いつもと同じアホな雰囲気を醸し出すあの腐った魚の妹、比企谷小町の姿だった。
「・・・　小町、なんでここにいんだよ?」
「や、この前話した大志くんの・・・」
そう話そうとする小町の座っていたソファーの向こうより来た鞄がぶつかる。総武高の鞄だ。
とりあえず鞄が投げられた方向に睨みをかけるとそこには腐った魚の姿があった。
「あ、お兄ちゃんだ」
「・・・　てめぇ妹に鞄ぶつけてんなよ」
なにやらとても腑に落ちないような顔をしているそいつに小町は嬉しそうに呟き、俺

は非礼を責める。
「・・・ 瀬谷はともかくなんでお前もここにいんだよ？」
「あ、そうだ。実は大志くんから相談受けてるんだよ」
そう言うと小町の向かいの席にいた学ランの制服の中坊らしき男子が会釈をする。
こいつ小町の知り合いだったのか。
あまりにもパッとしなかったから相席なのかと思ってたが。
そう思っていたら俺の向かいの席より声がかけられる。茅ヶ崎だ。
「瀬谷、知り合い？邪魔なら席はずそうか？」
「・・・ さっきまで人の部活の先輩に興味を引かれてたのは誰だよ？」
いや、まぁ・・・ と答えづらそうに目を剃らす茅ヶ崎。
別に気にしていないが、こいつはもっと自分に自信を持った方がいいと思う。
そんな中、結局奉仕部全員が小町のテーブルを中心に集まっていく。
俺の奉仕部活動が今再び始まった。

つまり茅ヶ崎千賀は女っ気がない

「さっきの川崎沙希って…」

小町の学友、川崎大志の悩みを聞いた俺たちは、雪ノ下雪乃の一言でこの件を奉仕部の依頼として捉えた。

腐った魚はかなり渋っていたが、部長である雪ノ下雪乃の発言に逆らえるはずもなく、やむやむ折れていた。（かくいう俺もそうであるが）

そして川崎大志が依頼の受理に対し、感謝の意を述べると俺たちはその場で自由解散となった。のだが、元々勉強会に来ていた雪ノ下雪乃や由比ヶ浜結衣ら、そして俺たちは店から出る必要がないらしく、結局帰路についたのは比企谷兄妹と川崎大志だけだった。

そんな内輪なのかそうでないのか分からないメンバーのなか、茅ヶ崎が俺に声をかけてきた。

「部外者だからなにも言わなかったけど、俺のバイト先にも同じ名前の先輩がいるんだけど…　ほら、前話したあの人」

「…　覚えてないが」

「ーーそれは本当かしら？」
茅ヶ崎のその話に俺が忘却の意を示せば、食い付いてきたのは雪ノ下雪乃。
当の茅ヶ崎は俺に話をかけたのに雪ノ下からリアクションがあったので少し挙動不審になっている。まぁ当然の反応である。
「え、えっとはい、今年の四月から入ったらしいので、時期も合うからもしかしたらって…」
「そう…　茅ヶ崎くんといったかしら？その店の連絡先、教えてくれないかしら？」
雪ノ下雪乃が茅ヶ崎に詰め寄っていると、茅ヶ崎の方より救援の視線がこちらに寄せられてくる。
そして俺はその視線を由比ヶ浜結衣へと回す。
すると由比ヶ浜結衣もその視線に気づき、雪ノ下の肩を掴んだ。
「ゆきのん近いって。せやっちの友達困ってるから」
「あ…　ごめんなさい。少しはしたなかったわね」
「いえ…　気にしてませんので」
そういう茅ヶ崎の顔は少し赤みがかっていた。意外だな、光合成系男子のこいつも異性を気にすることがあるのか。
普段は怪しくなるほど女っ気ないのに。

だがそれもつかの間に茅ヶ崎は自分のノートを少しちぎると、そこにどこぞの住所と電話番号を書いていって、それを雪ノ下雪乃へ渡した。

「あのこれ、店の場所です。夜にしかやってないんで、時間に気を付けてください」

「・・・　貴方はそんな店で働いているの？」

「すいません・・・　突っ込まないでやってください」

茅ヶ崎が泣きながら謝れば、雪ノ下もそれ以上追求するのを止め、大人しく住所のかかれた紙を受け取った。

そうすれば今度は由比ヶ浜結衣がこちらへと話しかけてくる。てかこいつらテスト勉強する気あんのか？

「でもやっぱり意外だよねー、せやっちに友達いたのって。しかも結構どっちも高スペックだし」

おい、だから俺をあいつと同格に表すな。俺だって人並みにはコミュニケーション能力もってんだよ。

人以下のあいつと同価値扱いされたら生きる気力無くすぞ。

「・・・　別に高スペックでも欠落商品なんてのは結構あるぞ。こいつらがその例だ」

「あれ、今誰かが俺をけなした気が・・・」

「高津、犯人目の前にいるから・・・」

俺の皮肉に気づかない高津と、気付いて否定しない茅ヶ崎。
確かにどちらも顔は並み以上ぐらいはあるが、指してそれほど特質すべき顔でもないだろう。
というかどちらかと言えば由比ヶ浜、お前の対面に座るそいつの方がヤバイと思うのだがな。
「でも由比ヶ浜さんの言うとおり、やっぱり憧れちゃうよね。僕もそんな顔がよかったな～」
「・・・ あぁ、俺も男でそんな顔には生まれたくはなかったと思う」
男か女か分からない（どちらかと言うと女）中性的な顔をした男、戸塚彩加の言葉に困惑しながら同意する。
この男女には奉仕部の部室内で何度か会ったことはあるが、やはり一向に慣れない。
腐った魚に至っては意味もわからず戸塚ルートなるものに踏み込んでいるらしい。
社会不適合者から変態に成り下がるつもりなのだろうか。すこぶるどうでもいいが。
「いやー誉めてもなにも出ませんよ先輩方。ところで小腹空きません？ケーキ奢りますよ」
「え、いいの!!ヤッター♪食べる食べる!!」
「・・・ 単純なやつらだな、おい」

誉められて上機嫌な高津と、ケーキに喜んでいる由比ヶ浜を見て思わず言葉がこぼれる。

こいつら将来悪徳金融に騙されるんじゃないか考察しているとまたしても雪ノ下がこちらに話しかけてきた。

「ところで聞きそびれてたのだけれど、あなたたちは何でここに？勉強会…　というには少し準備も少ないようだし」

「…　今更な疑問だなそれ。まぁあれだ、こいつのデート用の服の買い出しで、これはその延長的なやつだ」

その問いにそのまま今日の予定のことについて話せば、返ってきたのは雪ノ下の意外そうな顔。

「何でしょうね…　年下に先を越されるのは多少なりとも嫌な気分なのね。平塚先生の気持ちも少し分かったわ」

「…　やめとけ。その気分味わったら平塚女史のこと二度と馬鹿に出来なくなるぞ」

「ふ、二人とも平塚先生に失礼だよ」

どうやら名状し難い敗北感に襲われたらしい雪ノ下と平塚女史について話していれば、戸塚彩加がストップをかけてきた。

確かにこれ以上喋っていたらどこからともなく現れそうだしな、あの人。

「それに二人だったらすぐにそういう人見つかるんじゃないかな。二人とも美男美女だし」
「別に私は欲求的意味で話していたわけではないのだけれど」
「・・・ 横に同じ。というか雪ノ下はともかく俺にはそんな浮いた話一つもないがな」
俺が話しかけると怯えられるし、変な誤解生まれるし・・・ はぁ。
するとさっきから話を聞いていたらしい茅ヶ崎がフォローを挟んでくる。
「そういえば戸塚さんも奉仕部の部員何ですか?だとすれば奉仕部ってかなり華やかですね」
「あの・・・ 僕男の子だから、ね」
「えっ?まさか・・・」
「もうっ!だから僕は男なんだって!」
現実を理解しきれていない茅ヶ崎に戸塚彩加がもう一度言い返すが、その姿には男らしい力強さは一欠片もなかった。逆に女らしくはあるのだが・・・
「もう休憩はいいでしょう。勉強をしましょう勉強を。由比ヶ浜さんたちもケーキを買って戻ってきたわけだし」
そんな不毛な会話を続けていれば雪ノ下が話の打ち止めを謀ってきた。
丁度話題の方向がカオスになりかけになっていたため、いいタイミングである。

すると由比ヶ浜が目を点にして雪ノ下を見つめた。
「あれ？ゆきのん勉強すんの？」
「由比ヶ浜さん・・・　私たちは元々勉強会をしにここに来たのでしょう？」
「ん？あれ？・・・　あっそうだったね！うん、そうだった！」
忘れてたのかよ。ていうかお前が考案したことなんだろうが。
もはや目的が変わっていた先輩方の勉強会に心のなかで突っ込みながら、俺は鞄を肩に掛けて帰り支度を済ました。
「・・・　じゃあ俺は帰る」
時計を見ればすでに短針が七を通りすぎていたのでそろそろ家に帰らなければならない。
連絡はしてあるが、いつも帰りが遅すぎると姉貴が赤飯炊いてきやがるので、なるべく早く戻るように心掛けているのだ。
すると俺が帰ることを悟り、茅ヶ崎と高津も席を立った。
「じゃあ俺たちも帰るんで、先輩たち頑張ってくださいね」
「瀬谷のこと、これからよろしくお願いします」
茅ヶ崎が何故か俺のオカンのごとく何か言っているのが聞こえたが、持ち前のスキルでスルーする。

とりあえず帰路につくのが現在の俺の優先事項なのだ。
「じゃあねー♪…………せやっちの友達ってなんか変だったね」
「個性的、と言い直した方が良いと思うのだけれど」
「一年生はやっぱり活力溢れてるよね」
この場合一番おかしいのは、女子の会話に簡単に混ざっている戸塚なのだと、この時は誰も気がつかなかった。
――――――――――――――――
「…で処置の方法にこれって、お前なめてんのか」
「然るべき手段だと自負しているのだけれど」
翌日、テスト前にも関わらず奉仕部活動を遂行するため、やむを得ず部室へ集まった部員一同。(何故かそのなかに戸塚彩加の姿もあったが気にしないことにした)
そこで雪の下より提案された案がアニマルセラピーなるものだった。
確かに川崎弟からの情報で昔は優しく真面目だったなどというものがあったが、それが現在でも残っているかどうかなど確かめる余地などない。というかそんな感情があったら夜中にバイトなどしないだろうに。
そんな俺の推測を他所に、雪ノ下雪乃はすでに小町によって届けられている比企谷邸の首領、カマクラを愛でながら計画を建てていった。

「まず戸塚くんは職員室前に、由比ヶ浜さんは駐輪場に、瀬谷くんは裏門で川崎さんが来ないか見張っておいて。小町さんはそれぞれの連絡役をお願いできるかしら。比企谷くんは…　終わったらこの段ボールを片付けておいてくれるかしら」

「おい、俺だけなんか役割おかしくぞ。差別か」

「被害妄想もほどほどにしてしてくれないかしら？本来なら仕事があるだけマシなのよ」

雪ノ下の計画に文句を垂れる腐った魚と雪ノ下雪乃のじゃれあいを呆れのため息で評価しつつ、俺は持ち場へと向かった。

横目では同じく配置に向かう由比ヶ浜結衣と戸塚彩加の姿も写る。

（…　裏門っつっても誰も来ないだろうが）

総武高校の裏門と言ったら、人目がつかず色々と噂のたつ悪い意味で有名な場所である。

ちなみに裏門より帰る生徒はほとんど…　というか一人もいない。基本的に避難用に作られたもので、そこから出ても四方に見えるのは千葉特有の空き地のみ。

この頃では告白のスポットとして使われてもいるらしい。

（…　そんな現場に遭遇したら最悪だな）

そんなことを思いつつ目的地、裏門へと到着。

危惧していた想像とは反し人気は全く持ってなかった。
「デュフフ…　我が大いなる称号、剣豪将軍の名より今現れよ古代の魔刀デスミョルニール!!そして喰らえ!!我が絶対なる最終奥義にして新必殺技!!トライデント・バルガゲイズ!!」
「……」
しかし誠に遺憾ながら聞き覚えのある無駄にいい発声が近くより聞こえ、そのまま来た方向へと回れ右をして退散する準備をとる。
だが不覚にも足下の木の枝を踏みつけてしまい、音が出てしまった。
「ヒィッ!?な、何奴!!…　っと何だ瀬谷殿ではないか」
「…　喋るな話すな俺を認識するな俺を見てほっとするな近くにあいつがいないか探すな俺が知り合いだと思われる行為を一切するな以上だ俺は帰る」
「まぁ待て。お互い知らぬ仲ではなかろう、そうだ。新しくプロットが完成したのだ、見させてやらんこともないぞ、デュフフフ…」
ちっ…　不覚だ。一々勘に触る喋り方をするあの腐った魚以上に知り合いとも思いたくない男、材…　中二病患者に見つかってしまった。
この男とは何度か奉仕部で会ったことがある。
その時はお互い全く無関心を通していたが、一度こいつから小説のプロットというや

つを配られ、読む気になれず高津に渡せば、感想とダメ出しがかかれた紙を翌日高津より渡され、それをこいつに見せたことによりこうして態度が変わっていった。
今では校舎内で見かけられただけで、このうっとうしい喋り方で話しかけられるほどだ。
ううか、普通にウザい。早くこの場より立ち去ろう。
心の中で即決し、俺は校舎へと一目散へ逃げた。後ろでは中二病患者が何やら騒いでいるが、あの巨体では追い付けはしないだろう。
俺はそう願いながら走るのを止めなかった。
ブルルッ
「…　あン？」
校舎へつくとポケットの携帯が震えているのに気づく。
見れば着信のようで、相手は由比ヶ浜結衣だ。作戦の開始まではまだ時間があるので緊急の報告であろうか？
とりあえず俺は携帯を開き、電話に応じた。
「…　なんかようか？」
『うわっ、ノーモーションで喋んないでよせやっち。驚いたじゃん』
「…　喧嘩売ってンのか、要件があるのか、どっちだ…」

『いや、喧嘩なんか売ってないし!?何でそうなんの!?怖いよ、特に声色!!』
「・・・　いいから言うべきことだけ話せ、じゃなきゃ切るぞ」
話が全く前に進まないのでこちらより要件を切り渡す。というか怖い言うな。
『あっ、ごめんごめん。実はさ・・・　川崎さん、猫アレルギーみたいなんだ』
この数秒後、俺が盛大なため息をついたことは、俺しか知らない。

すなわち茅ヶ崎千賀は先輩思いである

「と、いうわけで作戦変更よ」
「…　なんでそんな堂々としてるんだよ」
雪ノ下雪乃のアニマルセラピー作戦が開始する前に破綻したため、落胆する暇をもなく俺たちは新しい作戦についての会議を始めた。
しかし失敗した当の本人がこれでは落ち込む気にもならないが。
「…　ラブレター大作戦とかな」
「今とても古めかしいドラマのタイトルが聞こえたのだけれど…」
「つうかお前昭和好きだな」
「…　逆にお前らがこの名前知ってることに驚きだ」
ひねくれコンピの趣味が少し暴露されたところで作戦の概要を話す。
この作戦は簡単に言うならただ手紙を渡すだけだ。だが普通に渡すのではなく、それこそラブレターのように下駄箱に入れ込んでインパクトを強くする算段だ。
「せやっちって、もしかしてかなりロマンチスト？」
「というより、似合わないわね」

「…　うるせぇよ」

失礼なことをいってくる女子どもに一言いいながら、ノートで便箋を作る。適当な作りだが、そのまま素で渡すよりも雰囲気はあって良い。

そうして完成させると、俺はそれを女子達の方へ渡す。

だがしかし、返ってきたのは雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣の怪訝な目だった。

「なぜその便箋をこちらへ渡してくるのかしら?」

「…　手紙の文章書いてもらうために決まってンだろうが」

「いや、こういうのって男子が書くものでしょ」

川崎へと出す手紙の執筆を拒む女子たち。

しかし、こいつら何も分かっていない。

「…　お前らは俺たちが手紙なんて書けると思っているのか?答えはノーだ。特にこいつなんかが書けば通報される恐れがあるぞ」

「おい、流れで俺を犯罪者予備軍扱いすんな。手紙ぐらい書けるっつーの、文系なめんな」

「いえ、一理あるわ。奉仕部の歴史に汚名をつけたくはないし、やはり私たちで書いた方がいいのかしら?」

「捕まることは決定事項なのかよ…」

俺と雪ノ下は犯罪者予備軍（ストーカー）の小言を無視しながら考え込む。
別に俺が書いてもいいのだが、如何せん名前しか知らん相手に対しそこまで感情的な文が書けるとも思わない。
やはり女子組に任せることにしようと思った矢先、ふと一人の男子が目に入った。
「あの・・・　僕もいるんだけど」
「「「あっ」」」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
執筆者が戸塚彩加へと決まり、俺たちはすぐさま作戦を実行した。
その間、戸塚彩加より、新たに平塚先生によって説得してもらうという作戦も提案されたのでこれも同時に実行に移す。
そうして作戦が順調に決まっていけば、先ほど腐った魚がメールで呼んだ平塚女史が昇降口へ現れた。（ちなみに手紙の方はもう戸塚彩加が文章を書き終えスタンバイは出来ている）
「やぁ、諸君。状況は理解している。詳しい話を聞こう」
そうすると、腐った魚より平塚女史へ現状の報告が為されていく。
「ふむ、確かにわが校の生徒が深夜に働いているとすると由々しき事態だ。今回に限っては緊急を要し、私が解決しよう」

そう言い、不敵な笑みを浮かべる平塚女史。
なんとも便り甲斐があるもの言いをしてくれるものの、その姿はどうみても噛ませ犬臭かった。
見れば雪ノ下や腐った魚も同じように感じたらしい、若干心配している表情をしている。残り二人はそれを感じなかったようだが・・・
そんな心配をしている暇もなく川崎沙希が昇降口へ現れた・・・らしい。
「・・・あのポニーテールの女か？」
「あれ？せやっちって川崎さんのこと知らないの？」
知らねぇよ、何で知ってること前提で話進められてンだよ、つうか雪ノ下は何で川崎のこと知ってんだよ。
そんな俺の心の叫びもいう暇もなく、川崎沙希と平塚女史が遂に接触した。
話始めでは平塚女史が普段見せない大人の余裕を見せて川崎沙希をリードしている。
実はその男らしさが結婚の壁になっていることは、この際黙っておく。言ってもあとが怖いだけだ。
「なんかこう見ると、平塚先生ってカッコいいよね～」
「それじゃあ普段の平塚先生がカッコ悪いみたいな言い方になってるぞ、由比ヶ浜」
「まぁカッコいいと例えるには少し語弊があるわね」

「…　アラサー独身の時点で格好も何もねぇだろ」
と、無駄話をしていれば平塚女史が川崎沙希へ教師の殺し文句を言ってきた。川崎も思うところがあるのだろうか顔をしかめる。
流石は現職教師。これは手紙の方は必要ないかと思い始めれば…
「ていうか、先生に親の気持ちとか分かんないでしょ。独身だし」
「グハッ!!」
川崎沙希から発せられた禁句により平塚女史はそのまま膝をついてしまった。っておい。
「…　あの教師はいったい何をしたかったんだ」
結婚の話なんて今は関係ないのだからスルーすればよかったものを…
変なところでメンタルの弱い教師に呆れのため息が出てきそうになるが、その前に廊下真ん中で邪魔臭く膝をついているあれの処理のため、俺の背中で同じように呆れ…というか同情の意を表情に出している腐った魚に視線を与える。
「な、なんだよ」
「…　察しろ。早く行け」
「察する前に言葉に出すなよ…　はぁ。」
気が重そうに平塚女史へと近づく腐った魚。

俺たちは引き続き川崎沙希の監視を行う。川崎の方も何事もなかったかのように膝まずいた平塚女史を放っておき、自分の下駄箱へと向かっていっている。

そして…

「あっ、手紙に気づいたよ」

「便箋を開けたわね…」

「よ、読み始めた… !!」

「… その実況に何か意味はあるのか?」

何故だか興味津々に川崎の動向を見守る女子コンビ＋戸塚彩加には、作戦の成功の有無以外にも何か関心を寄せているように見える。

そうしていると読み終わったのか、川崎は手紙を便箋に戻すと丁寧に折り畳んで…

「あっ、破った!!」

「ゴミ箱に捨てたわね…」

「始めて書いた恋文なのに…」

「……」

手紙を破られ落ち込んでいる戸塚を尻目に川崎の動向を目で追う。あの感じもしや…

「… あいついたずらだと思ってんな」

「え？どういうこと？」
俺の呟きに敏感に察知し、小首を傾げる由比ヶ浜。
まぁリア充ライフを満喫してきたこいつには分からんことだろうな…
「…　まぁ推論でしかねぇが、あいつ前にも同じようにラブレター貰ったことがあるんだろ。それでそれはいたずらで、それ以降はこういった手紙は信じないようにしてんだろ。ちなみにソースは…」
「比企谷くん、ね」
俺の言葉を遮り答えを言うのは雪ノ下雪乃。その姿に失敗して落胆した雰囲気もなく、ただ現状を正しく認知するように、とても冷静であった。
「とにもかくにも、また失敗に終わってしまったからには新しく作戦を練り直す必要があるわね。ところで平塚先生たちはどうなったのかしら？」
「…　百聞は一見にしかず」
そう言い親指でそちらを示すと、そこにはゆっくりと腰をあげ何処へと消えていく平塚女史の姿と、それを儚げに見送る腐った魚の姿があった。
泣きじゃくりながら歩く平塚女史のその後ろ姿はどうみても…
「…　カッコよくはねぇな」
「アハハ……」

由比ヶ浜結衣の乾いた笑いのみが、俺たちの周りを包んでいった。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「というわけで、新しい作戦を考えましょう」

翌日。

俺と戸塚彩加の作戦が失敗に終わった昨日、結局奉仕部面々は解散となった。

本来ならあのあと、腐った魚が調べた千葉に二つしかないエンジェルと名のつく店の一つへ行く予定だったが、茅ヶ崎の情報もありそれは後回しにされた。（メイドカフェに行きたくなかったのもあったが、それは黙っておこう）

そして本日。

俺たちは新たな川崎沙希更正案についての話し合いを行っていた。つうか…

「…　なんで葉山隼人がいるんだよ」

「ん？いや、結衣に呼ばれてね」

現在、ミーティングに使われている場所は奉仕部部室内。中には昨日の面々合わせ、よく部室に足を運んできている中二野郎と部室へは数えるほどしか来たことがないのに何故かいる、葉山隼人が揃っていた。

「私が呼んだんだよ。隼人くんに手伝ってもらうことがあるんだ」

「手伝いって、何か案が思い付いたのか？」

自信ありげに説明し出す由比ヶ浜に葉山をチラチラ見ながら疑問をもつ腐った魚。

ちなみに中二野郎や雪ノ下雪乃も同じように葉山隼人へ視線を送っている。こんな味方のいない状況をよく耐えられるものだ。

感心するものだ、嫌いだが。

「や、あたし考えたんだけどさ・・・」

その後始まった由比ヶ浜結衣による論理付けられた論説は、由比ヶ浜にしては珍しく筋が通っていて、それでいて由比ヶ浜らしく少女漫画チックなものであった。

簡単に言えば「恋で女の子は変わっちゃうのっ!!作戦」ということだ・・・ 我ながら気持ち悪いな。

そんななか恋される役として由比ヶ浜に抜擢されたのが葉山隼人だったということだ。まぁ腹はたつが適役ではある。

つうかもうこの事案自体俺は関心をなくしていた。人の恋路に興味はないし、それが仕組まれたものであるなら尚更だ。

だから一通り話を聞いた葉山隼人が言った次の一言は俺にとって焦燥を感じさせるものだった。

「でもほかにも女子に好かれそうなやついるでしょ。この中でも・・・ 瀬谷とか俺よりいいんじゃないか?」

「…　あぁ？」

いきなりの葉山の提案に思わず素の睨みがかかる。しかし葉山隼人はその睨みに臆することもなく、逆に極上の笑顔をこちらへ見せてくる。（見続けていると見ててとてもイライラしてくる）

「…　由比ヶ浜がお前を適材と感じたんだろ。だったら大人しく従っておけよ、友達なんだろ？」

「いや、まぁそうだけど…」

友達を助けたい。友達の願いは聞き入れたい。

この前の葉山隼人の依頼より感じた、こいつの特徴。俺や腐った魚にとってはふざけた信条だ。

だがそんなことを邪気もなく言えるのはきっとこいつが今までの人生のなかで裏切られたという行為を一度も味わったことがないからだろう。

だから俺はこいつが嫌いだ。

傷つけられたやつの気持ちを、こいつはきっと理解できないから。

「せやっちはだめだよ。顔怖いし…　それに歯の浮くようなこと言えないでしょ」

「…　言えるわけねぇだろが、こいつと一緒にすんな」

「いや、それじゃあ俺がよく歯の浮くような台詞を言ってるように聞こえるんだが…」

「…　違うのか？」
「違うよ!!」
追記するとこの話し合いの間、腐った魚と中二野郎はずっと葉山隼人を睨んでいた。
かくして、由比ヶ浜結衣発案による「ジゴロ葉山のっ、ラブコメきゅんきゅん胸きゅん作戦！」（命名、腐った魚）は幕を開けた。
概要に関しては葉山隼人のもてる力すべてを振り絞り川崎沙希を説得する、ということだけ。ここまできて他力本願というのも後味が悪いが、もはや手段は選んでられない。使えるものはリア充でも使って見せるのが奉仕部である。
しかし結果は…
「……　あ、そういうのいらないんで」
「…　ふられてんじゃねぇか」
無駄に爽やかで無駄に隔たりがなく無駄にイケメンなあの葉山隼人からの言葉を足蹴にした川崎沙希に、一種の英雄観を思いつつ、この作戦も結局失敗に終わった。
哀愁漂う背中を見せる葉山隼人に戸塚彩加と由比ヶ浜結衣は残念そうな顔をし、雪ノ下雪乃はこめかみに指を当てて呆れたように目を閉じている。そして残り二人はというと…
「…　くっくく」

「プッ・・・プププ」
「・・・ はぁ」
何が面白いのやら楽しいのやら、腹を抱えて必死に笑いをこらえていた。
こういう最底辺の人間たちにとっては他人の不幸は蜜の味なのだろう。悪趣味極まりない。
「・・・ ん?」
もはや救いようのないこいつらを見て、またため息が出そうになると、俺の視界に知人の姿が写った。茅ヶ崎だ。
「・・・ あいつ、なにやってんだ?」
「どうやら、川崎さんと話をしているようね」
同じく存在に気づいたのだろう。雪ノ下雪乃も茅ヶ崎の様子を監視する。見ていると葉山との会話以上にはコミュニケーションを取れていた。
すると会話が終わったのだろう。川崎沙希は帰っていった。
「あっ、瀬谷。奇遇だね。自転車通学だったっけ?」
「・・・ あぁ、そうだが。つうかさっき・・・」
「さっきは川崎さんと何を話していたのかしら?」
茅ヶ崎がこちらに気づき話をかけてくる。そして隣にいる雪の下はこれを好機と

茅ヶ崎へ質問をかけていった。
　つうか俺の言葉を切るな。一応俺の知人だ。
「えっと今日のシフトが同じだったので話してただけですけど…　何かあったんですか？」
「そう…　これで黒ね」
「…　茅ヶ崎と川崎のバイト先は同じっつーことか」
　思いもかけずてにいれた茅ヶ崎のこの情報は、今までのどの作戦よりも利を得ることができた。
　再度追記すると、この間中腐った魚と中二野郎はずっと葉山隼人を笑っていた。
　とりあえず腹が立ったので蹴っておいた。まる。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「…　なんでてめぇと一緒に行動をしにゃあならねぇんだ、苦行かよ」
「本人目の前にしてそういうこと声に出すんじゃねぇよ。終いには泣くぞ、俺が」
　現在夜の七時。場所はよく撮影などで使われる千葉名所のあそこ。
　茅ヶ崎の情報もあり俺たちはあのあと急遽解散となり、またここへ再集合という形になった。
「それにしてもお前黒スーツって…　なんでよりにもよってそれなんだよ。宇宙人たち

とでも対話しに行くの？地味に似合ってるし」
「…　姉貴に話したらこれしかなかった。着たくて着てるんじゃねぇよ。それにしてもお前はなに着てもその腐った目のせいで台無しになるな、ある意味才能だ」
「なにその才能、超要らねぇ。つうか俺が服に似合わないんじゃなく、服が俺に似合わないんだ。それに、真のボッチは服にさえも関心を抱かれないんだよ」
「…　果てしなく意味のない責任転嫁だな」
そんなことを話しているうちに他のメンバーも続々と集まってきた。
全員雪ノ下雪乃に言われた通り、大人らしい服装をチョイスしたらしい。（一人大幅にずれた思考のやつもいたが）
そして最後に現れたのは雪ノ下雪乃。
「ごめんなさい、遅れたかしら？」
「…　いや、時間通りだ」
かくして女大生風女子高生（由比ヶ浜と戸塚）、作務衣のオッサン（中二野郎）、議員の令嬢（雪ノ下雪乃）、ジャケットを着た腐った魚に黒スーツを着た不機嫌男と、どこぞの雑技団でも見ない、摩訶不思議なメンバーが揃った。
「…　で、これからどうすんだ？」
「その前にちょっと確認したいのだけれど…」

そう言うと雪ノ下はこの場の全員の姿を流し見る。そして中二野郎から順に指を指し…

「不合格」

「ぬぅ？」

「不合格」

「えっ？」

「不合格」

「へっ？」

「一応合格」

「…　あぁ？」

「不適格」

「おい…」

何故か合否判定を下された。

ちなみに不適格判定されたのは腐った魚だ。社会不適合者ではあるから間違いではないが。

「あなたたち、ちゃんと大人しめな格好でって言ったでしょう？」

「大人っぽい、じゃなくて？」

「…　ただの聞き間違いかよ」
　誰が間違えたかは知らんがはた迷惑な…
　ということは戸塚彩加と中二野郎、由比ヶ浜結衣は今回は不参加でやるのか…　あまりやるせないな。
「…　後日に回した方がいいんじゃねぇか？」
「いえ、二度手間は避けたいし…　それに茅ヶ崎くんと川崎さんのシフトは今日を逃したら結構先になるみたいなのよ」
「…　内部協力者はいた方がいい、と」
　理にはかなっている。
　しかしそのためにボッチの俺たち三人だけってのはなんとも便りがない。せめて由比ヶ浜か戸塚彩加どちらだけでもいたらよかったが…
「由比ヶ浜さんだけならうちで着替えた方がいいかもしれないわ」
「えっ!?ゆきのんの家行けるの!?行く行く！」
「……」
　思いが届いたのかそんなわけないが、由比ヶ浜が雪ノ下の家へドレスコードへ行くらしい。これで人員は不足なし。とりあえずひと安心というところか。
　そしてあとは川崎沙希の抱える事情次第で俺たちは今回の以来に対する奉仕内容を

具体化させる、と。

「・・・　はぁ」

なにやら深く考え込んでしまい自然にため息が出てくる。

俺も奉仕部という場所に毒されてきたということか？あまりに不本意だ。

そんな俺の気持ちも知らず、女子たちは雪ノ下の家へ、俺たち男共は何故か腹ごなしにラーメン屋へと行くことになった。

いや、俺は行く気無いんだが・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ラーメンを食い終えると中二と戸塚彩加は帰っていった。そして俺ともう一人はそのままホテルロイヤルオークラへ。

「で、でかいな・・・」

ホテルの前まで行くとたじろぐように腐った魚が感嘆の声をあげる。その言葉通り確かに俺たちの前にこれでもかというほど存在感を出しているホテルは高級感が溢れでていて本当に無断で入っていいのか不安になるが、こちらにはいざというときのブルジョワ淑女（雪ノ下雪乃）がいるのだから問題はない。

俺は呆けている隣の爪先を踏んで雪ノ下たちとの待ち合わせ場所であるエレベーターホールへ向かった。

「おまえ…　急に爪先踏むんじゃねぇよ。声あげそうになったじゃねぇか」
「…　高級ホテルに威圧されてるお前を現実に引き戻してやったんだろが。感謝こそされども文句なんか言われる筋合いはねぇぞ」
「いや、やり方ってもんがあるだろ…」
　グチグチ垂れる腐った魚の文句を適当に流していると、不意に電話がなる。腐った魚からだ。
　電話をとると、周囲を見渡す腐った魚。
　なんだ？ついに周りの目を気にして更正する気になったか？
「お、お待たせ」
「……　誰だ？」
　知らん綺麗な女より声をかけられた。もしやこれが世に言う客引きとやらか？とりあえず目線を合わせないでおこう。
「なんかピアノの発表会みたいになってるんだけど…」
「（…）由比ヶ浜かよ」
　言葉レベルの低さに腐った魚と同じく由比ヶ浜結衣だということにようやく気づいた。近くにいても全くわからんな、おい。
「せめて結婚式くらいとは言えないかしら？さすがにこのレベルの服を発表会と言われ

ると複雑なのだけれど…」
「…　今度は雪ノ下か」
由比ヶ浜が来た方よりまた新たに現れた女性、雪ノ下雪乃である。
「これで全員揃ったか」
「ええ、では行きましょうか」
そう言い、雪ノ下はエレベーターのボタンを押す。
エレベーターは時間をかからずに開き、俺たちは最上階へ向かった。
最上階につくとまたしても腐った魚が感嘆の声をあげる。
「す、すげえな…」
その言葉のあとにまた帰りたいオーラを込めた視線をこちらへ向けてくるので扱いに困る。由比ヶ浜がすぐさま首を振ってくれたが、腰はへっぴり腰へと退化している。また喝でもいれようかと足を踏もうとすると…
「キョロキョロしないで」
「いっ！」
俺のかかとがやつの爪先をとらえる前に先に雪ノ下のピンヒールがやつのかかとを踏んでいた。
見事な早業。思わず雪ノ下の顔を見ると、何事もなかったかのように澄まし顔をして

いる。
「背筋を伸ばして胸を張りなさい。顎は引いて。二人も同じように」
「…　あぁ」
「う、うん」
　雪ノ下の言う通りに姿勢をただし、後ろをついていく。
　そのまま開け放たれたドアをくぐっていくとギャルソンがすぐ横に…　って
「…　茅ヶ崎か」
「雪ノ下さんから話は聞いてるから。どうぞこちらへ」
　小声で一言二言話し、すぐさま普段からは想像できないほどキリッとした顔にする茅ヶ崎。これが本来の仕事スタイルなのだろう。恐れ入るものだ。
　そして茅ヶ崎に案内され訪れたカウンターバーには、昨日今日と放課後に見続けた顔、川崎沙希がいた。
「川崎」
　腐った魚が椅子にかける前から声をかける。しかし川崎は心得ない顔をした。
「申し訳ございません。どちら様でしたでしょうか？」
「同じクラスなのに顔も覚えられていないなんて、さすが比企谷くんね」
「や、ほら、今日は服装も違うし、しょうがないんじゃないの」

「…　服装変わらなくとも分かんねぇときは分かんねぇよ」
「経験あるんだ…」
なにやら感心する由比ヶ浜を放置し雪ノ下へとアイコンタクトを送る。返事のサインはすぐに帰ってきた。
『ｇｏ』
「…　少し外すぞ」
椅子にかけず、そのままもと来た方向へ戻る。そこにいるのは先程俺たちを先導したギャルソン、茅ヶ崎だ。
「…　時間空いてるか？」
「一時間前から俺は上がりだよ。今は先輩の代わり、内緒だけどね。川崎さんは違うけど…」
「…　少し話を聞かせてくれ」
そのあと着替えた茅ヶ崎とともに、俺は店から出ていった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ピピピピピピッ
眠気眼の俺の横で聞き苦しくなるのはケータイのアラーム。
重い体を持ち上げ、その音の発生を止める。

現在の時刻午前４時。
奉仕部活動開始の時間だ。
「・・・ ダルい」
文句をキッチリ言いながら着替えを済まし、顔を洗い、ついでにメールを送る。相手は茅ヶ崎。
内容はただの天気の話。簡単に言えばモーニングコールならぬモーニングメールだ。
あいつがいなけりゃこれからのことも楽になる。遅れてもらっては困るのだ。
「・・・ とりあえず行くか」
自転車をだし、俺は目的地、ホテルロイヤルオークラへ向かった。
昨晩、俺は他のやつらよりも先に店を出て茅ヶ崎より前に聞かされたという川崎沙希の身の上話を聞いた。
これは雪ノ下と以前より決めてた計画だ。
きっと川崎は素直に俺たちに事情を話すことはないだろう。
そのため川崎に顔を知られてない可能性が一番高い俺が本命の茅ヶ崎より話を聞く役目を負い、他のやつらは川崎の監視をしていたのだ。
「・・・ なんともまどろっこしいやり方だな」
朝の千葉。人気はない。

ただでさえ早寝遅起きで有名な千葉だ。朝４時なんて健全な県民ならば夢のなかである。

あいつならこういうだろう、「日本一健康意識の高い県」と。

「…　っという間に到着だな」

いつのまにか俺の目の前には昨夜訪れたホテルロイヤルオークラがあった。

そしてちょうどそこから出てきたのは…

「…　川崎沙希」

淡い青色の髪にポニーテール。印象的な泣きぼくろ。間違いなく昨夜見た川崎沙希その人だった。

「あ…　誰あんた？」

「…　雪ノ下雪乃の使いっぱしりだよ」

いろんな意味で頭がこんがらがってる俺はもはや自己紹介すんのも面倒だったので、適当に、的確に自分のたち位置だけを話した。

「そ。で、その使いっぱしりが何か用？」

「…　あんたが勝手に帰らないよう見張りだよ」

「そんなもんいらないっての」

そう言い川崎沙希は歩きだし、俺もそれについて行く。

歩いてる途中はどちらとも喋りかけることはしない。お互い他人であり、知らないことの方が多い。

葉山隼人でもない限り、この空気を打ち破ることなどないだろう。

本当に腹立たしいやつだ、あいつは。

数十分後俺たちは目的地、通り沿いのワックについた。

中に入ると、そこにいたのは何故か気まずい雰囲気を醸し出している茅ヶ崎と腐った魚がいる。つかなんで一緒にいんだよ、他のやつらはどうした。

すると横の川崎沙希は茅ヶ崎の顔を見たとたんキッと眼光を鋭くし、睨み付ける。それを受けた茅ヶ崎もたまらず萎縮していった。蛇に睨まれた蛙とはまさにこういう状況のことか。

「チガ、まさかあんたが関わってたなんてね・・・」

「ごごごごめんなさい川崎さん・・・ 友達の頼みで、川崎さんのことしんぱいだったので」

川崎はその茅ヶ崎の様子を見て小さくため息をはく。

その後予定調和のごとくどんどんと人が集まってきた。そして全員が揃ったとき、雪ノ下が口を開く。

「川崎さん、事情は茅ヶ崎くんが教えてくれたわ。自分の学費のため、だそうね」

真実を突きとめられたからか、川崎は唇をかむ。

川崎弟も原因が自分の学費のせいということに気づき顔をうつ伏せる。
「ごめんなさい川崎さん…　でももうこれ以上深夜に働くなんて良くないと思います。弟さんに迷惑かけないでやってください」
「茅ヶ崎うるさい…　それでもバイトはやめられないから。大学には行くし、そのために親にも大志にも迷惑かけられないから」
「姉ちゃん…」
強情にバイトをやめない決心をいう川崎になにも言えるやつはいない。これは個人の家の話だ。俺たちが関わる話じゃない。
だがしかしこのまま放っておくわけにもいけない。深夜での学生のバイトは禁止されてるし、何より奉仕部の依頼はまだ終わっていない。
しかし俺にとってはそれ以上に許せないことがあった。
「…　迷惑かけられないってなんだよ」
いつも以上の低い声で話す。違和感を察したのはまず俺の古い付き合いがあるやつらから。
「お、おいお前…」
「…　今この瞬間まで、弟がどれだけ心配してたかお前には分かんのか？心配されるようなことしてるって自覚はあったのか？自分勝手に相手のこと理解したつもりでいる

んじゃねぇぞ。今一番の迷惑はお前がお前の家族に心配かけさせてるってことが分かってんのか、おい」

いつもではうち明かさない言葉が自然と口から出てくる。自分でも不思議だと思う。

普段の俺はこんなに喋らないのに。

「瀬谷くん。そこらへんで止めて」

ふと、雪ノ下の声により高ぶっていた感情が収まり始める。そして自分が何をいっていたかを自覚し始め、顔をうつ伏せた。

「…　悪い、外出てくる」

返事は待たずにすぐに外へ出ていった。

血が昇った頭に朝の風がちょうどよく当たり、すぐに冷静になっていく。

そしてまた、先程言ってしまったことに対し、後悔の感情が生まれてくる。

ーもう誰にも心配はかけられないー

ーもう誰にも迷惑をかけられないー

ーもう間違いたくなかったはずだー

日の出と共に吹いた風は俺の頬に当たり、水滴を乾かしてくれた。

変わらず瀬谷壮介の日常は進んでいく。

日は経ち、中間試験考査全日程を終えて休みをはさんだ答案返却当日。クラスはまさに一喜一憂の雰囲気に包まれていた。

首をうなだれ落ち込んでいるものもいれば、それを励ますものもいる。隣人の点数を褒めるものもいれば、謙遜し、首を横に振るものもいる。

担任の教師はそれらのリアクションを宥めつつ、高校初のテストを終えた俺たちに激励を与えてくれた。

本日の授業は答案返却と解説のみで、それが終われば部活生徒以外は帰宅である。そんな俺も部活に入っている身であるが・・・

「あれ？瀬谷部活ねぇの？」

「・・・　今日は休みだ」

まっすぐ帰宅しようと向かった先の昇降口で、何故か居た高津より質問を投げ掛けられた。つうかお前さっきまで茅ヶ崎と教室で話してただろうが、なんでここいんだよ。

先程言った通り、今日の奉仕部は無しだ。理由は簡単、二年生たちが今職場見学に行っているためだ。

顧問の平塚女史も同伴で行っているので、俺だけに奉仕部を任すのは致すところなく、テスト期間前に雪ノ下が決めていたのだ。
「ふーん、じゃあこれからカラオケ行こうぜ。クラスで打ち上げするんだってさ」
「…　断る。つうか俺呼ばれてねぇし、行く気もねぇ」
高津の誘いを断り、そのまま学校を出る。
現在正午前。日差しが強く差し込んでくる。
ふと気がつくと、隣にさも当たり前かのように高津が立っていた。
「…　お前、カラオケ行くんだろ」
「うーん、瀬谷は来ないし茅ヶ崎も行かないって言ってたから、参加してもつまんないかなーって」
「…　あっそ」
高津の言葉に特に感慨を持つこともなく、歩き始める。
高津は変わらず隣を歩く。
「なぁ、点数いくらだった？」
「…　そういう会話は嫌いなんだよ」
とりあえず聞いてくるだろうと思っていたため、ポケットへ突っ込んでいた教師より配られた点数表をそのまま渡す。

高津もその俺の行動に動じることもなく、書かれている数字を目で追っていっていた。
「数学高いな～、これ学年何位だよ。あ、でも現国と古典が低いな」
「…　国語力なんて日本語喋れてりゃそれでいいんだよ」
「平塚先生が聞いたら怒りそうだな」
高津の言葉に不意に目線を正面から剃らしてしまう。こんな台詞、あの暴力教師に聞かれれば、おそらくすぐに右ストレートが飛んでくるだろう。容易に想像できてしまうだけ怖いものもない。
「…　赤点無いだけマシなんだよ」
「目標低いな～。俺なんて今回ケイコちゃんが付きっきりで教えてくれたから答案解いてるときも幸せだったわ～♪」
「…　そうか。それはどうでもいいが、お前いつ埋葬されるんだ？」
通常運行の高津へ同じく通常通りの暴言を吐いて帰路へ着く。
そしてもうそろそろで高津と別れる三叉路に着くとき、不意に高津が尋ねてきた。
「なぁ、なんか嫌なことでもあったのか？」
「…　あン？」
唐突の、しかも意図が分からないその質問のせいか、俺は歩くのを止めた。高津は俺

より数歩進んだ先で止まり、そして振り替えってまた聞いてきた。
「いや、なんかいつもより暴言に切れがなかったから。それに今日全くため息ついてないだろ？」
「……」
言っていることは曖昧で適当。この会話のみで俺の心を読んだわけでもなく、ただ高津の直感がそう感じただけなのだろう。
しかしその指摘は見事に的を指しており、俺は口を閉ざした。
だがそれも一瞬だけ。
「… 何故ため息の数が俺の機嫌の度合いを測る物差しになっているのかは知らんが、別に変わりねぇよ。一つ思い当たる節をあげるなら、お前のノロケ話がうざいぐらいだ」
「え～そうかな～。そんなに俺の話すケイコちゃんが可愛かったってことか～♪」
「… お前の耳が機能を果たしてないことはどうでもいいが、お前の帰り道は向こうだ。さっさと帰って永眠しろ」
「あ、本当だ。じゃ、瀬谷また今度な～、悩みあったら友達として聞いてやるからな～」
そう言い残し、手を振りながら去っていく高津。
去り際に置いていった『友達』という言葉に、ふと頬の筋肉が緩まる。

「…　あいつは本当にそう思ってんだろうな」
だが。しかし。そうであっても。
「…　俺は、お前を信用できないんだよ」
高津に非はなく、その他の誰にも非はなく、ただ理由もなく。
俺はそう感じていた。
ーーーーーーーーーーーーー
中間考査より数えるほどの月日が経った本日。
現在、放課後の奉仕部部室内では不穏な空気が入りみだっていた。例えるならあの腐った魚が空気になったような感じ…　いや、あいつは元々空気のような存在か。
その空気清浄機ならぬ、空気沈殿機の役割を果たしているのが、他でもない雪ノ下雪乃であった。
その手に持っているのはいつもの文庫本ではなく、由比ヶ浜結衣辺りが好みそうなファッション雑誌。時折携帯を開いてはため息をはく始末。
明らかに普段の様子とは異なるものである。
思わずこちらもため息を吐いてしまうほどだ。
「…　はぁ」
現在部室にはこの空気をいつも緩和してくれる存在、由比ヶ浜結衣がいないため普段

より増した重い空気に変化している。おそらくこれ以上重くなれば質量のある残像が出来るかもしれない、試す気はないが。

しかしまぁ、何が問題かは明確だ。

先程も言った通り、由比ヶ浜が来ないのだ。中間試験の答案返却当日から。もっと詳しく言えば、二年生たちが職場見学に行ってから。もっと詳しく言えば、あの腐った魚といっしょに職場見学に行ってから。

これにより自ずと原因となる人物も分かるだろう。

そんなことを考えていると、奉仕部のドアが開く音がし、無意識に俺と雪ノ下はそちらの方へ顔を向けた。そこにいたのは…

「… はぁ」

「おい、人の顔見た瞬間にため息はくのやめろ。あと雪ノ下もあからさまにがっかりした表情をするな、隣の席になった女子の顔を思い出すだろが」

入ってきたのは腐った魚だった。まぁ最近来ていないのに今日だけ来るというのもおかしいとも思うが。

「… 横に腐った魚のような男がいるんだからがっかりするのも仕方ねぇだろ」

「ンだよそれ、そんなの俺の隣を引いちゃった自分のくじ運を嘆けっつの」

「自分の隣が最悪ということは認めてしまうのね…」

「最悪とは言ってねぇよ、それお前の主観もはいってんだろ」
「ごめんなさい、無意識って怖いわね」
「…　謝る必要はねぇよ。俺もこいつなんかの隣は最悪だ」
「おい、せっかくの雪ノ下のフォローを台無しにするな。そしてなんでまた俺が悪いみたいになってんだよ」
　そうため息をはきつつ愚痴るこいつ。まぁそんなことよりも気になることがあるのだが。
「…　由比ヶ浜は一緒じゃないのか？」
「えぇ私も由比ヶ浜さんかと思ってしまったから、うっかり本音を出してしまっただけよ」
「ふーん、そういうことか…　って本音だったことの方がもっと失礼だっつの」
　意図に気づいたこいつはそれでも事をあまり重要視していないようで、相変わらずの阿呆面をさらすのみだった。
「一昨日も、昨日も家の用事…」
「…　明らかに普通じゃないな」
　立て続けの一身上の都合、テンプレートなサボる理由。何かあったのは確実だろう。
　要因はおそらく、いやほぼ確実だが目の前に立っているこいつだろう。

「・・・ お前、由比ヶ浜と何かあっただろう」
「いや、何も」
　即答だった。だがそれではおかしい。
「なにもなかったら由比ヶ浜さんは来なくなったりしないと思うのだけれど。喧嘩でもしたの？」
「いや、してない、と思うが」
　間があった。確実に何かあったな。
「いや、というか喧嘩ってのは仲がいいもの同士が何かをめぐってするもんだろ。俺たちはそんな仲良くないし、何かをめぐってもいない。だからあれは・・・」
「いさかい、とか？」
「近いけどちょっと違うか。当たらずとも遠からずってところだな」
「じゃあ戦争？」
「当たってないし遠くなったな」
「なら、殲滅戦」
「話聞いてた？遠くなったよ」
「・・・ 音楽性の違い」
「音楽の話題無かったよな、一番遠いし」

つかなんでこんなクイズみたいな形式になってんだよ。
こいつの性格だったら誰とでも仲を悪く出来るし、由比ヶ浜もその例外でもないだろうに。
「では…　すれ違い、というやつかしらね」
「あぁ、それだな」
「…　すれ違い？」
なんともボッチとは縁のない言葉なのに、よくも当てはまるものだ。
つうかお前も雪ノ下も、ましてや由比ヶ浜もはすれ違う前に同じ道を歩んでいないだろう。
我が道を突き進んで、時々誰かとの道と交差する点でトラウマを生む。この腐った魚の今まで辿ってきた道はこの連鎖で、同じ志を持つものなどいない。ましてや由比ヶ浜なんてのはあり得ない。だからすれ違いなんてのは、おかしい。
（…　いや、だとしたらこいつが変わったつうことか。それこそあり得ないが）
「そう、だったら仕方ないわね」
「…　まぁ、仲違いなんてお前に経験できただけでも奇跡だな」
「その言い方はさすがに失礼だろ…」
そしてそれ以降、雪ノ下は腐った魚に問いかけることはせず、こいつもそれっきりな

にも言わなくなった。
こいつらにとっての普通の距離感へと戻っていったのだ。これがいつもの光景、通常運転、普遍な日常。
しかし…
「はぁ…」
雪ノ下は小さくため息をはき、
トットットットッ
こいつは貧乏ゆすりを絶えずしている。
これはさすがにこいつらにとっての普通ではないだろう。
結局のところは、こいつらも人との繋がりと言うものに未練を持つ者なのだろう。
(… じゃあ俺はどうなんだろうな)
そんなことを悩む性分でもないがふと考える。だがそんな暇は結局俺には与えられなかった。
奉仕部のドアを開き、羽織っている白衣を翻した、どこぞの暴力教師の乱入によって

変わらずに雪ノ下雪乃は考慮する。

「…　で、あの暴力教師の言っていた勝負っつーのは一体何なんだ」

平塚女史が奉仕部へ乗り込んできて少し経った現在。

既に平塚女史は帰っていったが、その話していった内容の一部に疑問を生じたため、俺は二人へと質問した。

「あれ？お前勝負のこと知らなかったっけ」

「…　知らねぇよ、一体お前と雪ノ下の間で何が起きたんだよ。柏と松戸か、お前ら」

「いや、そこまで苛酷な関係じゃねえよ。つうか俺、総武線使ってるからその例えはよく分からねぇし」

「…　じゃあ千葉と埼玉の関係か？」

「あぁそれが近いな。勿論、千葉役は雪ノ下の方だろ？」

「あなたたちの会話が千葉過ぎて全くついていけないのだけど…」

雪ノ下が千葉内状を語る俺たちの会話を聞いて、理解不能なのか頭を押さえる。しかし柏と松戸は相変わらず大変みたいだ。柏なんて自衛隊の駐屯地があって騒音がひどく、それどころじゃないだろうに。（しかしなぜか問題にならない）

「…　で、結局お前らなんで勝負なんてすることになったんだよ」
「まぁ、色々とあったのよ…」
「今考えたらまんまと平塚先生に嵌められたような気がするな…」
　達観するように二人が遠い目をすると、事情を説明し始めた。
　簡単に言えばより多くの人助け（奉仕活動）をした方が、もう一方に何でも要求していいと勝負らしい。
　そして俺はこれを聞いたあと、雪ノ下雪乃の身に危機感を感じた。
「…　まだ遅くない、頭下げてでも勝負を辞退すべきだと思うが」
「なんで俺を犯罪者を見るような目で見てんだよ。違うよ、俺がそんな卑猥なことしか考えてると思うなよ」
「私も不本意ではあるけど…　心配ないわ、勝てばいいだけだもの」
「…　相変わらずすげえ自信だな」
　そんな雪ノ下の強気な発言に腐った魚の方を見てみると、こちらも相も変わらず死んだ魚の目をして憮然に本を読んでいた。
　…　まぁこの勝負、行う前から結果が見えてるな。
　この男の性格から考えられることを思い付き、一つため息をつく。
「そんなことより今は人員補充のことが重要よ」

話を変えるように雪ノ下がそう言うと、腐った魚が疑問を感じたのか本から顔をあげた。
「人員補充って言ってもどうすんだ？俺の方は当てなんてないぞ」
「…　誰も最初からお前に期待なんてしてねぇよ」
「ぐっ…」
腐った魚が目をそらすと、今度は顎に手を当て考え込んでいた雪ノ下が顔をあげた。
「私の方は入ってくれそうな人に心当たりがあるわ」
「誰それ？戸塚？戸塚か。戸塚だよな？」
「…　お前、どんだけあいつが好きなんだよ」
「いや違うよ？他に思い付かないだけだからな。なんなら戸塚のこと以外考えていないぐらいまである」
「…　結局そいつのことしか考えてねぇじゃねぇか」
腐った魚の中で何かが目覚めようとしていることが分かり、少し距離を取った。確かに中性的な顔立ちではあるが、そこまで行くとただの変態である。
そうしていると雪ノ下がため息をはいて呆れていた。
「違うわ、もっと簡単な方法があるでしょ。由比ヶ浜さんよ」
「は？いや、でもやめるんでそ？」

雪ノ下がそう言うと隣のこいつは想像もしていなかったのかポカンとした表情を浮かべた。

しかし俺は大分予想がついていた。平塚女史との会話から由比ヶ浜の話題が多かったし、何より人員補充の名目であったなら、既に俺がいるのだから。

「やめるのならもう一度入り直せばいいのよ。それにあなたもすれ違ったままなんて嫌でしょう」

「いや、別に。避けられたり遠ざかったりし慣れてるし、今更すれ違ったところで…」

「壊れた関係なら仕方ないかもしれないけど、あなたたちの関係はまだ繋がっているわ。それに、私はこの2ヶ月間の時間をそれなりに気に入っているのよ」

「「……」」

雪ノ下の突然の発言に俺と隣のこいつは口を開けて呆然としていた。

あの冷血にして冷徹の天上天下唯我独尊女、雪ノ下雪乃がこんなことを言うとは全く思っていなかったのだ。

「な、なに?二人して変な顔して」

「… おい、変な顔はこいつだけだ」

「ちょっ、なにお前自分だけ矛先から逃れようとしてんだよ。あと別に変な顔じゃねぇよ」

「えぇそうね、変な顔は比企谷くんだけだったわね」
「いやだから変な顔じゃねぇって」
「「(・・・) 現在進行形で変な顔よ(だ)」」
そういうと雪ノ下は歩き出していった。
それを見送れば俺も鞄を持ち奉仕部を出る。
最後に視界の隅で部室に残った人物を見ると、そいつは複雑な表情をしていた。
ーーーーーーーーーーーー
部室を出て昇降口に向かうと、携帯がないことに気づいた。
部室に忘れたかと思ったが、部室では携帯など使っていないため違うだろう。
だとすれば考えられるのは・・・
「・・・ 教室だな」
思い立ったらなんとやらで歩く先を教室へ変える。
時間はもうすぐ下校時間になる頃。夏に近づいているためか、日はまだ辛うじて残っている。
生徒は運動部以外残っていないだろうと思っていたため教室に向かった先で会った人物には俺も少し驚いた。
「あっ、や、やぁ瀬谷。まだ学校に残ってたんだ」

「…　お前も、なんでこの時間にまだいるんだよ。バイトはどうした？」
教室にいたのはテスト前の川崎沙希の依頼で世話になったクラスメイト、茅ヶ崎千賀だった。
「いや、実はあのバイト、クビになったんだ」
「…　そいつはまた唐突だな」
若干デジャヴのあるその言葉に、俺はまた驚いた。
「川崎さんが年齢偽って働いていたことに気付いてたのに報告しなかったからって…」
なるほど、言うなれば道連れでクビにされたということか。それはなんとまぁ、気の毒なことだ。
「でも悪い気はしてないよ。川崎さんも事情が事情だけに嘘ついても働かなくちゃいけないのは俺も分かるし」
「…　でもそれでクビになってりゃ世話ねぇけどな」
「うっ…　それもそうだね」
茅ヶ崎の言葉に核心を突けば苦笑いを返される。
まぁ茅ヶ崎自身がこの結果に満足しているのなら、俺はなにも言える立場ではないが。
「…　で、なんでお前はこんな時間に学校にいるんだ？」

「うぐっ、せっかく話剃らしたのに…」
話をたち戻り、俺は茅ヶ崎に当初の疑問を吹っ掛けた。
「じ、実はその… テストの点数があまり良くなくて、補習を…」
「… クラス唯一の赤点者ってお前のことだったのか」
「ハハハハ…」
乾いた笑いをこぼす茅ヶ崎に少し呆れを覚える。
バイトの先輩は自分の学費のために働いていたっていうのに、こいつは何をやっているのやら。
思わずため息をつくと茅ヶ崎もつられて頭を垂らした。
「… 川崎に勉強でも教えてもらったらどうだ?」
「いや、それは… 川崎先輩容赦ないだろうから御勘弁を」
俺の提案に苦笑いと否定の意を茅ヶ崎は返したが、後輩が赤点を取ったことに気づいた川崎が、期末テストでしっかり喝をいれることをこのときまだこいつは知らなかった。
その後机に入れっぱなしだった携帯を回収すると俺と茅ヶ崎はいっしょに昇降口へと向かった。
その途中思い出したかのように茅ヶ崎は口を開いた。

「そういや、瀬谷のあの男子の先輩、名前は…　なんだったっけ？」
「…　大体誰かわかったから本題を言え」
「いや、あの先輩にお礼したいなって。あの人が川崎さんにスカラシップをアドバイスしてくれたし」
　そういやあいつが川崎にアドバイスしてたのか。
　あのあと確かそのスカラシップとかいう予備校にある学費免除のシステムにより、川崎は金銭問題を解決し、あのバイトを辞めたのだったな。
　だとすれば今日聞いたあの雪ノ下と腐った魚の勝負は現在、腐った魚がリードしているということになるのか。
　憐れ雪ノ下、途中経過であれど腐った魚ごときに負けるとは。
「…　そのアドバイスが元凶でバイト辞めさせられたのに、人の良いことだな」
「ハハハ…　まぁ、川崎さんが救われたことだし、俺は別に構わないよ」
　そういう茅ヶ崎はやつれてはいるが確かに、今回の結果に満足しているようであった。
「…　確かに誰かが救われるなら、少しのとばっちりも受け入れられるのかもな」
「？どうしたんだ、瀬谷？」
　ふと口からでた言葉に茅ヶ崎が反応する。

だが俺はそれを気にせず、茅ヶ崎に質問した。
「・・・ なぁ茅ヶ崎。もしよかれと思って取った行動が、実はもっと悪い方向へ進ませてたら、お前ならその罪悪感に耐えきれるか？」
「瀬谷・・・ ？」
俺の問いに茅ヶ崎はさらに困惑している。
俺も気づいていた。こんなことをこいつに聞くのはお門違いだと。
だが、俺は感じてしまっていたのだ。今回のことで。
誰かが救われて、そして俺は救われなかったことに対する、嫉妬を。
気付けば既に昇降口へと辿り着いていた。
茅ヶ崎はバスで俺は自転車のため、ここで別れることとなる。
「・・・ 悪い、変なこと聞いたな。今の忘れろ」
それは丁度よく、このまま質問の意図をうやむやにして俺は帰ろうとすれば・・・
「よく分かんないけど、もしそれが自分のせいで悪くなったんなら、俺は誰かに助けを求めると思うよ。今回のことのように」
突如後ろより投げ掛けられた茅ヶ崎の言葉に足を止めた。
ーー助けを求めるーー
あの時、俺はそれをしたのだろうか、それを思い付けたのだろうか。

それを思い返すことはできない。思い出すことすらしたくない。
ただそれが出来ていたなら、俺はもっと幸せにーーー
「・・・ あっそ」
回していた思考を中断し、茅ヶ崎には素っ気ない言葉で返す。
過去を振り返ったところで今が変わるわけではない。だったら近い未来のためにやるべきことを為す方が得だろう。
俺はそう自分に言い聞かせ、昇降口から出ていった。
茅ヶ崎にも嫉妬してしまったこの情弱な心を必死に抑えるために。
ーーーーーーーーーーーー
そそくさと逃げるように駐輪場へと駆け込んだ俺は、まず世にも奇妙な光景を見かけた。思わずグラサンかけたおっさんが出てくるほど奇妙だった。
「・・・ あの腐った魚が女といっしょにいやがる」
思いがけず、思いもよらず、思いもつかない光景だった。
小学校の頃など通学路が同じだった女子よりストーカー扱いされて、クラスで吊し上げられたあいつがまさか女子といっしょに下校するとは・・・
俺は先ほどまでの葛藤を忘れ、共学と動揺のみが心を満たした。そして気付いたことは・・・

「…　あれ戸塚彩加だな」

遠目で勘違いしてしまったが、あの白髪は戸塚彩加だろう。

と、いうよりそれ以外誰も思い付かない。あの男がプライベートで女となか良くできるわけもないし、何よりしようとしていない。

要らんことで惑ってしまった自分が急に恥ずかしくなってしまい、盛大にため息を吐く。

「…　てかあいつ、本当に戸塚を勧誘するつもりかよ」

あの言葉がなぜか今になり信憑性を増してきた。いや、平塚女史が普段回せない気を回してきたのだ、空気ぐらい読むだろ。あいつ自身空気みたいなもんだし。

「…　もうどうでもいいな、帰ろ」

由比ヶ浜が部室に来ない理由も、茅ヶ崎がバイトを辞めさせられたことも、あいつがなぜ戸塚彩加といっしょに下校しているかということも、俺には全くどうでもいいことだ。

だから、深く考える必要がない。

「…　そういや今度東京わんにゃんショーやるな」

小町でも誘うかと予定をたてながら、俺は先ほどよりも軽い心持ちで帰路へついた。

きっと比企谷小町は誰よりも優しい

結局由比ヶ浜が部室へ来ることがなかった平日が過ぎ、待ちに待った土曜日。
以前から小町を東京わんにゃんショーに誘おうと思っていた俺は比企谷家へ電話した。
しかし電話に出てきたのは小町ではなければ、あの腐った魚でもなかった。
『はい？もしもし』
「…　あの瀬谷ですが、小町さんはいらっしゃいますか？」
『壮介くん？久しぶりねぇ、確かうちのバカと同じ高校言ったって聞いたけど』
「…　はい。あの小町さんは…」
出てきたのは小町とあいつの母親で、俺もよく知っている人だ。気さくな人ではあるが、親ともに小町に甘いのはもはや周知の事実である。あと話すと長い。
その後はそんな会話が十分ほど続き、やっと相手に俺の意思が通じた。
『小町？さっきあいつと一緒に兄妹で東京わんにゃんショー見に行ったけど』
「……」
そして現在居間のソファにて絶賛落ち込み中である。

いや、別に小町に特別な感情など無いが。ただ、何かあいつに負けたような気がして嫌な気分なだけだ。

そうして少し落ち込んでいると、後ろからこらえた笑い声と、人を小馬鹿にした気配を感じた。（腐った魚いわく、ぼっちを体験したことのある人間は人の気配に敏感になるらしい）

「プププッ。だから早めに誘っとけば良かったのに。当日なんて予定重なるに決まってんじゃん」

「…　うるせぇ」

その気配の正体は俺の姉、瀬谷蒼子だった。

「…　別に絶対誘いたかったとかじゃねぇし。ただあいつが行きたがるだろうなと思っただけだし」

「はいはい、ツンデレ乙。ていうかいつも思うんだけどなんで壮介、小町ちゃんにだけそんな甘いのよ？」

「…　そこまで甘くないだろ、あいつと比べたら」

「いや、ハッチーと比べたらまぁ、ねぇ…」

そこで姉は言いよどみ、俺はため息をはいた。

しかしどうするか。今日は東京わんにゃんショーで時間を潰そうと思っていたが、予

定が崩れてすることがなくなった。仕方ない…

「…　二度寝する」

「待て待てぃ!!」

そうして俺が部屋に戻ろうとすれば姉が俺の首根っこをつかんできた。というかやめろ、俺は猫か。

「小町ちゃんと一緒に行けなかったからっていじけるなバカ弟。どうせ寝るしかないなら外で動物と戯れてこい!大体幕張メッセ辺りで!」

「…　あんたは弟に、みじめに一人で家族連れもいる和やか動物展示会に行けと?」

そんな端から見てかわいそうなことなどできるか。ていうか俺はたいして猫や犬なんかに愛着もないし、行くだけ無駄だ。

つうかわんにゃんショーには小町が来ているから会ったら会ったで気まずい。

つまり今から俺が行く利点がないのだ。

しかし姉はそんな乗り気でない俺を見て、つまらないのか口を尖らせていた。

「ふーむ、本当にいざというときに限ってへっぴり腰ね。なら仕方ない、私もついてってやろう!」

「…　は?」

そしていきなり意味の分からない決心を決めると、瞬時に俺の首根っこをつかみ玄関

の方向へ歩き始めた。
「・・・ ってマジで行く気かよアンタ」
「行く行く、行くに決まってんじゃん。こんな面白そうなこと他にはないよ～。アンタも腹括りなさい」
「・・・ はぁ」
姉が、瀬谷蒼子がこう言ったならもはや誰もこの人を止めることはできないだろう。昔よりこんな感じで俺を色んな所へ引きずり回してきたのだ。
反抗するだけ無駄である。
しかしただ言いなりになるのもあまりに情けなかったので俺はため息を一つ吐いた。
すると現在形で俺の幸せを奪っている張本人より、呆れた感じで言葉が出されていた。
「ため息ばっかりしてたら幸せが逃げるよ？」
誰のせいだ、誰の・・・
ーーーーーーーーーーーー
「・・・ アンタ、車上手くなったか？」
結局姉の横暴に抵抗することも虚しく、俺は車へと乗せらせ、わんにゃんショーへと連れていかれた。

その際姉が普段では見せない運転姿を見せていたので、珍しく思い、ふと声に出してしまう。
「姉にアンタって言うな。・・・ まぁ休日に知り合いとよく遊びに行ってるからね。そのうちに上手くなっちゃったかな?」
「・・・ そういやいつも日曜には家にいないな」
思い返せば、大学に入ってから姉はよく外で食事を済ませたり、帰りが遅くなったりすることが多くなった。
単純に大学生になり、付き合いが多くなっただけかもしれないが、そのたびに家に帰ってくる姉の顔はいつもげっそりとしている。
気になりはするが、とやかく聞くと気持ち悪がられるのでその時はあまり尋ねない。
個人の問題は個人の責任だ。俺だってそうだったのだから。
「・・・ まぁ帰りが遅いのはいいが、連絡はしろ。飯の用意で手間取る」
「あー、それについてはごめんなさい」
そんな話をしている間に俺たちは幕張メッセの入場口へ入り、お待ちかねの動物とのふれあいに心を馳せ・・・ る年齢でもなく、ただ横目でチラッと見る程度で納めていた。
いや、隣人はちがうようだが。
「・・・ 随分と目を輝かせてるな」

「えー、当たり前だよ。こんなに可愛い動物たちがたくさんいるんだよ。逆に壮介が感動無さすぎっていうか」

そんなことを行っている限りでも、どうやら姉は回りを囲む動物に予想以上に興味をもったらしく、首を右へ左へ振りながら笑みを浮かべている。

そしてまた少し歩き鳥ゾーンへと入ったとき、姉は入場口でもらった地図を見ていた。

「あっ、この先小動物ゾーンだって。ふれあい広場とかあったよね～。早くいこ」

「・・・　いや、鳥が」

小動物に興味津々の姉をおいとき、俺は現在いる鳥ゾーンから離れる気が起きない。目の前で首を捻るインコがなんとも神秘的である。

「あー、壮介本当にそういうとこだけハッチーに似てるね。あの子も鳥好きだったし」

「・・・　怖いこと言うな、口は災いの元って言葉・・・」

「おや、瀬谷じゃないか？」

言葉の途中で後ろから話しかけられ、まさかと思い、振り返ってみればそこにいたのは予期した人物ではない、ここにいるのが意外な平塚女史だった。

「・・・　うっす」

「あぁ、こんなところで会うとは奇遇だな。君も動物に癒されにきたのかね？」

「・・・ いや、別に」
話し込む平塚女史をよく見ると肩には大荷物のショルダーバッグ、首には明らかにその通の人しか持ち合わせていないだろう、一眼レフのカメラがあった。
つか、この人こんな大荷物もって何しに来たんだよ・・・ 撮影会じゃねえぞここ。
「ん?そこの人は・・・ まさか君のいい人では・・・ !?」
「あ、始めましてー。壮介の姉の瀬谷蒼子です」
大いな勘違いをしようとした平塚女史の発言に食い気味に訂正をいれる姉。
それにより平塚女史も自分の間違いに気付き、少しホッとしていた。
いや、生徒に嫉妬すんなよ。いい加減誰かもらってやれ。
「そうか、瀬谷のお姉さんか、よかった・・・ ゴホン。始めまして、私、瀬谷くんの部活の顧問をさせていただいてます、平塚です」
「あっ!?あなたがあの平塚先生でしたか!!噂は予々聞いていますよ!いやー今時鉄拳制裁な教育方針なんて、ギリギリを生きてますね!」
「ハハハッ。生きざまは常にギリギリを目指してますから」
いや、もっと余裕もって生きろよ。だから婚期逃すんだろうが。いや、口には絶対出さないが。
そして何やら姉と平塚女史は話があったようで、そのまま二人とも井戸端会議へと突

入。

その姿は正に熟年の・・・　いや、これ以上は殴られそうだからやめとこう。

しかし話があったのはいいが、逆に俺が孤立してしまった。（別に慣れているが）

こういうときは話の邪魔にならないように静かに立ち去るのがベスト。途中でいないことに気がついても携帯による呼び出しが可能のため、なにも問題がない。

ちなみにソースは腐った魚である。

「あの～、もしかしたら何ですけど平塚先生って雪ノ下・・・　さんのこと」

「ん？蒼子さんは・・・　のことご存じなんですか？」

後ろでは何やら聞き覚えのある名前のやり取りが為されているが、俺には関係がない。先へ進もう。

ーーーーーーーーーーーーーー

「いっよーしよしよし、君可愛いなー♪君にはカマクラ二号の称号を与えよう!!光栄に思えー♪」

「・・・　俺はあのブサイク猫の二代目を次がされたそいつが可哀想に思えるのだが」

子ウサギの肉球をいじりながら、とんでもないことを言う小町へ突っ込みながら俺はため息をつく。

どうしてこうも奇跡的に出会ってしまったのだろうか。いや、本当に偶然だったのだ

が。

俺はとりあえずあの二人より離れ、次の小動物ゾーンへ来ていた。

姉は小動物を見に行きたがっていたし、あの大カメラを持っていた平塚女史もこのふれあいゾーンには目がないと予測できる。

つまり話を終えた二人は必然的にこの場所へ来ると俺は勝手に思い、ふれあい広場の片隅でたまによってくる小動物と戯れながら待っていた。

しかし予想と反し、二人が来るようすが全くなく、代わりに来たのが・・・

「おぉ、ソウくん！こんなところで会うなんて珍しー！」

「うぇ、なんでお前いんだよ。しかも小動物ゾーンって。似合わないな」

「比企谷くん、偏見でそんなこと言ってはいけないわ。確かに目付きの悪い瀬谷くんがウサギと戯れていると、どうみても捕食の現場にしか見えないけれど」

「いや、それこそ偏見じゃないのか？」

「・・・　はぁ」

何故かいつもの奉仕部メンバー（一人除く）プラス小町が現れた。

小町たちはわかる。今日来ていることは元々知っていたし、多少の覚悟もしていた。

（すでにこの先まで行っていると思ってはいたが）

しかし意外なのは雪ノ下である。こんなふわふわしたイベントは雪ノ下の眼中にはないと思っていたが。しかもよりにもよってこの腐った魚と同伴でとは。

「まぁ人のことは言えないのだけれど、まさかあなたが一人でこんなところに来るなんて。少し…　いえ、かなり意外だわ」

「…　誰が好き好んでこんな場所一人で来るか。姉貴と一緒に来たんだよ」

「…　？あなた姉がいたの？」

「…　あぁそうだけど」

俺がその雪ノ下の質問に答えると雪ノ下は一瞬苦い顔をしたが、すぐにいつもの冷たい氷のような表情へ戻す。

「そう…　一緒にきているということはそれだけ仲が良いのね、あなたたち」

「…　あン？まぁ仲悪けりゃ一緒には来ないが、そんなのこいつらに比べればまだまだだと思うがな」

足元にいるハムスターを捕まえながら無邪気に笑う小町と、それを危なっかしい様子で見ているあいつ。

お互いに無いものを補っているとは言いにくいが、そばにいても仕方がない人。そういう雰囲気が両人から流れている。

それは腐った魚が一番近くの他人と割りきっているからでもあるが、しかしそれ以上

にお互いのことを理解しあえてないと、成り立たない繋がりであるのだろう。
「そうね…　確かに彼女たちの関係は、とても素敵なものよね」
「…　まぁ、見習う必要もないけどな」
関係など人それぞれで成り立つものだ。
誰とでも同じ関係を保てるなど、そんなのは誰にでも同じ顔をするのと同義だ。
俺はそんな、簡単な人間になりたくない。
「…　つか、来る途中で平塚顧問見なかったのか？」
「見かけたけれど…　とても話しかけられる状況ではなかったから挨拶は見送ったわ」
…　いったいなに話してたんだよ、あいつら。

その後は腐った魚が先へと急かしたことより、まだふれあい広場に残る小町のお守りを俺に任せ、残る二人が猫ゾーンへと向かった。（ちなみに提案したのは小町である）
「…　お前、なんのつもりだよ」
あの雪ノ下雪乃と腐った魚を二人きりにするなど、腐った魚を凍死させるつもりなのだろうか、こいつは。
「いやいや、苦節１７年。本当に苦しかった思春期の時代を乗り越え、お兄ちゃんに今まさに青春のドアが開こうとしてるんだよ。妹的にはこれは後押しするしかないっしょ。

あ、今の小町的にポイント高い」
「・・・　あぁそうだな、凄く兄思いで良いと思うぞ」
　着々と貯まっていくあいつの小町ポイントに危機感を覚えつつ、なぜこいつはこんなに兄のことになると打算的になるのか不思議に思う。
　なにかと責任感が強いタイプであるのは感じるが、別に背負わなくてもいいことは放っておいてもいいと俺は常に思う。
　それこそ、こいつは気負いすぎてボロを出すことが多いのだから。
「・・・・・・　ねぇソウくん。今更なんだけど、お兄ちゃんのこと、まだ怒ってる？」
　そんなことを考えていると、小町より似合わない悲壮の声が聞こえた。内容は、まぁあの事で間違いないだろう。
「・・・　気にしてねぇよ。あいつと俺は知り合いであっても結局他人だ。無理に助け合うような仲でもないだろ」
「だってソウくんはっ・・・　！」
「あっ！やっと見つけたぞ瀬谷！急にいなくなる奴がいるか。探したんだぞ」
　小町が何かを言おうとしたとき、タイミングを見計らったかのように平塚女史が俺たちのところへやって来る。
　小町はそれに焦り、ばつが悪そうにそのまま足元のフェレットを持ち上げ、それで俺

から顔を隠す。俺はそれになにも反応してやることはできない。
平塚女史はその状況になにやら訳がわからず困惑していたが、すぐに姉がやって来ると、何故か俺は二人からの説教を受けてしまった。
「…　はぁ」
説教中に出たそのため息に、二重三重の意味が込められていることはおれしか知らない。

どうであれ瀬谷壮介は不憫な一日を送らされる

「で、隣にいるのは比企谷の妹さんか？なんでここに？」
「…　さんざん説教した上に今更それかよ」
　本当に、本当にさんざんと説教をした平塚女史とその横にいる姉は、一息ついたあとおれのとなりにいる小町を見て、また息をはいた。
「なにやら今日は予期せぬ出会いが多いな。比企谷妹がいるなら、勿論兄の方もいるんだな？」
「あっはい。さっき雪ノ下さんと一緒に奥の方に…」
「何!?雪ノ下もいるのか！全く、運命の出会いならせめて赤い糸の方がいいんだがな」
「…　会いに行く気満々だな」
　そう言ってやれやれと呟く平塚女史の口は微かに笑っており、出会い頭の時よりも若干気分が高くなっている様子だった。
「まぁな。せっかく学校外であったんだ。ラーメンでも奢ってやろうかと」
「…　一部の生徒に肩入れしすぎると、面倒くさくなるんじゃないスか」
「なぁに、ばれなきゃイイのさ、ばれなきゃな。比企谷妹もどうだ？当然瀬谷、君も来る

だろ？」
　そう言ってこちらに目配せさせてくる平塚女史。正直奢りの言葉には心が引き寄せられるが・・・
「・・・ 太っ腹もいいが、俺もいくと先生の財布が軽くなると思うんで遠慮します、つうか姉貴もいるし」
「子供が大人に気を使うもんじゃない。瀬谷姉も一緒にどうだ？」
　俺の返答に平塚女史は微笑を浮かべると、姉貴の方へも誘ってきた。
　なぜ自らでそのような出費を増やすような行いをするのか全く理解できないが、やはりこの人は並みの男よりも漢らしいことはわかった。誰かもらってやれ。
「あはは～、流石に今日会ったばかりの弟の先生に奢ってもらおうなんて野暮な心ありませんよー、私たちは大丈夫なんで先生たちで楽しんでくださいな」
　俺と同じく姉も平塚女史の誘いをやんわり断ると、こちらの方へ目を向けた。
　その意図は分からないが。
「・・・ そういうことなんで、まぁせめてあいつらと小町で遊んでくれ。つうかアンタは俺の担任じゃねぇだろ」
「遊ぶとは、はて何のことかな？あと、担任じゃなかろうが私は君の教師には変わりないんだ。他人行儀はやめてくれ」

「…　そうかい」
　それを皮切りに、俺達は平塚女史と小町に別れを告げ、元々冷やかし半分だったわんにゃんショーの会場から足を出した。
　その間、隣では姉がなにやらムスッとしていた。
「…　なにやってんだアンタ」
「ムゥー…」
　先ほどから訪ねてみてもこの繰り返しであり、まともな答えは返ってこない。
　どうしたものかと思い、会場を出て五回目のため息をはく。このごろは意識せずともため息をはくようになってきた、正直怖い。
「ねぇ壮介、小町ちゃんと何かあったでしょ？」
「…　あン？」
　やっと喋り出したかと思えば、不可解な一言。いや、その一言は確信をついたものだったが。
「小町ちゃんがなんか暗かったし、口数もいつもより少なかった。あと険悪な雰囲気出しすぎだし」
「……」
　ムスッとした顔と比例して不機嫌そうな声で感想をいってくる姉に、俺の方も少し声

の調子が落ちる。
「・・・ 昔のこと話してただけだ、険悪ってわけじゃない。どちらかと言えば・・・」
「気まずさ?・」
そうだ、それが一番しっくり来るだろう。
俺は昔を未だ引き摺ってはいるが、それに対して誰かに憎悪しているわけでも悲壮しているわけでもない。あれは結局、俺自信の自業自得なのだから。
しかし、小町はそうは思ってくれない。
小町はあの時、何もしなかった自分を責めている。そして、それで俺が傷ついたと思い込んでいる。そんなの気遣いはお門違いであるのに。
そんな感情がお互いすれ違いあい、今の気まずい状況が生まれているのだろう。
そんなことを考えていると急に隣人が人指し指を天に向けて話し出した。
「壮介、私は思います。小町ちゃんは可愛いと」
「・・・ なに当たり前のこと言ってんだ、アンタ」
「そうです、当たり前なのです。なのに壮介はそんな可愛い子を悲しめました。可愛い子は国の、世界の宝です」
そこで姉貴は一旦話を区切る。そして天に向けていたその指をこちらへまた向けた。
「だから壮介は小町ちゃんをデートへ連れていかなければなりません」

「・・・　は？」

一拍置いて呆れのこもった変な声が出た。

いきなり何を言い出してんだこの姉は、ついに頭も春のお花畑になったか？

怪訝な目で見ていれば、姉貴はようやく恥ずかしく思い始めたか、少し頬を染め咳払いを一つした。

「だから！壮介は小町ちゃんを悲しませた罰として小町ちゃんと出掛けなくちゃ行けないの！」

そして言い出し始めたのは意味不明な刑罰執行。しかも語調を強めて半分切れ気味に。

「・・・　いや、分からん。何でそんな取って付けたようなラノベ的展開になるんだ？俺には到底理解できないんだが」

姉の言い分を頭が受け付けず、先程よりも増した怪訝な目で姉貴を見る。

その目は姉貴には効果抜群のようで、ぐうっと唸るとまた顔を真っ赤にさせた。今度は頬だけでなく顔全体だ。

「う、うるさーい！行くっつったら行け！行かないとアンタの部屋にある自作の歌詞と楽譜をネットに晒すぞ！」

「・・・　てめぇ自分の弟を社会的に殺す気か」

そんなこんなで車までの道のりの間この会話が続けられ、結局俺が折れて明日小町を誘って出掛けることになった。

「…　意味が分からない」

不毛な結果に俺はため息さえもこぼせなかった。

ーーーーーーーーーーーーー

「……」

時間は変わって現在は自宅の自分の部屋。

東京わんにゃんショーより疲れて戻った俺は、人の気も知らずに嬉しそうにうきうきとしている姉を放って、すぐさま部屋へと入り疲れた体をベッドで休ませてそのまま寝入ってしまった。

そして起きてから飯と風呂を済ました今、俺は携帯電話を片手に悩んでいた。

姉は確かにああ言っていたが、昼に気まずい思いをさせたのだ。そんな当日に簡単に連絡を取れるわけがない。

そしてもう十分ぐらいになるだろうか、携帯電話とにらめっこをしていれば、ついに決心をつけた時、突然その携帯が震え始めた。

通話先は…　何かの偶然かそれとも運命か小町と表示されている。
「…　もしもし」
「あ、ソウくん。今いいかな？」
「…　悪けりゃ電話に出てねぇよ」
「アハハッ、そうだよね……」
出てみると本当に小町だった（当たり前だ）。
しかし話してみるとやはり昼のことを思っているのかいつもの軽い口調ではなく、どこかよそよそしい他人行儀を思わせるしゃべり方。
…　いや、仕方ないのか。
「…　なにか用があるんだろ」
こんな状態で世間話など出来るはずもなく、俺は本題を急かす。
「うん、実はね…」
携帯越しより小町より概要を話される。
俺はその話を聞いて口に出したのはまず、安堵のため息だった。
ーーーーーーーーーーーー
翌日、日曜日。
昨日の電話より小町から待ち合わせ場所として聞いた駅前につき、携帯で時間を確認

する。待ち合わせ時間ちょうどだ。よし…
「…　定時だな」
「いいえ遅刻よ」
　不意に後ろから声をかけられ振り向くと、そこにはいつも部室で見る冷たい表情を更に二倍乗せした雪ノ下雪乃が立っていた。
「…　ンでだよ、時間ちょうどだろうが」
「あなた、十五分前行動という言葉を知らないの？現代の社会人なら誰しも保有している必須スキルよ。そんなことも出来ないようではそこの比企谷君より使えないわよ」
　雪ノ下の言葉に納得できず一つ反論すると、容赦のない舌技により三倍になって返ってくる。そしてその毒舌に俺は内心でため息をはく。こいつ銀行員に向いてるな、金融庁も怖くて迂闊に手が出せん。
「まぁまぁ雪乃さん、落ち着いて」
　未だ口を止める気配のない雪ノ下に抑制をかけ、宥めようとしてくれているのが昨日電話をくれた小町だ。
　そしてその奥では遠目で御愁傷様とでも言いたげな目を向けてくる腐った魚もいる。つうかやめろ。お前に同情されると人生に負けた気がする。
「おい雪ノ下、そこら辺にしとけよ。もうすぐ電車来るだろ」

「えぇそうね。あなたがもう少し早く来ていればもっとゆっくりできたのだけれどね」
「・・・　モウシワケゴザイマセンデシタ」
「何かしらその謝罪、反省の意のない謝罪は相手にとっては侮辱にしかならないことをあなたは・・・」
未だ雪ノ下はこちらへしつこく冷たい視線と小言を送ってくるので一応の形として謝罪を述べる。しかし反省の意の無さを見抜かれまたお得意の舌技を食らう破目になる。
説教を貰っている際確信した、間違いなくこいつは友達が少ない。
そんなことを思ったが、決して口には出さないようにし、代わりにため息を一つはいた。
「いや、だから電車遅れるぞ・・・」

「・・・　で、由比ヶ浜へのプレゼント探しって具体的に決まってんのか?」
雪ノ下の口撃をなんとか留めさせ電車に乗り込むと、今日集まった目的についてを再度聞いた。
聞くところによると6月18日は由比ヶ浜の誕生日であるらしい。そして雪ノ下た

ちはそのお祝いがしたいと今日そのためのプレゼントを買いにきたのだ。
つまり小町は昨日これを手伝ってもらうため俺に電話を掛けたということだ。
「いいえ、一応情報は集めてみたのだけれど。私、同世代の子からプレゼントを貰ったことがないから」
「なんだ、お前本当にアレだな。俺なんてアレだぜ、ちゃんともらったことあるぜ」
俺の問いに答えた雪ノ下に勝ち誇ったかのような笑みを浮かべる腐った魚。
その態度にてっきり雪ノ下は睨み付けるなどするかと思ったが、意外にもその表情には驚愕と疑惑の色だけで染まっていた。
「まさか、嘘でしょ」
「嘘じゃねぇよ、今さらお前に見栄張ったところで意味ないだろ」
雪ノ下の疑惑の問いに自虐ぎみに答えるこいつ。
こいつがこんな強気な姿勢を出すとは・・・ いやもしやアレか、高津くんの話か。それなら普通の反応か。
しかしなんとも不毛な会話だ。まさか誕生日プレゼントをもらったか否かで互いの傷の見せあいをするとは。これがぼっちの神域というやつか。
ちなみに俺は小学校まではごく普通にもらっていた。中学になってから友人の間でそういうことしなくなったような気がするが、つうかその辺りから回りと疎遠になって

いってたな…　いや、考えるのはやめるか、鬱になる。
「…　つうかおまえそれ、ご近所付き合いで渡されただけのお情けのプレゼントだろ。そんなもんカウントすんな」
「ちょっお前、ネタばらし早すぎだろ。もう少し優越感浸らせろ」
「…　しかももらったのってトウモロコシだろが」
「バッカ、高津くんの家が農家だったんだよ！言っとくけど超うまかったからな！」
何故か切れ気味に言ってくる腐った魚。
そんなこいつに全員が哀れみの視線を…　いや、雪ノ下だけ冷たい視線を送っていた。
その後突如として始まった腐った魚による自分語りによって、またも知りたくもないトラウマ話（俺は知っていたが）を聞かされた。
意外だったのはその話に雪ノ下が少し同感を得ていたことだ。
（…　こいつらやっぱ似てんな）
ふと心のなかでそう思ったが、即刻考え直し、外の天気をひたすら眺めるようにした。
電車の窓から見える澄みわたった青空は、これから始まるであろう夏の暑さを予感させるには充分だった。

やはり比企ヶ谷小町は色々とすごい

「…　広ぇ」

今回俺たちは由比ヶ浜の私物と被らないプレゼントを探すために、少し遠目のショッピングモールへ行くことになった。腐った魚や雪ノ下は近場で済まそうとしていたようだが、小町がそれを却下し、こうして船橋まで電車で行くこととなった。

そして電車に揺られほとんど喋らずに数十分間を過ごすと、南船橋駅に着き、そのまま目的地まで直行し今に至る。

「…　人が群れてる」

私生活で日常的にあまりこういったモールを利用していないせいか、その広さに圧倒される。しかも人まで多い。

まずい、すげぇ帰りたくなった。

「驚いたわ…　かなり広いのね」

見れば隣の雪ノ下もこのショッピングモールよ広さに圧倒されていたようで言葉に驚愕の色を乗せている。

というか雪ノ下以外のやつはそれほど気にもしていない様子で、小町は物知顔でこの

モールの概要を雪ノ下に話しているし、腐った魚もいつも通りに腐った目で地図を見ていた。地図が腐らないか心配である。

「よし、効率重視で行くか。無駄に広いしなここ。じゃあ俺はこっち回るから」

・・・　あ？

「ええ、では私はその反対側を受け持つわ」

「よし、じゃあ後は小町が奥の方を、瀬谷が書店の方を・・・」

「・・・　いや待て」「ストップです♪」

「痛っ!?」

意味のわからない提案に堪えきれず、俺が腐った魚の爪先を踏み、小町が案内板に指されていた指を折る。

その手と足への同時攻撃に腐った魚もたまらずその場にうずくまった。

その間にも小町はアメリカのコメディ映画のように両手を肩ぐらいまで上げ、首を横に振りながらため息をはく。

いや、リアクションがオーバーすぎるだろ・・・　気持ちは分かるが。

しかし未だにうずくまっている腐った魚はともかく、雪ノ下もその行動を不可解に思ったようで軽く首を傾げている。

「なにか問題でもあるかしら？」

「・・・ 問題はないな。ただ一般的な範疇の考え方からかけ離れているだけだ」
俺がそう言っても雪ノ下はまだ理解できないようで小町の方を見る。腐った魚の方は・・・ あぁ、この顔は理解したが納得していないときのやつだな。とりあえず蹴っとこう。
「お兄ちゃんも雪乃さんもナチュラルに単独行動を発想しすぎです。せっかく皆で揃っているんですからお互いアドバイスしあって選んだ方がお得じゃないですか」
「でもそれでは全部回りきれないんじゃないかしら・・・」
小町の意見にそう言う雪ノ下だが、なぜそうも発想が極端なんだろうか・・・
大体由比ヶ浜辺りが好みそうな物が置いてそうなところなどは俺でも見当がつく。
(ほぼ姉の買い物の影響のせいだが)
経験則も合わせれば・・・
「大丈夫です!小町の見立てだと、結衣さんの趣味的にここを押さえておけば問題ないと思います!」
そう言って小町が案内板に指を指したのは一回の奥の方で主に中高生の女子向けの商品を取り扱うところだった。が、雪ノ下も腐った魚もそういうことに疎いらしくとりあえずは一番由比ヶ浜の感性に近いであろう小町の意見に従うようだった。もちろん俺も小町に従う。

男の俺が女子向けの商品のことに口出しなどしたら気持ち悪いことこの上ないだろうしな。

結局小町が指定したエリアへ行くこととなると、俺たちはそのまま世間話もせず歩き始めた。

図らずしも最後尾を歩くこととなった俺は暇になったのでとりあえず前を行く知人の行動を観察していった。

まず腐った魚は他に目移りすることもなく、時折チラチラと回りを見ること以外は歩くことしかしていなかった。いや、時々雪ノ下の方も見ている。好意の目ではないが好奇の目ではあった。やはりストーカーか。

次にその雪ノ下を見ると、やはりあまりこういった場所に来たことがないようで、歩くたびに過ぎ行く店に視線を与えていた。挙げ句には一つの店にふらふらと立ち寄りデスティニーランド産のくまのマスコットを手に取って肉球を触っているまである。あっ、店員が近づいてきたら戻した。

確かに一人で店内物色しているときに話しかけられるのはよくある。あれは俺も嫌いだ。雪ノ下もそうなのだろう。店員はあれをやる意味とかあるのだろうか。俺たちからしたらただ不快なだけなんだが。

そして最後に小町を見ると・・・ さっきまで俺の少し前を歩いていた小町がいない。周囲を見渡しても小町らしき影はいない。どこ行った?もしやあの愛らしさのせいでさらわれたか?

小町の失踪に唖然としていると、突然誰かから袖を後ろから引っ張られる。何事かと思い首だけを振り返らせれば、そこには先程から探していた小町がいた。いや、いつの間に後ろ回り込んだんだよ。

「ちょっとソウくん、こっち来て」

「・・・ あん?」

袖をつかんだまま小町はそう言うと、俺の返事を待たずに雪ノ下たちが歩いている方向とは別の方向へ歩いていった。

そして袖をつかまれている俺も必然的に小町の方に引っ張られ、みるみるうちに雪ノ下たちの姿は遠くなっていった。いや、てか気づけよあいつら。

雪ノ下たちの姿をようやく見失った頃、小町もずっとつかんでいた袖を離し、顔をこちらへ向ける。

「・・・ どういうつもりだ。あいつら二人だけにして」

「や、昨日言った通りお兄ちゃんには青春ポイントが足りないと思ってね。妹として手伝いをしたまでなんだけど」

小町はそう言って意地の悪そうに笑う。だがその笑顔も長くは保たなかった。
「あと、ソウくんにも謝りたかったから」
少し言いにくそうに小町はそう言うと、俺へと向けていた視線を明後日の方向へ向けた。
「・・・言ってんだろ、お前はなにも悪いことはしてねぇって」
「そうだとしてもさ、あのことが噂されてから話さなくなったのは事実だし、そのせいでソウくん孤立してたから・・・」
小町が言うあのこと。前に平塚女史が話題に出した・・・俺がいじめの主犯角にいたという噂。
中学二年生の秋頃、あることがきっかけでその噂が流れ、俺は結果的に学校内で孤立した。事実は、俺がいじめをしたという確信と証言のとれないままうやむやになっていったが。
だが人の噂というのはそのようなくだらない結果に対しては関心がとても薄く、相対するようにインパクトの大きい過程に対して興味はとても高い。つまりは一度大海へ放たれたその、『瀬谷壮介がいじめをしたかもしれない』という噂は、尾ひれ背ヒレと生やして成長していき、やがてはいわれのない大罪へと進化していったのだ。
そして俺はその大罪を犯した罪人として、学校中より後ろ指を指される立場へとなっ

ていった。
　必然、そんな立場になった俺の周りはどんどんと人がいなくなっていった。小町も例外ではない。いや、比企谷小町だったからこそ真っ先に俺のそばを離れていった。その当時からひねくれていたあいつが、最愛の妹をそんな噂の渦中の人物の側へ置いておくわけがない。いつの間にか、ごく普通で当たり前のように、比企谷家と俺との中学での交流はなくなっていった。
　そこには遺恨なんてものはなく、お互いの納得と妥協によって成り立った空気だけがあった。だから、小町が非難をうけるなんてことは決してない。
「・・・ あのとき俺の側にいたとしても、小町は何も出来なかったはずだ。だからあのときのお前の行動はあれでいいんだよ」
「でも・・・ それじゃあ私は納得できないよ」
　明後日へと向いていた小町の顔は、だんだんと俯いていく。
「・・・ 仕方ないんだよ。俺はなにもしていない、だが回りのやつらはそれを認めないんだ。俺が孤立すれば済む話なら・・・」
「そういうところ、本当にお兄ちゃんと似てるね」
　は？
　いつのまにか顔をあげこちらを向いていた小町のいきなりの、しかもあまりに不本意

な言葉に思わず口を開いて唖然としてしまう。
　しかし小町はそんな俺に構わず言葉を続けた。
「でもね、お兄ちゃんは自分の非のないところはきちんと否定してるよ。ほら、お兄ちゃんって事故防衛能力だけは高いじゃん」
「・・・　あぁ、それはとてつもなく知っている」
　なんなら高すぎて時々墓穴掘っていることすら知っている。何で知ってんだよ俺。
「だからね、私はソウくんに怒ってもいるのですよ」
「・・・　謝りたいとか怒ってるとか、忙しいなお前も」
「はい！そこ揚げ足とらない！」
　俺の指摘を小町が鋭く遮断すると、俺に指を指してきた。おい、人に指を向けるな、失礼だろうが。
「だから私が言いたいのは、私はいつでもソウくんの味方でいてあげるってことなの！」
「・・・・・・」
　力強く小町はそう言うと、指を下ろし、そっぽを向くと言葉を続ける。
「だからソウくんも、やってないってことはきちんと言ってね。黙ったまんまじゃ私だって怒るんだから」
「・・・・・・・・・・・・」

結局、小町は小町なりの答えを出していた。
意地になっていたのは俺とあいつだけだったのかと今、改めて思い返される。
いや、俺も答えを出せていたはずだ。だがそれを認められなかったのは、それは意地じゃなく弱さだった。
「・・・ やっぱお前ってすげぇんだな」
「ん？ フフフ、ようやくこの小町さまの凄みに気づくなんて、いったい何年幼なじみやってると思ってるの？」
そうだ、付き合いだけは深かったんだ。それを俺たちはバカみたいに他人行儀に・・・
「・・・ あぁ、こんな人混みのなかでそんな恥ずかしいこと言えるとは、お前すごいわ。あと、もう少し離れてくれ。知り合いに思われんだろ」
「あっ・・・」
これだから俺もあいつもぼっちなんて言われんだよ。

そして彼、彼女は邂逅する。

わだかまりが解けた、と言うにはあまりにもその過程が単純すぎたが、とりあえず俺と小町との間で誤解は無くなった。

まぁ俺が一方的に避けていただけだが。

「・・・で、俺たちはこれからどうするんだ？」

そして当てもなくショッピングモールの中をぶらぶらしていれば、俺は本来の目的である由比ヶ浜へのプレゼント探しのことを思いだした。プレゼントを買うためには先ほど看板に示した場所にいかなければならない。しかし雪ノ下もあいつもまた、同じ場所に向かっているのだから、このまま歩いていればやつらと鉢合わせてしまうだろう。いや、俺は会ってもいいんだが。

「・・・このまま由比ヶ浜へのプレゼントを買っていくんだったらあいつらと鉢合わせになるぞ」

「あぁ大丈夫大丈夫。私はもう結衣さんへのプレゼント買ってあるから」

「・・・俺はまだ買ってないんだが」

唐突の小町の発言に俺は何一つ安心できる部分がなかったため、冷めた目で小町を見る。しかし、当の小町はどこかしたり顔で笑っていた。
「ふふーん♪そっちも大丈夫だよ。ソウくんからのプレゼントもちゃんと買ってあるから♪」
「・・・ というと？」
浮かべられた笑みと胡散臭い雰囲気を漂わせながら喋る小町に一抹の不安を持つ。
こんな顔をする小町は大概打算的にものを考えているが、いかんせんアホなためうまくいった試しはない。
そしてためにためて小町がバッグから取り出したものは・・・
「じゃーん!!調理道具一式〜！」
どこその２４世紀に存在する猫型ロボットのような言い方に引っ掛かりを覚えるが、あえてスルーし小町が手に持っているものをまじまじと見る。
派手な色彩ではあるが、スケルトンカバーに入れられている数本の包丁、泡立て器、おたまなどのそれは、紛れもなくありふれた調理道具一式だった。
「・・・ 何でこんな普通なんだ？」
「え？なにその反応？私だって結衣さんへのプレゼントに奇抜なものなんて買わないよ。私をなんだと思ってんの！」

「…　人の誕生日プレゼントに短冊持ってくる奴だと思ってたよ」
　しかもご丁寧に願い事書いてあったし。兄の目が生き返りますように？　そりゃお星さまだとしても叶えられないだろ。
「アハハー、今年はちゃんとするから…　あ、お兄ちゃんから電話だ」
　自分のかつての行いに小町は苦笑を浮かべると、誤魔化すように鳴り響くあいつからの電話へでた。いや、誤魔化し方下手すぎだろ…
　そして今電話がかかってきたということはあいつらはつい先程俺たちがいないことに気づいたのか。もう離れてから１０分以上過ぎてんぞ。
　電話に出ると小町はすぐに謝罪し、別の用事のため俺と一緒に別行動をとる旨を話して、おもむろに電話を切った。電源すら切る二段構えである。
　一瞬あの腐った魚を女子と一緒に放流していいものか考えたが、その女子が雪ノ下であることを思いだし、逆に同情しそうになった。（同情したとは言っていない）
「…　で、このあとはどうすんだ、帰るか？」
「ホントにソウくんそういうとこお兄ちゃんに似てるよね…」
　小町があいつに向けるのと同じ冷ややかな目でこちらを見てくる。
　確かにあいつもこんな事態にあったら同じことを言うだろうが、あいつと同じと言われるとは、やはり屈辱だ。

故に俺は先ほどの恥ずかしいカミングアウトのお返しも込め、いつもの俺なら決して言わないであろう言葉を吐く。

「・・・ んじゃ、このままデートと洒落こむか」

「えっ・・・」

瞬間、小町は小さな驚きの声をあげ、黙りこんだ。

正直、冗談だと思ってくれるだろうと予想・・・ というより期待を含んでいた。

さっきまでは薄まっていたが、時間的な付き合いは長く、昔から本音も冗談も言い合える、そんな仲だったからだろう。

しかし今のこの状況を鑑みれば、自分はなんという間違いを犯したのか、冷静な脳は瞬時に教えてくれる。

ほのかに赤い頬、少し開いた口、驚きで見てくる目。

その部分的事象を確認しながらも俺は深く追求せず、小町から顔を背けた。

「・・・ 冗談だ」

「・・・ あっ、うんそうだよね」

俺がそう言いはなつと、視界の外側の小町は小さな声で答えた。

拳で自分の頭を小突き、俺はバカだ、とまた自己嫌悪に浸りながら停めていた歩みをまた開始する。

すると後ろからもまた、遅れて足跡が聞こえてきた。
「もうっ、急に変なこと言わないでよソウくん。今のが私じゃなくて女版お兄ちゃんだったら、速攻告白して速攻フラれてたよ！」
「・・・　考えただけでも吐き気が出る例えだな」
さっきとは違う、いつも通りの小町の声を聞く。
その声に俺は安心を覚え、同時にまた自己嫌悪を増してゆく。
結局俺は、いつも小町に助けられている。
今までも、今も。
「でも、もしお兄ちゃんが女の子だったら・・・　ソウくんとお似合いだよね♪」
「オイヤメロ」
俺はようやく小町の顔を見れた。

ーーーーーーーーー

「ちょっと！　雪ノ下さん走らないで！」
「アオコちゃんおっそーい！タービン回りの整備がなってないんじゃないの？」
「また意味わかんないことを・・・　あとアオコじゃなくて蒼子（そうこ）！何回間違えんの

！」

結局、このまま帰るのも味気ないと駄々をこねた小町の要求から、なんの目的もなくモールをぶらぶらすることが決まった俺たちは、とりあえず女性ものコーナーから離れるように店を物色していた。

するとどこかからとてつもなく聞き覚えのある声と名前が聞こえ、俺は思わず頭を押さえる。

「ねぇ、ソウくん。今の声もしかして…」

「… 違う。空耳だ」

「いや、聞こえてるじゃん。ってことはやっぱり…」

「… 違う。姉貴がこんなとこに「あれ、壮佑にマッチー。こんなとこでなにしてんの？」… いるわけあったな、おい」

押さえていた頭からじんじんと頭痛が起こり始めた。

何でこうタイミングがいいんだか、悪いんだか分からないときに現れるんだよ。うちの姉は。

「あれ、二人だけ？　ハッチーいないの？　てか何でここに？」

頭にはてなマークを浮かべるように、子首をかしげながら姉貴は次々と質問を繰り出していく。

逆にこちらも、朝に携帯を見て『ゲッ!?』と声を出したと思ったらドタドタと外出していった姉が、なぜここにいるのか非常に気になっているため、その質問への対応に遅れる。

そして小町の方はというと…　何故かオロオロとしていた。なにしてんだよ。

すると姉貴はその小町のしぐさを見て、なにか思い付いたのか口でははーんと言うと俺に指を指す。だから指を向けるな。

「そっかー。いや確かに昨日あんなこと言ったけどねー、全く手が早いな～壮佑は」

ニヤニヤとしながら姉貴は含みのある言い方を投げかけてくる。大体姉貴の言いたいことはわかるが、断じて小町とはそんな関係ではないのでそのかまかけを全てガン無視する。

「…　なんのことだかさっぱりだな。大体アンタも何でこんなとこにいるんだよ?」

「もうもうとぼけちゃって～。お二人さん今デー…」

「アオコちゃ～ん、なにしてんの?」

「!?」

姉貴がとんでもない発言をしようとしたちょうどその時。姉貴の背後から突然その声が聞こえた。

「ん?　アオコちゃん、その子達誰?」

「だから私の名前は・・・　って、今はいいか。えーと、雪ノ下さんこの子達は・・・」
「（・・・）雪ノ下？」
それが俺と、雪ノ下陽乃とのファーストコンタクトだった。

とかく雪ノ下陽乃は不気味である。

「へぇー。じゃあ君はアオコちゃんの弟くんなんだー。全然似てないね」
「…　余計なお世話だ」
結局あのあと姉貴の連れである雪ノ下陽乃に捕まり、俺たちは近くのカフェで話をしていた。
今はテーブル席に俺・小町、向かいに姉、ｓ（仮称）がいる。
「で、やっぱり君たちはデートの途中だったの？　私たち邪魔だった？　ねぇ？」
「なんでそんな目をキラキラさせながら図々しい質問できるの!?　一人は私の弟なんだからやめてよ！」
「…　はぁ」
人の噂話が三度の飯より好きそうに俺たちのプライベートを尋ねるこいつこそ、あの雪ノ下雪乃の姉、雪ノ下陽乃である。
奇特な名字なだけに小町が自己紹介のあとに尋ねると、少し驚いた顔をしながらすぐに肯定の意を示した。そして何かの縁だと、無理矢理カフェに連れてこられたわけだが…

「でもさー、愛想のいいアオコちゃんの弟くんなのに物凄く目付き悪いよね。どうやってこんな可愛い彼女見つけたの？　あ、もしかして弱味握ってるとか！」
「…　んなわけないだろ」
カラカラ笑いながらとてつもなく失礼なことを言う雪ノ下姉に内心ため息をはく。
何とかしろと姉貴に視線を送るも、それに気づいた当人は苦笑いをしながら視線をそらす。おい…
「あのー、私たち別に付き合ってるって訳じゃないんですけど…」
「えー本当にー？」
姉貴の頼りなさに愕然としていると、隣の小町が交際の否定をする。だが、雪ノ下姉はそれにもまだ食い下がる。
だがその反応に少し違和感を感じた。言葉は興味を持っているように話しているが、中身がない。社交辞令のように俺たちをからかっているように思える。
それを裏付けるようにかは分からないが、その後雪ノ下姉は俺たちを問い詰めることはせず、注文したコーヒーにただ口をつけているだけだった。
「で、でも本当に偶然ですよね。まさか蒼子さんが雪ノ下さんのお姉さんと友達だったなんて」
雪ノ下姉がコーヒーに飲み始めたのを好機と見た小町は話を変える。すると雪ノ下

姉もそれに肯定するように首を頷かせてコーヒーカップをおいた。
「うんうん、私もそれにはビックリしたよ。まさか雪乃ちゃんの知り合いとこんなとこで会うなんてって」
「雪乃ちゃんって確か一人暮らししてる妹さんのことだよね？　連絡とかとってないの？」
姉貴の問いに雪ノ下姉は首を横に振る。
「ぜんぜーん。だって雪乃ちゃん話すどころか、こっちから電話してもすぐ切るんだもん」
そう言って雪ノ下姉は眉をハの字にするが、すぐに表情を変えてこちらに詰め寄ってきた。急に詰め寄られたため俺は少し後ろにのけ反ってしまう。
「だからさ。君たちには是非とも雪乃ちゃんのこと、教えてほしいんだけどな～」
にっこりと、邪気のない笑みが俺と小町をとらえた。その笑みが俺にはなんとも、不気味に思えた。
あいつなりに言うなら、ボッチセンサーに引っ掛かった、というところだ。
「…　悪いけど、あんま仲良くないんで」
そう言って小町に視線を送る。小町はその視線に気づき、雪ノ下姉の方に顔を向けた。

「あの、私も雪乃さんのことをあんまり詳しくは・・・」
「ふーん・・・ まぁいっか」
雪ノ下姉は訝しげに俺と小町を見るが、すぐに興味を失わせたかのように体の位置を戻した。だが、すぐに思い付いたように手首を自分の目の前まで寄せ、腕時計を覗く。
「アオコちゃん、ネイルの予約もうすぐだよ」
どうやら姉、sは今日ネイルをしに来ていたらしい。雪ノ下姉は自分の腕時計を姉貴に見せて急かすが、姉貴はそれを覗きながらあー、と唸った。
「雪ノ下さん、ごめんだけど先いっといてくれる？ ちょっと二人と話したいから」
「えー、だったら私も残るよー」
姉貴の頼みに難色を示す雪ノ下姉。だが姉貴もそれは予想済みだったのか両の手のひらを合わせて拝むようにまた頼んだ。
「ちょっと積もる話もあるからお願い！ なんなら後でパフェ奢る！」
「よしのった！」
チョロいなおい。デビチルの最初に仲魔にできるデビルぐらいチョロいぞ。
そして話が決まると雪ノ下姉は自分のコーヒー代だけおいてさっさと行ってしまった。
喫茶店の窓の外から見送り、やっと姿が見えなくなった頃、姉貴は大きくため息をは

きながら机へと突っ伏した。

「えーと…　大丈夫ですか、蒼子さん？」

小町が心配そうにそう尋ねると、姉貴はまたあー、と唸りながら大丈夫と返事をする。

これはよくある、気を張りすぎてそれが解けたときに一気に来る疲れでやられる状態、だな。つうか家に帰ってきたときいつもこんな感じなんだが、まさか全部あの雪ノ下姉によるものだったのか？　どんだけ緊張してんだよ…

「というか、二人ともごめんね。なんか図々しく質問しちゃってて。あの人に気遣いはないから…」

ハハハッ、と乾いた笑いを漏らしたあとにまた深くため息をつく姉貴。顔はまだ突っ伏したままだ。

もしかしてこいつ、話がしたいとか言っといてただ雪ノ下姉から離れたかっただけなんじゃないのか？

「…　それより、話があるんじゃなかったのか？」

突っ伏した状態のままの姉を見下げながら本題を問う。リア充ならこのまま華々しく中身のない、大体の言葉が「あーそれな」で終わらせられるトークを挟みながら本題に移るのだろうが、あいにく俺は速さを求める男子のため真っ先に聞く。

やつなら「無駄を徹底的に排除し、速さが求められる現代において、ボッチはそのニー

ズを完璧に答えたエコでエリートな存在である。つまりは無駄が多い今のリア充こそ排他されるべきものではないか」など言うだろう。おそらくボッチという存在事態が無駄だろうが。

「あ、それなんだけど。二人とも雪ノ下さんの妹さんと結構仲いいよね？」

突っ伏した顔をあげ言いはなった姉貴のその質問に俺と小町に少し緊張が走る。だが、近くに雪ノ下姉がいないことを認めると、小町が微かに首を縦に振った。ちなみに俺は振らなかった。

「やっぱり。なんで雪ノ下さん・・・陽乃さんにあんなことを？　・・・あぁ別に責めてるわけじゃないの。ただちょっと気になっただけ」

姉貴の問いにそれは、言いよどむ小町は困り顔でこちらを見てくる。俺も姉貴の方を見ると、そこにはいつにもなく真剣な姉の表情があった。別にやましいことはないが、その表情に若干気圧される。

「・・・俺は仲良いってわけじゃないが、別に深い意味はねぇよ。ただ、本人のいないところで許しもなくそいつの話するのが嫌だっただけだ」

嘘はついていなかった。しかし実際は違った。俺は雪ノ下姉に、実の妹である雪ノ下のことを話すことがとても不安だったのだ。

雪ノ下姉は間違いなく『好い人』だ。どのような人であっても完璧な対応がとり、面

した誰もに仲良くなりたいと思わせる力を持つ人物だろう。
小町も今回、出会った状況が状況なだけに雪ノ下姉にやや引いた形の接し方になったが、もし別の出会い方だったならば、もっと良好な関係になっただろう。
だがしかし、俺は雪ノ下姉、雪ノ下陽乃を『良い人』とは思わなかった。
確証などない。ただの勘だけでこうやって疑っているのだから俺はとても嫌なやつだろう。
ただそんな自己嫌悪をしても、雪ノ下姉に対する警鐘を抑えることは出来ない。
少なくとも俺は今まであんな人間を見たことは無いのだから。
「まぁそれもそうなんだけどね…　実は陽乃さんの妹さんね、実家にあまり顔出さないみたいなの。だから親御さんとかが心配してるって雪ノ下…　陽乃さんがよく言ってね」
それで私も少し心配なの、と姉貴が話を締める。
確かにそうだろう。先ほど姉貴がいっていたことが正しければ、雪ノ下雪乃は一人暮らしをしているらしい。妹が目の届く場所に居ず、しかも連絡も全くないとなれば、それはさぞかし心配だろう。
まぁあの雪ノ下姉がそんなこと考えているのかは疑問だが。
そこでふと思いたった。

「・・・ つうか、そもそもなんでアンタは雪ノ下姉の方と知り合いになったんだよ?」
「あ、それは私も気になりました」
家族事情まで話し合う仲までもつれ込むのはそう容易ではない。俺と小町はそこに興味津々だった。
姉、sの馴れ初めを聞き出そうと口を開くと、突然姉貴がまた顔を机へ突っ伏した。
「そ、その話は・・・ 聞かないで・・・」
「「・・・・・・」」
突っ伏しているため顔を確認できないが、その声には確実に涙声が含まれている。
姉貴のその挙動に哀愁、もしくは惨めさを感じて、俺と小町はもはやなにも言えなくなった。
そんなに酷い馴れ初めなら何でそんな心配出来んだよ・・・ とは嫌でも口には出せん。

されど彼と彼女の関係は特に変わらない。

ようやく顔を上げた姉貴と少し世間話をしたあと、姉貴は俺たちの支払いも持ってすぐに雪ノ下姉を追っていった。

去り際に耳元で呟いた、良かったじゃん、はおそらく小町とのことを示していたのだろう。軽くイラッときたが、支払いの件もあるため抑える。誰だって金の恩には弱いのだ。

そして、そこから数分たって現在。俺と小町は何をするでもなく、ただひたすらに周りの店をひやかしていた。

「…　なぁ、マジで帰っちゃダメか？」

「えー…　いやまぁ小町もちょっと飽きてきたけどさぁ」

俺の言葉にぶつくさ言う小町だが雪ノ下やあいつがうろついているため、女性ものコーナーに立ち寄れず、若干手持ちぶさたになっている。

そういう俺も特に見たいものがあるわけでもないため、こうして興味もない電器店や書店をうろついてるわけだが。

「あっ！　そうだソウくん！　楽器屋行こうよ！」

「…　ンでだよ、別に今備えで足りないもんはないぞ」
　小町の申し出に難色を示すが、小町は俺の袖をつかんでブンブンと降る。やめろ、脱臼する。
「そうじゃなくて。そういうとこって試し弾きとかできるんでしょ？　ソウくんの歌今聞きたい！」
　小町は目をキラキラ輝かせながらおねだりする。
　まぁ確かにできるにはできるが…
「…　買う気もねぇのに邪魔すんのは失礼だろ。あといちいちチューニングすんのもめんどい」
「むぅ…　　変なところで律儀だな、ソウくんは」
「…　普通だ普通。千葉県民はモラルを守るんだろ」
「でもソウくん関西出身じゃん」
「…　モラル守るんはどこも同じやろが」
「うわっ！　久しぶりに聞いた！ソウくんの関西弁！」
　またどうでもいい俺の秘密がばれたところで、結局俺たちはなにも買わず、どこもよることなく、千葉の方へと帰っていった。
　しかし、今日の出来事のおかげか、小町に振り回され俺の体は疲れているはずなのに、

俺の心中はとても晴れやかだった。
帰りの電車のなかでは、小町の笑顔がはっきり見えたのは気のせいではなかっただろう。

ーーーーーーーーーーーーー

「…　はぁ」
家に帰り服そのままでソファへ体を落とす。
まどろみのなかで今日、小町が言った言葉を思い出す。
俺の味方でいてくれる。それが小町が出した答え。
その答えを心のなかで何度も唱える。それは俺の大きな支えとなるだろう。あの小町が、世界一かわいい妹であろう小町が俺の味方でいてくれるのだ。これほど頼もしいことはない。
しかし、それでも俺の中の罪悪感が消えることはない。
それは俺の側にいると小町に迷惑をかけるだとか、あのとき小町を避けてしまったとか、そんな自己嫌悪的なものではない。
この罪悪感は事実に即し、覆そうもない現実に起きてしまったことに対するものだ。

例えあの小町が側にいてくれても、俺を許してくれても、それが俺に俺を許させない。許してはいけないと嘯いてくる。

だから俺はこの罪を絶対に捨ててはいけない。

「…　そうだろ。金目川」

呟いたところで答えは返ってこない。それが当たり前のことだと分かりながら、俺は気分を晴らすため、ソファに座り直してポケットに入れっぱなしだった携帯をのぞくと、意外な人物からメールが来ていた。

「…　高津か」

見ると着信も来ていた。小町との買い物（なにも買ってない）で気付かなかったようだ。メールを見ると着信しろの一言のみ。メールで伝えろよ。ケイコちゃんとやらといつもやってんだろが。

悪態をつきながらも一応リダイアルをかける。

「…　俺だ。何か用か？」

『オォ！瀬谷から電話なんて初めてじゃん！　どうしたん？』

「…　切るぞ」

1コールで出てきた高津へ早々に本題を問いかけるが、その当人がとんちんかんなこ

とを言い放ってきたのでとりあえず通話を切った。慈悲はない。

何かの満足感が心を満たし、先程までの罪悪感が薄まっていった。あいつも時々役に立つものだなと、高津へ1ミクロほど感謝の意を示していると着信がかかった。高津だ。

「…　ちっ、何のようだ？」

『着信早々舌打ちはさすがの俺も傷つくぞー、瀬谷ー』

「…　何故そういう態度をされるのか自分の心に聞いてみろ。で、何のようだ？切るぞ」

『いや待って！さっきのはほんっとうに俺が悪かったから！切らないで、おねがい！』

「…　分かったから早く用件を言え」

電話口からうるさく謝ってくる高津を宥め本題を促す。つうかうるせぇ、あとうぜぇ…

『あ、そうそう。その事な。確か瀬谷って奉仕部ってところに所属してるんだろ？』

「…　あぁ、不本意ながらな」

高津の質問に素直に返すが、この時ふと疑問に思う。確かにこいつは川崎の依頼のときに奉仕部の存在を知っている。だが何故今それを聞く？いや、分かってる。答えはひとつしかない。

『俺さ、奉仕部にひとつ依頼したいんだけど』

「…　はぁぁぁ」

電話口の高津に聞こえるだろう大きいため息を一つつく。相手に聞こえるほどのため息など失礼以外のなにものでもないが、その相手はあの高津だし別にいいだろう。

「…　で、どんな依頼だ？」

『いや、そんなため息ついたのに引き受けんの？』

「…　断ってもよかったのか？」

『ダメ』

「…　だったら、余計な手間かけるよりかはこっちの方が楽だ」

確かに、と高津の微かな笑い声が返ってくる。

ただ、理由はそれだけではない。これは今の由比ヶ浜結衣の状況への対処のためでもある。

確かに由比ヶ浜は部室に来ていない。だがしかし、由比ヶ浜はまだ奉仕部を辞めてはいない。それは今までに依頼がなく、由比ヶ浜が来なくても別に構わない状況にあったからだ。

しかし、この高津の依頼を引き受ければ、

少なくとも由比ヶ浜を奉仕部へ引っ張り出す口実にはなる。

別に俺がこんなことをする必要などない。いや、するべきではない。由比ヶ浜が自分

の意志で奉仕部に来なくなったのだ。それを俺が無理矢理連れてこようなんて図々しいにも程がある。

だが、由比ヶ浜をこのままにしておいたら、小町が買ったプレゼントはどうなる。小町の気持ちはどうなる。俺の味方でいてくれると言ってくれた、あの幼なじみはどんな顔をするのだ。

自分のためじゃない、由比ヶ浜のためじゃない、雪ノ下のためなんかじゃない。ましてやあいつのためなんかにこんな面倒なことをしてやるものか。

俺はただ、こんなどうしようもない赤の他人である俺の味方と言った、あの素敵な妹に恩を返したいだけなんだ。

「…　そんで、どんな依頼だ？」

『おう。って言っても、実は困ってんのは俺じゃなくて、俺の遊び友達なんだよ。何か今日ゲーセンでめんどくさい人に絡まれたらしくてさー。しかもその人総武高校の先輩だったらしくて、今度校内で話し合うみたいなんだよ。それの仲介役？　みたいなのを誰かにしてほしいんだって』

なるほど。大体わかった。いや、全く事情は理解できんが、状況は把握した。

だから解せない。

「…　それ、お前じゃダメなのか？」

『なんか二人ほしいんだって』

仲介になんで二人必要なんだよ。つうか二人？ちょっと待て。

「…　おい高津。この依頼、他のやつらには…」

『あ、そうそう！　　いい忘れてた！　この話なんだけど、雪ノ下先輩とかには内緒な。何かそいつらも大事にはしたくないみたいでさー。あっごめんケイコちゃんからキャッチ入った詳しくは明日話すからじゃあなーおやすみ』

「…　おい待てやゴラ」

いい終える前に通話は切れていた。キャッチ入ったあたりから早口でまくし立てていたところからケイコちゃんとやらに優先順位が移ったのだろう。明日蹴る。

つうか雪ノ下たちには言うなって…

「…　依頼受けた意味ねぇじゃねぇか」

先程よりも大きなため息をつくと同時に疲れが一気に体に襲いかかってくる。今日は色々と有りすぎた。

問題を先伸ばすかのように、俺は体をソファへ預け重いまぶたを落とす。

きっと明日は今日より疲れるだろう。

さまざまな問題のなかで何故かそれだけは確信できた。